
ロミオとシンデレラ

目白皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロミオとシンデレラ

【Nコード】

N9358U

【作者名】

目白皐月

【あらすじ】

doriko様の「ロミオとシンデレラ」を題材に、黒刃愛様が作成したPVにインスピレーションを受けて書いた作品です。原曲どこういったの状態になると思いますが、おつきあい頂けると嬉しいです。

ピアプロに掲載しているものと重複投稿になります。

注意書き

この作品は、d o r i k o 様の「ロミオとシンデレラ」を題材に、黒刃愛様が作成したP Vにインスピレーションを受けて書いた小説です。

さて、この小説は、以下の設定になっています。

この作品のレンとリンは血縁関係はありません。また、名字が一緒だと話をまとめづらいため（どうしても” N o r e l a t i o n s ! ” のフレーズが頭をよぎって……、て、こんなことを書くとは年がバレるか）、リンとルカを姉妹にしたこともあり、この作品でのリンの名字を「巡音」にしました。

話の都合上、デフォルトの年齢だと無理があるため、二人とも年齢が上がって高校生になっています。また、ミクとクオが同学年の友達として登場します。

後、ここから先は設定変更というより、「この話のための設定」ですが。

リンが超お嬢様（P Vの彼女の家がえらくゴージャスだったのでお嬢様ということにしてしまいました）学校に車で送り迎えしてもらう、なんてことが日本の高校で可能なのかどうかは知らないのですが、そういう設定にしましたので、突っ込まないでください。リン、レン共にかなり真面目なキャラに。その反動でミクははっちゃけたキャラになってしまいました。全員、今までに書いた話とは全く性格が違いますが、これはわかってやってやることです。

そして、かなりの長編になると思います。いや、なんというか、先が見えない……。

それと、原曲が原曲ですので、できたら終盤で若干の大人描写を入れないな〜とか思っています。といっても、予定は未定なので、何とも言えないのですが。ですがものすごく先になるでしょうから、大人描写目当てで読むのはお薦めしません。

更に……

書いているのが私なので、プロットの段階で、物語が原曲を離れて明後日の方向に行ってしまった（汗）って、これ、いつものことか……。

以上の点を踏まえ、「それでも構わない」という方のみ、この先をお読みください。

doriko様の原曲↓<http://www.nicovideo.jp/watch/sm11970012>
o.jp/watch/sm666016
黒刃愛様のPV↓<http://www.nicovideo.jp/watch/sm11970012>

ロミオとジュリエット

ロミオが祭壇に近づいた。横たわるジュリエットに駆け寄って抱き起こし、揺さぶる。だけどジュリエットは動かない。ロミオはジュリエットを抱いて悲嘆にくれた後、動かないその身体を祭壇の上に戻して、両手を胸の上で組ませる。そして毒の瓶を取り出して飲み干し、ジュリエットに口づけてから、その場に倒れる。

入れ替わりにジュリエットが目を覚まし、起き上がる。倒れているロミオを見かけ、笑顔で駆け寄る。恋人が死んでいることにはまだ気づいていない。彼に触れて、死んでいることに気づく。表情が絶望へと変わる。落ちている短剣を拾い上げると、それでためらうことなく胸を刺し、崩れ落ちる。崩れ落ちながら、ロミオの手を握る。

ジュリエットが動かなくなり、幕が降りる。割れんばかりに鳴り響く拍手。再び幕が上がり、舞台の上を、出演者が一人一人現れて、笑顔で頭を下げる。

わたしは鳴り響く拍手の中、手を叩くこともせず、ただ舞台を眺めていた。

カーテンコールも終了し、ホールは明るくなった。舞台を見ていた人々は、席を立ってホールから出て行き始める。そこかしこから、終わったばかりの舞台の感想を話す声が聞こえてくる。

「衣装が素敵だったわね」

「でも、『ロミオとジュリエット』だと、やっぱりちょっと地味じゃない？」

「オーケストラの音が物足りなかった」

「そう？ あれくらいで良かったと思うけどな」

わたしはただ黙ってそれを眺めている。一人で来ているので、あ

れこれ言う相手はいない。それにしても人が多い。休日だから仕方がないか。しばらく待っていると、ようやく通路が適度に空いてきた。プログラムを手に、立ち上がって出口へと向かう。

ロビーに出た時だった。突然、わたしは強く押された。誰かがぶつかったのだ。急なことだったため、わたしはバランスを崩し、床に勢いよく倒れこんだ。

驚いて辺りを見回すが、わたしにぶつかった誰かは、既に立ち去ってしまっていた。小さくため息をついて、立ち上がろうとする。その時、左の足首に激しい痛みが走った。

「……痛っ」

どうやら、さっき倒れた時に変な風に捻ってしまったらしい。足首は、ずきずきと遠慮のない痛みを訴えてくる。が、床に膝をついてうずくまっているわけにもいかない。わたしは無理を押して立ち上がろうとした。その時だった。

「大丈夫？」

誰かがわたしに声をかけてきた。そちらを向くと、わたしと同じぐらいの年齢の男の子が立っている。わたしを見て、驚いた表情になった。

「……あれ、巡音さん？ どうしたの？」

近づいてくると、わたしの近くに膝をついてしゃがみこんだ。わたしの名を知っているということとは、知り合いなのだろうが……顔に見覚えがない。

「ごめんなさい。誰だったかしら？」

向こうはやや呆れた表情になった。

「同じクラスの鏡音レンだよ」

わたしは目の前の男の子を顔をもう一度見たが、やはり思い出せなかった。とはいえ、それをそのまま言ったら失礼になるだろう。

「ああ、ごめんなさい……制服じゃないと感じが違うんでわからないかったの」

鏡音君はふーんと呟いて、わたしに「で、どうしたの？」と訊い

てきた。

「転んだ拍子に足をくじいたみたい」

「立てそう？」

「……多分」

「俺につかまりなよ」

手が差し出される。わたしは差し出された手を取ろうとして、ためらった。そうしていいものだろうか。

「遠慮しなくていいって。足、相当痛いんでしょ？」

重ねてそう言われたので、わたしは鏡音君の手を取った。鏡音君はわたしの腕を自分の肩に回すようにして、わたしを立たせてくれた。

「じゃ、俺に体重かけて」

「え……？」

わたしが戸惑っているうちに、鏡音君はわたしを支えて、ロビーの椅子に連れて行ってくれた。

「ちよつと待ってて」

そう言って、鏡音君はどこかに行ってしまった。わたしは、左の足首に触れてみた。……腫れ始めている。どうやら、かなりひどく痛めてしまったようだ。

どうやって帰ろうか、と考えていると、鏡音君が戻ってきた。手に、氷の入ったビニール袋を持っている。

「ほら、これで足冷やしなよ」

わたしはビニール袋を受け取って、足首に当てた。冷たくて気持ちがいい。

「ありがとう。どうしたの、これ？」

「その売店でもらってきた。足痛めて歩けない子がいるって言うて。……巡音さん、これからどうする？」

そう言われて、わたしは、迎えの車がもう来ているだろう、ということに気がついた。

「迎えが来る予定になっているの。だから、そこまで行けばいい

んだけど」

「迎え？ そう言えば、巡音さんのところって確かすごかったよね」
こういう時は、どう答えればいいのだろう。……わからない。わたしは口ごもった。

「じゃ、そこまで送ってくよ」

「え……いいわよ。鏡音君に悪いわ」

「けど、その足じゃ歩くのも辛いんじゃない？ 俺なら平気だから気にしないでいいよ」

わたしは少し悩んだ結果、鏡音君の申し出を受けることにした。
携帯で連絡すれば来てくれるのはわかっているけれど、劇場のロビーで大騒ぎされるのは見たくない。

「本当にいいの？」

「くどい。男に二言はない」

わたしは鏡音君に助けてもらって、もう一度立ち上がった。

「巡音さん、プログラム忘れてる」

わたしは、ああ、と言って、プログラムを手にとった。それから、彼の肩を借りて、出口へと向かった。

劇場の外に出ると、少し離れたところに、迎えの車が来ているのが見えた。運転手がわたしの姿を見て、血相を変える。……だから嫌なの。

「リンお嬢様っ！ どうなさったんですか！」

「……転んで足を捻ったの。歩くのが辛くて困っていたら」

と言って、わたしは鏡音君の方を見た。

「助けてくれたのよ」

「そうですか。お嬢様がお世話になりました」
運転手が頭を下げる。

「困った時はお互い様ですから、気にしないでいいですよ」

わたしを車の後部座席に乗せると、鏡音君は「それじゃあ、また明日学校で」と言って去って行った。運転手がわたしを見る。……

ああ、鏡音君に口止めしておけばよかった。

「お嬢様、お知り合いで？」

「高校のクラスメイト。会ったのは偶然よ。別に待ち合わせしていったわけでもなんでもないから、勘違いしないで。待ち合わせしていったのなら、むしろ送って来ないわ」

「……そうですか。お嬢様がそう言われるのでしたら」

わかつてる。この人は悪くない。雇い主である父にきつく言われているだけのことから。わたしはため息をついた。

「家に帰る前に病院に寄って」

「かしこまりました」

休日診療している病院で診てもらったところ、かなりひどい捻挫だと言われた。ギプス……とまではいかなかったけれど、嚴重に足首を固定されてしまう。何だか気が滅入ってくる。

手当てが終わったので、家に帰った。こういう時は広い家が恨めしい。足を引きずりながら居間に入っていくと、ルカ姉さんが本を読みながらお茶を飲んでいた。

「ただいま、ルカ姉さん」

ルカ姉さんは本から顔を上げて、わたしを見た。

「お帰り、リン。オペラを見に行ってたの？」

「今日見に行ったのはオペラじゃなくてバレエよ」

「……あら、オペラかと思っていたわ。演目は何だったの？」

「『ロミオとジュリエット』」

説明の必要がないくらい有名な悲劇。有名な作品だから、オペラもあるし、バレエもある。

「シェイクスピアの悲劇ね」

「ええ」

ルカ姉さんはそこまで話すと興味を無くしたのか、視線を広げていた本に戻した。ウェーブのかかった長い髪がふわつと揺れる。今日は休日ですつと家にいたはずなのに、その格好には糸一筋の乱れ

もない。

「ルカ姉さん、お母さんは？」

「多分キッチンでしょう」

ちようどその時、お母さんが部屋に入ってきた。わたしの足を見て、表情を変える。

「お帰りなさ……リン、どうしたのその足は！？」

「転んでくじいたの。全治一ヶ月だって。ただの捻挫だから心配しないで」

「ならいいけど。あまり無理しないで、今日はもうゆっくり休みなさいね。リン、あなたもお茶にする？ クッキーが焼いてあるの」

お母さんの趣味はお菓子作りだ。最近はレシピ本も出したりして、ちよつとは話題になっているらしい。

「じゃあ食べる」

お母さんは、ちよつと待っててね、と言って、奥へと引つ込んでいった。……我が家は見えてのとりの豪邸で、お手伝いさんも複数いる。頼めばお茶ぐらいすぐに来るけれど、お母さんはこういう時、自分で動きたがる。

まもなく、お母さんがお盆に紅茶のカップとクッキーを入れたお皿を乗せて戻って来た。

「たくさん食べて……と言いたいところだけれど、夕食が入らなくなっても困るから、程ほどにね」

「わかつてるわ。いただきます」

お皿の上には、様々な形の型抜きクッキーが乗っている。猫や、鳥や、花の形。どれも色とりどりのアイシングがかかっている。わたしは猫の形のクッキーを手にとった。……当たり前だけど、甘い。わたしが小さい頃から、お母さんはこういう甘いお菓子を作るのが好きだった。小学校の頃は、帰宅すると甘い匂いが漂っているのが、純粹に嬉しかった。たとえそれを口にするのがわたし一人でも、

ロミオとジュリエット（後書き）

曲をモチーフにした長編に取り組んでみることにしました。

……とはいえ、注意書きにも書きましたが、「原曲どこいったの」状態になることはほぼ確実です。

既にリンのイメージがシンデレラというより眠り姫だし……。

今回は、折角なので、今まで使ったことのない手法にも着手してみようと思っています。

その安らぎは薄暗く

次の日、普段どおりに登校したわたしは——車で送り迎えしてもらっているのに、遅刻することはまずない。たとえば足を痛めていても——教室に入ると、自分の席についた。始業まではまだ時間がある。時間を潰そうと、わたしは持ってきた文庫本を広げた。

そんなとき、後ろから声をかけてきた相手がいた。

「おはよう、巡音さん」

振り向くと、鏡音君が立っていた。たった今、登校してきたところらしい。

「あ、おはよう、鏡音君」

「足の具合はどう？」

心配されているみたい。

「捻挫で全治一ヶ月って言われたわ」

「じゃ、当分大変だね」

確かに少々不便だ。でも別に、たいしたことじゃない。

「骨を折ったわけじゃないわ。大丈夫よ」

「まあ、そりゃそうだけど……」

「昨日はありがとう」

「気にしないでいいよ。ところで、何読んでるの？」

わたしは本の背表紙を鏡音君に向けてみせた。

「『椿姫』か」

「ええ」

ちょうどその時、また別の声が飛んできた。

「リンちゃん、おはようっ！」

「あ、ミクちゃん」

同じクラスの初音ミクちゃん。わたしとは幼馴染。

「じゃ、俺はこれで」

ミクちゃんが来たのを見ると、鏡音君は自分の席へと去って行っ

た。ミクちゃんがだだつとこっちに駆け寄ってくる。

「ねえねえリンちゃんっ！ 今話してたの鏡音君でしょ？」

「そうだけど」

「いつ仲良くなったの？」

わたしはため息をつきつつ、ミクちゃんに昨日のことを話した。

劇場のロビーで転んで足をくじいてしまい、困っていたら鏡音君が通りかかって手を貸してくれたことを。

「そんなすごいことがあったんだ……」

話を聞いたミクちゃんは、妙にきらきらした目でこっちを見ている。……どうしちゃったんだろう。

「別にすごくないわ。ただの捻挫よ」

「怪我の話じゃないんだけど……」というか、鏡音君は意外といい人だったのね」

何が言いたいのかわからない。

「ミクちゃんは、鏡音君のことよく知ってるの？」

「わたしはそうでもないけど、クオが仲いいのよ。一年の時同じクラスだったし、部活も一緒だから」

ミクちゃんが「クオ」と呼ぶのは、ミクちゃんの従弟のミクオ君のことだ。ミクちゃんと同じ年で、目下一緒に住んでいる。ミクオ君の両親が、仕事で海外に行っているからだ。ミクオ君、確か演劇部だったわよね。ということは、鏡音君も演劇部なんだ。

ミクちゃんはまだ何か話したそうだったけれど、始業のベルが鳴ったので、自分の席へと戻っていった。

その日の授業は、何事もなく終わった。今日は部活の無い日だったし、ミクちゃんは用事があるというので、わたしは真っ直ぐ家に帰った。

帰宅してみると、お母さんは出かけていた。今度出すレシピ本の打ち合わせがあるって言っていたっけ。居間のテーブルの上に「お

やつにゼリーを作っておいたから、お手伝いさんに出してもらって」というメモが置いてある。わたしはちよつと考えてから、ゼリーには手をつけずに二階へと上がっていった。

一つのドアの前で立ち止まり、叩く。しばらくすると、中から「うーん、誰え？」という声が返ってきた。

「リンよ」

「あゝ、リンか。鍵がかかってないから入ってきていいよ」

わたしはドアを開けて中に入った。広い部屋の中は物が散乱している。平たく言うと、散らかっている、ということだ。ベッドの上で、うずくまる人影が一つ。

「……寝てたの？ ハク姉さん」

「あ……うん、まあね。睡魔に耐え切れなくて」

ぐしゃぐしゃに乱れた髪のまま、ハク姉さんは頷いた。今起きたばかりといった顔をしている。この分だと、朝からずっと寝ていたのかもしれない。

「今は夕方よ」

わたしが思わずそう言うと、ハク姉さんはわたしを睨んだ。

「リン、あんたまで姉さんみたいなこと言う気？」

「そんなつもりじゃ……」

「あゝ、頭痛い……あれ、リン。あんた足どうしたの」

「昨日転んでくじいたの。全治一ヶ月って言われたわ」

「そりゃ大変ねえ」

ハク姉さんは身体を起こすと、ベッドの上に真っ直ぐ座りなおした。わたしは部屋の中に入って、椅子の一つに乗っていたものを下ろし、そこに座る。立ったままだと辛い。

「あんたがここに来るってことは、みんないないのね」

「ええ。ハク姉さん、何か食べる？」

「……あの人の作ったものはいらないわよ」
「いつもこうだ。」

「で、リン。あんたその話するためだけに、あたしの部屋に来たわ

け？」

「……違うけど」

「いらない気回さなくていいわよ」

ハク姉さんはため息混じりにわたしを見た。

「あんたは姉さんみたいにならないでよ。かといって、あたしみたいになってもだめよ。……でも、難しいだろうなあ」

わたしの家庭は少し複雑だ。仕事熱心な父親に専業主婦（本は出しているけれど）の母親、そして三人の娘。長女は父親の許で働いている。次女は大学生、三女は高校生。こう書けば、普通の家庭に見えるだろう。もっともわたしの父は大きな企業グループの社長だから、これからわたしが書くごたごたがなくても、普通の家庭とは言いがたいだろうか。

わたしたちと、今、わたしが母と呼んでいる人には血の繋がりが無い。それだけではない。ルカ姉さんと、ハク姉さんとわたしは母親が違う。ルカ姉さんを産んだ人は、ルカ姉さんが三歳の時に、父と別れて家を出て行った。父はすぐわたしたちの実母と再婚して、ハク姉さんとわたしが産まれた。そしてわたしたちの実母だという人は、わたしが二歳の時にやっぱり父と離婚した。そして父が再婚したのが、今の母だ。子供はできなかつたけれど、離婚することもなく、現在に至っている。

わたしは二歳だったこともあり、実母の記憶はほとんど無い。だから今の母を「お母さん」と呼ぶことに抵抗はない。けれど、その時もう六歳だったハク姉さんは違った。「あんな人お母さんじゃない」と何度も駄々をこねて、父と母を困らせた。その時のことを今も引きずっていて、未だに母のことを「お母さん」とは呼ぼうとしない。

そういったことがどの程度関係しているのか、わたしにはわからない。けれど、ハク姉さんと両親の軋轢は、年を重ねることにひど

くなつていった。学校にもまともに行かなくなり、今ではこうして部屋に引きこもってしまっている。父が何かしたらしく、大学に籍はあるのだけれど、一度も登校したことはない。

そんなわけで、最近では家の中では、ハク姉さんの話題はタブーになつてしまっている。少しでも話題にしようものなら、父は怒り出すし、母は泣き出しかねないからだ。わたしもあれこれ言われるのが嫌で、ハク姉さんの部屋に行くのは、他の家族がいない時にしている。

でも、わたしはハク姉さんのことは嫌いじゃない。……血の繋がった姉だから？ ううん、多分、違う。

その安らぎは薄暗く（後書き）

二話目です。ミクとハクが登場。

リンの家庭の事情を書きながら、三回結婚した某ノーベル賞作家のことを思い出していました。いやあの人とはタイプが違いますけどね。家庭が滅茶苦茶になっているという点は共通してますが。

三話目は語り手が変わります。

クオの困惑（前書き）

今回のエピソードはクオ視点。

クオの困惑

その日の昼、ミクからメールが入った。「放課後ちょっと相談したいことがあるから、いつもの喫茶店に来てね」と書いてある。一緒に住んでいるんだから、わざわざ俺を呼び出さなくてもいいと思うんだが。

ミクは俺の従姉だ。俺の両親は現在仕事で海外赴任中で、俺は父親の兄である、ミクの父のところに中三の時から預けられている。同い年のミクは、外見はすごく可愛い。いや実際、そこのアイドルなんか目じゃないくらいに可愛い。スカウトが来ないのが不思議なぐらいだ。でも性格の方はというと……。

「あつ、クオ！」

放課後、待ち合わせ場所の喫茶店で俺を見かけたミクは、笑顔で手をぱたぱたと振った。

「よっ」

ミクの向かいに座り、メニューを眺める。十月に入ったとはいえ、今日は暑い。注文に来たウェイトレスに、アイスコーヒーを注文する。ミクはアイスココアを頼んだ。

「で、なんだ？ 相談したいことって」

「あ、うん。あのさあクオ、鏡音君と仲いいよね？」

「なんだよいきなり」

レンは高校に入ってから友人で、まあ、親友と呼んで差し支えない仲だ。ちょっと何を考えているのかわからないところがあるが、基本的にはいい奴だと思う。

「調査よ調査。クオ、鏡音君って、今つきあっている人はいる？」

「はあ？ なんでミクがレンの交友関係を気にするんだ。と思いつつ、律儀に答えてしまう自分が悲しい。」

「今はいないはずだけど。去年の今頃に彼女と別れたって聞いてから、新しいのができたという話は聞いてないし」

この前の学祭の時も、来ていたのはお姉さんだけだった。彼女がいたら連れてくるだろう。

「じゃあ今フリーなんだ。ね、前の彼女と別れた理由って何？」

「なんでそんなこと訊くんだよ」

「だって知りたいんだもん。浮気性だったりすると困るし」

誰が困るんだよ。

「なんか……相手の子に別に好きな人ができたらしい。学校が違うからつきあいの継続が難しかったんじゃないのか。詳しいことは聞いてないから俺も知らない」

「じゃ、浮気とか暴力とかじゃないのね。まあ、真面目そうだし大丈夫だと思ったけど。これならOKだわ」

ミク……お前は、テレビの人生相談の見過ぎじゃないのか？

「何がだよ。おいミク、自分一人で納得してないで、俺にちゃんと説明しろ」

ここで、俺はある可能性を思い当たった。

「なあ、ミク……。お前、もしかして、レンのことが好きなのか？」

ここでミクに「はい」と答えられたら、俺はレンとミクの仲を取り持たなきゃならないのか？ そりゃ、レンなら彼氏としても充分ミクと吊り合うだろうが……正直、その光景を想像したくない。……あいつぐらいなんだよ。俺に「ミクを紹介してくれ」って言うて来なかったの。

「え？ 嫌だ違うわよ」

ミクはくすくす笑いながらそう言った。この笑い方からすると……本音だな。ごまかしてるわけじゃなさそうだ。うん。

……って、なんで俺はほっとしてるんだ？

「じゃあ何が『これならOK』なんだ」

「鏡音君とリンちゃんの仲を取り持ってもOKってこと」

……はい？

「どこからそういう話が出てくるんだ」

リンちゃん……巡音さんのことか。ミクのちっちゃい頃からの仲

良しだ。俺はあんまり話したことがないからよく知らない。ミクとはタイプが違うが綺麗な子で、二人で並んで歩いているとかなり目立つ。まあ、「高嶺の花すぎて話しかけがたい雰囲気」でもあるんだが……。巡音さんは巡音グループのトップの娘、ミクはミクで初音コンツェルン社長令嬢で、どちらも筋金入りのお嬢様だから仕方ないかもしれないが。

え？ 俺？ 俺は別にそんな大層なご身分じゃないですよ。うちの父親は、一族の会社を嫌がって飛び出してた変わり者だし。もともと家族としての縁を切ったわけじゃないから、今、俺はここにこうしているわけだけども。

「今日ね、リンちゃんと鏡音君が話をしてたの。それを見てわたしはぴんと来たのよ」

「……何が」

ああ、自分の声がどうしようもなく疲れているのが自分でもわかる。でも、ミクは気づいてくれない。

「あの二人は絶対お似合いだって！」

こぶし握って断言するミク。俺はテーブルの上に突っ伏したくなるのを必死でこらえた。というかさあ……。

「なんでそこでお前が盛り上がるんだよ」

「えゝ、だって、高校生活勉強ばかりじゃ淋しいじゃない？ リンちゃんが彼氏を作るチャンスをものにしてあげるのが、親友の務めってものでしょ？」

どういう理屈だ、それは。つか、余計なお世話って言葉を知らんのか。

「お前だって彼氏いないじゃないかよ。他人の世話焼く前に、自分をどうにかしたらどうだ？」

俺がそう言つと、ミクは怒り出した。

「しょうがないじゃない！ わたしにつりあうようないい男がいないんだから！」

お前の基準が厳しすぎるんだよ、とは、口が裂けても言えないな、

こりゃ。というか、彼氏にしたい男の条件が「世界で一番お姫様って扱いをしてくれる人」ってのは一体何なんだ。そんなこと言っていると、一生彼氏ができんぞ。俺はむっつりした気分で、アイスコーヒーを一口啜った。

「それにしても……お前それだけの理由で、レンに巡音さん押しつける気か」

巡音さんは確かに可愛いけど、俺だったらつきあいたとは思わない。なんつーか、雰囲気がいんだよ。正直、一緒にいたら疲れそうだな。

「クオ……それ、どういう意味？」

「げ、口が滑った……ミクの目が据わっている。俺の背筋を冷たいものが流れ落ちた。」

「ミ、ミク……そんな怖い顔するな」

「『レンに巡音さん押しつける』って、どういつつもりで言ってるの？ リンちゃんはわたしの友達よ？ クオは、リンちゃんをそういうふうに通ってるの？」

「う……本音を言ったらミクに確実に殺される。何とかごまかさないで。」

「い、いやだからさ……レンの気持ちはどうなるんだよ？ お互いの気持ちが大事だろ。レンにせよ巡音さんにせよ、好みは逆かもしれないぞ」

必死で言い訳を探した結果、出てきた台詞はこれだった。

「それは……まあそうだけど……」

不承不承という様子でミクはそう言った。どうやら、最悪のルートは免れたらしい。

「でも、うまくいくかもしれないでしょ？」

ミクは思ったよりもしつこかった。何をそんなに必死になってるんだろ。俺にはさっぱりわからん。

「可能性がないとは言わないが……」

「じゃあやるわよ」

「何を」

「二人の仲を取り持つの！」

勘弁してくれ。何で俺がそんなことしなくちゃならないんだ。

「クオ、手伝ってくれるわよね？」

そんな面倒なことに関わりあうのは嫌だ。けど、そう言ったらミクが怖い。何をされるかわからない。

「……わかったよ。で、俺は何すりゃいいんだ。言っとくけど、レンを巡音さんときあうよう説得するのは無理だぞ」

「そんなこと頼まないわよ。あのね……」

嬉々として「作戦」とやらを話し出すミク。何が楽しいのか知らないが異常にはりきっている。

すまん、レン。俺の日常の平穩のためにも、お前は巡音さんとうまくいってくれ。

クオの困惑（後書き）

ミクオを書くのはこれが初めてです。あ、それを言ったらハクもか。この話の場合、主役二人が序盤はあまり積極的に動いてくれないので、どうしても両サイドで背中を押してやる人が必要なんです。レンサイドのそのキャラクターを誰にするのかはかなり悩んだんですが、最終的にミクオになりました。カイトの年齢を下げることも考えたんですが、どうもイメージとあわなくて……。

余談ですが、ハイテンションなミクは書いていて楽しい。

まるでもの凄い鍛冶屋の中に

劇場で足をくじいてから一週間が過ぎて、また日曜日がやってきた。もともと予定の入っていないかった日だし、足もまだ痛むので、当初は自宅で大人しくしている予定だった。けれど、ミクちゃんから「うちに遊びに来ない？一緒にホームシアターで映画でも見ましょう」とお誘いが来たので、出かけることにした。

「リン、出かけるのか？」

出かける支度をして階下に行くと、珍しくお父さんがいた。お父さんは仕事が忙しいので、休日でも家にいることは少なかったりする。

「ええ。ミクちゃんからお誘いが来たから、ミクちゃんの家に行ってきます」

「向こうのご家族に失礼のないようにな」

ミクちゃんのお父さんが経営している初音コンツェルンは、巡音グループとは深い繋がりがある。だから、わたしの交友関係にうるさいお父さんも、ミクちゃんとのつきあいだけは口を挟まない。……いや。

本当のことを言うと、一度だけ挟もうとしたことがあった。

……思い出しちゃ、だめ。

「行ってきます」

家を出ようとすると、お母さんが「これを持っていきなさい」と、ケーキを入れた箱を渡してくれた。ミクちゃんは甘いものが好きだから喜ぶだろう。わたしは家を出て、車でミクちゃんの家に向かった。

「リンちゃん、いらつしゃい」

ミクちゃんの家には、ミクちゃんしかいなかった。

「ミクちゃん、お父さんとお母さんは？」

「今日は二人とも、イベントがあるとかで出かけてるの。さ、あがつてあがつて。あ、それ何？」

ミクちゃんはめざとい。わたしは「お母さんから」と言って、ケーキの箱を渡した。ミクちゃんは箱を開けて、中のケーキを確認すると、嬉しそうな顔になる。

「わあ、お手製ケーキだ。リンちゃんのお母さんにありがとうって言うておいてね」

ミクちゃんはお手伝いさん呼んで、ケーキの箱をことづけた。

「今日の映画はDVDコレクションからえりすぐったのを用意してあるから、楽しみにしててね」

わたしはミクちゃんと一緒に、ホームシアターが設置してある奥の部屋に向かった。

「リンちゃんは座ってて。今映画の準備するから」

言われたのでソファに座る。目の前のテーブルには、DVDが何枚も積んであった。ミクちゃんはその中から一枚を手取る。と、その時。部屋のドアがバタンと音を立てて開いた。

「あれ、ミク。お前、なんでここにいるんだ」

入ってきたのは、ミクちゃんの従弟のミクオ君だった。それと、何故か鏡音君が一緒にいる。

「あ、クオ。今日はリンちゃんと映画を見ようと思って」

「ちよつと待て。今日は俺がホームシアター使う日だぞ」

「そんなの聞いてない」

ミクちゃんとミクオ君は、何やら揉めはじめた。

「何言ってるんだミク。俺、昨日ちゃんと話しただろ」

「聞いてないってば」

「お前、先週もホームシアター独占してただろ。今日は譲れよ」

「えゝ、嫌ゝ。折角リンちゃん呼んだんだし」

「やかましい。こっちだって都合があるんだよ」

二人の口論は収まらない。わたしは困ってしまった。

「ミクちゃん……。わたし、今日は帰ろうか？」

「ダメっ！ リンちゃんがクオに遠慮することないのっ！」

「あゝ、じゃあ俺が帰る」

「レン、帰るんじゃないっ！ 俺をこの状況で一人にするなっ！」

わたしは、思わず鏡音君と顔を見合わせてしまった。これじゃあ帰るに帰れない。どうしたらいいんだろう？

と、ミクちゃんが立ち上がった。

「……ちよつとクオと話をつけてくるから、リンちゃんはここで待って。帰っちゃダメだからね」

「レン、俺が戻ってくるまで勝手に帰るなよ」

ミクちゃんとミクオ君は部屋を出て行き、わたしは鏡音君と部屋に残されてしまった。……なんだか気まずい。こんな風に、よく知らない人と部屋の中で二人きりになるのは初めてだ。

「……いつも、ああなの？」

ちよつとしてから、鏡音君がそんなことをわたしに訊いてきた。

「え、いつもって？」

「クオと初音さん」

「大体あんな感じかな」

ミクオ君のことはよく知らないけれど、ミクちゃんといるといつも賑やかなのは確かだ。

「大変だなクオも。あ、そっち座っていい？」

わたしが頷くと、鏡音君はソファの少し離れた位置に座った。

「あの二人、どれぐらいで戻ってくると思う？」

「さあ……わたしも、あんなに派手に揉めてるのは初めて見たし」
わからない、としか言いようがない。

「クオの奴一体何やってんだか……。そっぴや巡音さん、足の具合はどう？」

「まだ痛いけど大丈夫よ」

「巡音さんは、初音さんとは仲いいの？」

「ええ。幼稚園の頃からのつきあいだから」

「そりゃ長いね」

そこで一度話が途切れた。そのまま沈黙が落ちる。ものすごく気まずい。

ミクちゃんとミク才君はなかなか戻ってこない。早く戻ってきてくれないだろうか。

「巡音さんたちは、今日は何見る予定だったの？」

唐突に、鏡音君が口を開いた。

「え？」

「いやだからさ、映画。俺とク才はホラー見る予定だったんだけど、そっちは何を見る予定だったのかわかって思っ」

「聞いてないの。ミクちゃんは『楽しみにしてて』としか言わなかったし。でも、多分ラブコメじゃないかな」

ミクちゃんはラブコメや青春映画が好きだ。そういう映画を見る時のミクちゃんは、とても楽しそう。

「初音さんはラブコメが好きなのか。ク才はああいうの苦手みたいだけ」

「そうなの？」

「前そういう話をしてたよ。あれじゃ度々揉めてるだろうね。巡音さんは？」

わたしは鏡音君が何を訊きたいのかよくわからず、返事に詰まってしまった。

「だから、ラブコメとかが好きなの？ それとも悲恋物の方がいい？」

「え……」

あんまりそういうことを考えたことはない。だから、答えようがない。ああもう、ミクちゃん早く戻って来ないかな。

「単純にどっちが好きなのかって話なんだけど。あ、どっちも好きなの？」

「……………」

「この前『ロミオとジュリエット』見てたし、『椿姫』読んだりし

てたから、巡音さんって悲恋物が好きなのかって思ってたんだよね」
「あれは、たまたまそういう組み合わせになっただけで……」

『ロミオとジュリエット』を見に行ったのは、いつも行く劇場にかかっていたからであって、別にあれが『コッペリア』でも『くるみ割り人形』でも構わなかった。『椿姫』にしても、適当に家の書棚から持ってきただけであって、是が非でも読みたかったわけじゃない。

「……巡音さん、俺何か悪いこと訊いた？」

不意に、鏡音君がそう口にした。

「え？」

「あ……いや……」

……また沈黙。何だか息苦しい。時間だけが過ぎていく。時計の針の音が、何だか妙に大きく聞こえる。

やっぱり帰ってしまおうか。と、その時。ドアが開いた。

「ごめんね、二人とも。待たせちゃって」

ミクちゃんとミクオ君が戻って来たのだ。わたしはほっとして、大きく息を吐いた。

「ミクちゃん、お帰り」

「とりあえずクオとは話がついたから」

につこりと笑って、ミクちゃんは隣のミクオ君を見た。

「で、結論は？」

鏡音君が尋ねる。

「うん。今日のところは四人で揃って映画を見ようって」

……え？ わたしは思わず鏡音君の方を見た。鏡音君もこの結論は予想外らしく、驚いている。

「クオ、お前、それでいいの？」

「しょうがねえだろ。レン、悪いが今日はつきあってくれ。俺、この状況で一人になりたくない」

「というわけだから、詰めて詰めて」

ミクちゃんがソファにやってきて、わたしを軽く押した。わたし

は押された方向、つまり鏡音君が座っている方向に詰める。ミクちゃんもわたしの隣に座った。

「じゃんけんでわたしが負けたから、最初の映画はクオが選んだ奴だけど、リンちゃん、辛抱してね」

「ミク、お前、一々うるさいよ」

プレイヤーにDVDをセットしているミクオ君が、不満そうにそう言った。リモコンを手に、ミクちゃんの反対側の隣に座る。

そして、映画が始まった。

「クオのバカっ！ 変態っ！」

「……………」

「何考えてんのよっ！ 信じられないわっ！」

「……………」

映画上映会は十分も経たないうちに中止に追い込まれていた。ミクちゃんが悲鳴をあげて、ミクオ君の首を絞め始めたからだ。

「あんなグロい映画見せるなんてっ！ クオの悪趣味悪趣味悪趣味っ！」

「……………」

ミクオ君が再生したDVDは、鏡音君がさっき言ったとおり、ホラー映画だった。ゾンビが人を襲う話、らしい。らしいというのは、よく見ている暇がなかったから。で、画面にそういうシーンが映るやいなや、ミクちゃんが盛大な悲鳴をあげ、ミクオ君に飛び掛かったというわけだ。

「ねえ、巡音さん」

リモコンの停止ボタンを押した後で、鏡音君がわたしに声をかけた。

「何？」

「初音さんって、ホラー苦手だったりする？」

「……そう言えば、わたし時々ミクちゃんと映画見るのだけど、ホ

ラーは一緒に見たことがないわ。わたし、ホラー映画って見たの、これが初めて」

ミクちゃんは相変わらず叫びながら、ミクオ君の首を絞めている。ミクオ君、顔の色が変わってきているような……。

「初音さん初音さん」

見かねたのか、鏡音君が立ち上がって、ミクちゃんの肩をばんぽんと叩いた。

「それくらいで勘弁してあげて。クオ、白目むいてる」

ミクちゃんは我に返ったのか、ミクオ君の首を絞める手を放した。ミクオ君の頭がソファの腕木にぶつかって、鈍い音を立てる。でも、ミクオ君は動かない。

「きゃーっ、クオ、しっかりしてっ！」

ミクちゃんは今度はミクオ君を揺さぶり始めた。その度にミクオ君の頭が腕木にぶつかってるとるんだけど……。

「ねえ、ミクちゃん……そっとしておいてあげた方がいいんじゃないの？」

「リンちゃんっ！ クオが起きないっ！ どうしようっ！」

ミクちゃんはミクオ君を離すと、わたしにしがみついてきた。また鈍い音が……。

「えっと……多分大丈夫よ」

わたしはミクちゃんの頭をそつと撫でた。鏡音君がミクオ君の近くにしゃがみこみ、軽く頬を叩く。

「おい、クオ。生きてるか？」

「う……」

ミクオ君は首をさすりながら起き上がった。良かった、無事だったみたい。

「ほら、ミクちゃん。ミクオ君は大丈夫だったから」

「悪いが……全然大丈夫じゃねえ……ミク……俺を殺す気が……」
ぜいぜいと荒い息をしながら、ミクオ君はそう言った。

「クオ、良かった！ 生きてたのね！」

ミクちゃんは、今度はミクオ君に抱きついた。

「誰の……せいで……死にかけたと……」

「あーん、クオ！ ごめんなさいっ！ わたしがやりすぎたわ！」

ミクちゃんも反省はしているらしい。ミクオ君の方も、それ以上追求する気は無くしたようだ。

「で、映画はどうする？」

「ホラーは嫌よっ！」

鏡音君の質問に、ミクちゃんが叫ぶ。

「じゃあ、初音さんが見たい映画を見るということで。それでいい？」

鏡音君がわたしの方を見たので、わたしは頷いた。ミクオ君も「もうそれでいいよ……」と、投げやりに言う。

「じゃあわたしのお薦め映画を……」

ミクちゃんが立ち上がって、DVDをプレイヤーにセットする。

そうして、邪魔ばかり入った映画上映会は、再開したのだった。

まるでもの凄い鍛冶屋の中に（後書き）

もちろん、前半のクオとミクは本気で喧嘩しているわけではあり
ません。

後半は本気、ですけどね。クオごめんよ。

クオの受難

ミクが立てた「レンと巡音さんをくつつけよう大作戦」というのは、二人を同時にミクの家呼び出して、話す機会を作ってあげよう、というものだった。

「そんなんでうまく行くのか？」

「絶対うまくいくわよ！」

俺にはちつともうまくいくとは思えないんだが、協力を約束した手前、仕方が無い。

というわけで、俺は休日、「一緒に映画見ようぜ」とレンを呼び出した。レンは「映画なら映画館で面白そうな新作やってるからそっちに行こう」と言い出したが、俺がレンが以前から見たがっていた少し古いホラー映画のDVDを入手したと言つと、こっちに来る気になった。つーかこれ、この口実作るためにわざわざネットで購入したんだよな。買つといて正解だった。

……はあ、俺、何やってんだ？　なんで彼女もいないのに、他人の色恋沙汰（つていうか、色恋沙汰ですらないぞ）に首を突っ込まなくちゃならないんだ。ああもう、ミクの奴！

俺がレンを連れてホームシアタールームに入ると、ミクと巡音さんはもう来ていた。予定どおり、俺とミクはどっちがホームシアターを使うかで喧嘩を始める。レンも巡音さんも嘖然としてこっちを見ていたが、仕方がない。

話をつける、という名目で、部屋を後にする。そして俺とミクはとりあえず、ミクの部屋に移動した。ミクいわく「二人つきりにしてあげれば、何かしら話すはず！」とのことだからだ。まあ、確かに話ぐらいはするだろう。その中身までは保証しないけど。

「ところで、第一段階（二人を呼び出して、二人つきりにする）はうまくいったけど、この後はどうするんだ？」

「適当なところで部屋に戻って、四人で映画を見ましょう。何も見

ないと変だと思われるし。うまくいけばこれで更に親密度がアップするはずよ」

現実にはゲームじゃないんだがなあ。映画を見ようって意見に異論はないけど。

「ミク、映画は何を見るつもりなんだ？」

「ラブコメよ。とびきりキュートな奴」

うへえ。俺、はつきり言って恋愛映画って嫌いなんだよな。あれのどこが面白いのか教えてほしいぐらいだ。

「先に俺が選んだ奴見てもいいか？」

「何？」

「ホラー映画」

ミクが顔をしかめた。

「わたしがホラー嫌いって知ってるでしょ？」

知ってるよ。でも、俺だってお前の恋愛映画につきあわされるんだから、お前もこっちにつきあうぐらいのことはしろ。

「おい、ミク。お前、二人の仲を取り持ちたいんだろ。だったらホラーを見せた方がいい」

「どうして？」

「うまくいけば、巡音さんが怖がってレンに抱きつくかもしれないぞ」

俺がそう言うと、ミクは思案する表情になった。

「うーん、でも……」

「ミク、アメリカじゃホラーはデートムービーの定番だ。きゃーっ怖いって抱きつかれたら、どんな男だって悪い気はしないっ！」

男の方が先に抱きつくともうド激減だけど、レンの奴はホラー好きだから大丈夫だろう。

「絶対ホラーの方が盛り上がるって！ 俺を信用しろ！」

「うーん、なら、いいけど……」

よっしゃっ！

「ミク、お前も映画が始まったら俺に抱きつけ」

「なんでそうなるのよ？」

「巡音さんがお前に抱きついたら困るだろ。先にお前が俺に抱きついておけばそれを防げるじゃないか」

「……………」

いてて。ミク、俺をつねることはないだろ。

ホームシアターの設置してある部屋に戻ってみると、レンと巡音さんは気まずそうな表情で、無言でソファに座っていた。どう考えても計画は失敗しているとは思えないんだが、ミクは認めないだろうなあ。

そして、俺が持ってきたゾンビもののホラー映画を鑑賞し始めたわけだが、映画が開始してそんなに経ってないのに、ミクがキレて俺の首を絞めたため、ホラー映画鑑賞はそこまでになってしまった。うう、首がまだ痛いぜ……ミクの奴なんであんなにバカ力なんだ。

ミクが「もうホラーは嫌だ」と強く主張したため、残りの時間はミクお薦めのラブコメ映画とやらをひたすら見る羽目になってしまった。たく、何の苦行だよ、これは。

映画を一本見てから昼食を持ってきてもらい、それからもう一本映画を見てお茶を飲むと、巡音さんは「門限があるから」と言って帰ってしまった。今回の結果にミクは不満そうだが、仕方がないだろ。ああ、後でどうやってなだめよう。いや、それよりもこんなバカな計画、諦めさせる方が先か。

巡音さんが帰ると同時にミクは部屋に引き上げてしまい、ホームシアタールームに残っているのは俺とレンだけだ。

「俺もそろそろ帰るけど、クオ、ちよつといいか？」

「なんだよ」

「今日見れなかったホラー映画、借してくれ」

「ああ、別にいいぜ。今日は悪かったな。ミクと鉢合わせしちまっ

たせいで、お前まで恋愛映画につきあわせちまつて」

不意に、レンは俺を真面目な表情でじーっと見た。

「……なんだよ」

「訊きたいことがあるんだ。クオ、お前、俺に何か隠してないか？」

……げっ。いきなり何を言い出すんだこいつは。

「……な、何だよいきなり。そ、そんなことないだろ」

俺がそう言うのと、レンは大げさにため息をついた。

「お前さあ、その態度だけで『はい、俺は何か隠してます』ってバ
レてるよ？」

うるさいっ！

「そもそも、昨日の時点で変だと思ったんだよ。お前、自分の家——
ってか、初音さんの家か——に人呼びたがらないだろ。なのに今
回に限ってはやけにしつこかったし。何がしたかったんだ」

「別に深い意図はねえよ」

レンはもう一度俺をじーっと見て、またため息をついた。

「クオ。正直に全部喋らないと、この前の合宿でのこと、初音さん
に話すぞ」

「レン、あのことは他の奴には言うなって言っただろ！」

「うん、だから、黙っててやるから、隠し事があるんならここで全
部白状しろ」

くそう……これは脅迫じゃないか。俺はどうしたらいいんだ？

例の件をミクに話されるのは絶対嫌だ。かといって、ミクと立てた
「レンと巡音さんをくつつけよう大作戦」のことを話すのはレンの
反応が怖い。それに、喋ったことがミクにバレたら、確実にミクが
……。

背筋を冷や汗がだらだらと流れる。なんで十七の若い身空でこん
な思いしなくちゃならないんだ。……俺が一体何をしたって言うん
だっ！

「で、クオ、どうするんだ？」

……俺は必死で、レンが納得してくれそうな言い訳を探した。

「えーっと……誰にも、特に、ミクと巡音さんには絶対に言うなよ？」

「わかったからとつと喋れ」

「ミクと一緒にホラー映画を見たかったんだ」

「……なんだよそれ」

「最後まで聞いてくれよ。ミクはホラー映画が嫌い、俺がホラーを鑑賞してる時は絶対よりつかない。そんなミクと一緒にホラーを見るにはどうしたらいいか！」

「こつちを見るレンの視線が俺に突き刺さる。きつと今「こいつはアホか」と思ってるに違いない。」

「それで初音さんの予定を調べて、わざわざ巡音さんが来る日を選んで、俺を呼んだわけ？」

「だって一人だと逃げられるだろ。誰かいたら逃げづらいじゃないか」

レンの視線がますます冷たい。

「うまくすれば、ミクがきゃーって叫んで俺に抱きついてくれるかもって、思ってたんだよ……悪かったな」

「……良かったな、夢が叶って」

そんな呆れた声で言うことないだろ、お前はっ！

「ホラーが嫌いという人にホラーを見せるのは、はっきり言って悪趣味だよ」

わかってますよ。っていうか、予定なら巡音さんがお前に抱きつくはずだったのに。なんでこうなったんだ。あつちは全然怖がってなかったし。

「せめてもうちょっと大人しいのにできなかったのか？」

大人しいホラーなんてホラーじゃねえ。

「ゾンビはホラーの王道だろ。お前だってゾンビ映画好きじゃねえか」

「ホラー苦手な人と一緒に見たいとは思わない」
ぐっ。反論できない。

「もう二度としねえよ。さすがの俺も懲りた。たく、巡音さんぐらいミクも落ち着いてくれりゃいいのに……」

「あれは落ち着いてたんじゃなくて、初音さんが騒ぐから画面に集中できなかったんだと思う」

「さいですか。っていうか、お前、あの状況で巡音さんのことまで見てたのか。」

「お前、巡音さんのことどう思う?」

「何だよ藪から棒に」

「いいから答えてくれ」

もしレンがきつぱり「好みじゃない」って言ったら、それを口実にミクを止められるかも。

「クオは、巡音さんのことどれくらい知ってる?」

おい、質問したのは俺だぞ。

「あんまり知らん。ミクとは仲いいけど、俺はほとんど話したことないし」

「巡音さんの口ぶりだと、よく遊びに来てるみたいだったけど。それで全然話す機会ないわけ?」

多少の話はしたらしい。

「だって俺あの子に用事ないし、たまに話しかけても黙り込んで、結局はミクが代わりに話すし。ミクも何だか俺に冷たいし。」

で、お前は巡音さんのことどう思うわけ? まだ質問に答えてもらってないぞ」

「ごめんもう一つだけ教えてくれ。初音さんの方が、巡音さんの家に遊びに行くことは?」

「ねえよ」

いつも遊びに来るのは巡音さんの方だ。

「で、お前いい加減に俺の方の質問にも答えるよ」

「何だったわけ?」

おい。いくら温厚な俺でも怒るぞ。

「巡音さんのことどう思うのかって、さっきから何度も訊いてるだ

る」

「お前は俺にそれ訊いてどうしたいわけ？」

「レン！ 質問に質問で返すなよ！」

「だってお前の意図がわからないし」

「ああもつつ！」

基本的にはいい奴だけど、時々こういうよくわからない理屈使うんだよな。

「……お前の気持ちもわかんないけど、そういうのはよくないと思うぞ」

「は？」

「じゃ、俺は帰るよ。あ、クオ。DVD」

俺はDVDをレンに渡した。さーて、後はミクか。多分機嫌悪いだろうなあ……。つかレン、お前結局肝心なこと返事してねえじやねえか。

クオの受難（後書き）

（おまけ 没にした会話）

「せめてもうちょつと大人しいのにできなかったのか？」

「例えば？」

「『血の祝祭日』とか」

「血ドバドバのスプラッタ映画じゃねえかそれ！ どこが大人しいんだ」

「だってあの映画、低予算な上に素人だらけだから、画面がめちゃくちゃチープだろ。それにあのなんとも言えないしょぼいBGMを聞くと、むしろ笑いがこみ上げてくるんだけど」

「そりゃそうだが……ミクにやわからないだろうし、見たら確実にぶっ倒れる」

「じゃあ『エス』」

「見た奴が鬱になるって有名な映画だろ！ 全然大人しくねえよ」

「実際の事件がベースだから説得力あるかと思ったんだけどなあ」

「ありすぎて逆に怖いんだよ！ 俺も普通のホラーなら好きだけどああいうのはパス！」

「じゃ『ピアニスト』」

「それホラーじゃねえじゃん！ 主人公が変態っただけで！ ミクと一緒に見たら間違いなく俺が誤解され……レン、お前、俺をからかってるだろ」

「あ……バレたか」

最後のは見せたら、リンが確実に失神するな……。つーかどれも高校生が見る映画じゃないし、こんなの日常的に見てたらレンとクオが単なる変人になってしまう。……という理由で没にしたんです。

あ、『ピアニスト』は真面目な映画です。カンヌで賞貰ってます

し、原作者はノーベル賞取ってるし。でも、主人公はどう見ても頭がおかしい。一応下調べして、覚悟はして見ていたんですが、自傷のシーンなんて見た時、冗談抜きで叫びたくなりました。

ガラスの覆い

あれこれあつた上映会から帰ると、玄関の前に見覚えのある高級車が止まっていた。……神威さんが来てるのね。

家の中に入ると、応接室の方からお父さんの機嫌の良さそうな声と、それに相槌を打っている神威さんの声が聞こえてきた。神威さんは、ルカ姉さんの婚約者。お見合いをしたのは二年前。話はあつという間にまとまり、一ヶ月ぐらいで二人は婚約した。我が家は娘しかいないから、神威さんは婿養子に入ることになっている。お父さんとしては、すぐにでも式をあげさせたかったみたいだけれど、神威さんが「若輩者なので結婚はもう少し待ってほしい」と言いだしたので、二人はまだ婚約者のままだ。

でも、そんなにしないうちに結婚するんだろうな。ルカ姉さんと神威さん。

わたしもいずれ、ルカ姉さんみたいに、お父さんが連れてきた人と結婚するんだろうか。……なんだか、胸の中がもやもやする。わたしはため息を一つついて階段をあがると、ハク姉さんの部屋へと向かった。ドアを叩く。

「……誰？」

「リンよ」

答えると、ハク姉さんの驚いた声が返ってきた。

「あんたどうしたのよ？ お父さん、今日は家にいるんでしょ？」

「……まあいいわ」

鍵が開く音がして、ドアが開いた。わたしはそつと部屋の中に入った。

「あれ、リン。出かけてたの？」

外出着のままのわたしを見て、ハク姉さんはそう訊いてきた。

「うん。ミクちゃんの家に行っていた」

「ふーん……楽しかった？」

「色々ありすぎてよくわからない」

ミクちゃんだけじゃなくて、ミクオ君と鏡音君がいて。ミクちゃんとミクオ君が喧嘩して、わたしは鏡音君と二人きりで部屋に残されて、二人で気まずい時間を過ごして。ミクちゃんが戻って来てからは、ミクオ君の選んだホラー映画のせいで、ミクちゃんがミクオ君の首を絞めちゃった。幸い、ミクオ君は無事だったけど……。その後は、ミクちゃんの好きな映画を見て、ミクちゃんはとても楽しそうだった。それからみなでお昼ご飯を食べて、もう一本映画を見て、で、お母さんが持たせてくれたケーキでお茶にして。ミクちゃんが「リンちゃんのお母さんって、本当にケーキ焼くの上手ね」って、言ってくれたんだっけ。

「何よそれ」

「そうとしか言いようがなくて……」

この前の椅子は、幸いそのままだった。わたしはそこに座る。ハク姉さんはベッドに腰かけた。その脇に、開きっぱなしの本が伏せてある。わたしが部屋に来るまでは、本を読んでいたらしい。

「ハク姉さん、何読んでたの？」

「ちよつと前の外国の小説」

「どんな話？」

「悲恋物。つまんない。……なんであたし、こんなの読んでるんだか。で、用件は？」

「特にないんだけど……ちよつとだけ、ここにいてもいい？」

「ちらかってるのが気にならないんならね」

わたしは頷いた。内心、ちよつとは片付けた方がいいんじゃないかとは思っけれど……言ったらハク姉さんは怒るだろう。わたしは、しばらくそのまま椅子に座っていた。

「……リン、何か嫌なことでもあった？」

「……別に」

ハク姉さんは大きなため息をついて、わたしを見た。

「気になってることがあるんなら言いなさいよ」

「下に神威さんが来てる」

「神威……ああ、姉さんの婚約者ね。……なら、お父さんは当分神威さんの相手をしてるか」

ハク姉さんは天井を見上げて、子供みたいに足を揺すった。

「ルカ姉さん、神威さんと結婚するのかな」

「するんじゃない？　姉さんだもの」

「ルカ姉さんは、それでいいって思ってるのかな？」

「思ってるんじゃない？　そういう人よ」

「……どうして、なんだろう。」

「……ハク姉さんだったら結婚する？」

「さあ？　あたしは失敗作だからね。あたしの意見なんか参考にならないわ」

わたしの質問に、ハク姉さんは自嘲気にそう答えた。

「そういう言い方は止めてよ」

「事實は事實よ。姉さんは成功作で、あたしは失敗作」

「……わたしは何も言えなかった。」

お父さんは、多分、そう思っている。ルカ姉さんは成功作で、ハク姉さんは失敗作だって。

じゃあ、わたしは、何なんだろう……。

「……リン？」

気がつくと、ハク姉さんが心配そうにこっちを見ていた。

「あんた平気？」

「……わからない」

息をするのが苦しい。そう思う、時がある。

空がわたしにのしかかってくる。昔読んだ本の中のそんなフレーズを、わたし何故か思い出していた。

ガラスの覆い（後書き）

色々と話の設定を考えているうちに、この家庭環境でルカさんがフリーなのはちよつとおかしいのではないかと思ったので、急遽婚約者を設定しました。相手はがくぽです。……ごめんがくぽ。

後、多分、下の名前はさすがに「がくぽ」ではないと思います。だって……ねえ。

ところで、この作品には、実はレンとミクの視点のバージョンが存在します。もともとは頭の中を整理するために書いていたんですが、割とまとまっているので、これはこれで読めるんですが。これも掲載していった方がいいのかなあ……。

わたしが街を歩くと

登校して、ミクちゃんとお喋りして、授業を受ける。授業が終わったら、部活のある日は部活動。それが無い場合、大抵は真っ直ぐ家に帰る。帰宅後は家庭教師の先生について勉強。それが、わたしの日常。何事もなく、日は過ぎていく。

そんな、ある日の放課後。授業が終わって帰り支度をしていると、携帯にメールが届いた。差出人は運転手さん。「まことに申し訳ありませんが、車に問題がありました。お迎えに行くのが遅くなります」と書かれている。今日は部活も無いし、ミクちゃんはミクオ君と約束があるとかで行っちゃったし……。どうしよう。

ちよつと考えた結果、わたしは図書室に寄って行くことにした。あそこなら簡単に時間が潰せる。書棚に向かうと、わたしはざっと見回して、手ごろな本を探した。どれにしようかな。……これでもいいか。

近くにあった一冊を手にとって、わたしは閲覧席の方へと向かった。……あれ。

鏡音君がいる。イヤフォンをつけて、何か……プリントの束かな？ そんなものをじつと見ながら、ノートに何か書いている。

立ったまま、わたしはなんとなく鏡音君を見ていた。なんだか、最近しよつちゆう顔をあわせている気がする。勉強中なら、邪魔したら悪いかな。そう思った時、鏡音君が顔をあげた。……目があっちゃった。

どうしよう……。でも、無視するのも変な気がする。わたしは本を抱えたまま、鏡音君の座っている席の方へ歩いて行った。図書室の勉強用の机は四人がけだけど、鏡音君は一人で座っているの、他の三つは空いている。

「ここ……空いてる？」

鏡音君が頷いたので、わたしは向かいの席に座った。持ってきた

本を開いて読み始める。

「何読んでるの？」

不意に、鏡音君がそう訊いてきた。もちろん、図書室だから声は小さい。わたしは本を立てて、鏡音君に表紙が見えるようにした。

「どういう話？」

「……さあ。まだ読み始めたばかりだから」

そもそも適当に持ってきた本なので、あまり中身のことは気にしていない。時間が潰せればいいのだし。

わたしは読書に戻ろうとしたのだけれど、どうも集中できない。さつきは向こうが声をかけてきたわけだし、ちよつとくらいなら、こつちが話しても大丈夫かな。

「鏡音君は、勉強？」

「いや、これはただの趣味」

鏡音君がプリントの束を見せてくれた。英文がびっしり書いてある。……詩みたい。

「詩？」

「歌の歌詞。これのね」

鏡音君は、ポケットから携帯プレーヤーを取り出した。さつきからイヤフォンで聞いていたのはそれだったみたい。

「聞いてみる？」

わたしはどうしようか考える。断るのも悪い気がしたので、頷いた。鏡音君がイヤフォンを渡してくれたので、それを耳に差す。鏡音君が手元のプレーヤーのボタンを押した。

「……ひゃっ！」

いきなり激しい音が鳴ったので、わたしはびっくりして声をあげてしまった。……何なのこれ？ わたしはそのまま、鏡音君が停止ボタンを押して音楽を止めるまで、固まってしまっていた。

「……大丈夫？」

気を使わせないわけじゃないのに。……どうして、こうなんだろう。

「ごめんなさい。こういうの初めて聞いたから、驚いちゃって」

わたしがそう言つと、鏡音君は怪訝そうな表情になった。

「巡音さんは、普段はどんな音楽を聞いているの？」

「クラシックだけど」

もつと小さい頃は童謡とかも聞いていたけれど、中学に入った頃からはクラシックしか聞いていない。

「クラシックが好きなんだ」

「……多分」

他に選択肢はないというのもあるけれど……でも……多分、嫌いではない、と思う。

「じゃ、ちよつとこれ、聞いてみてくれる？」

不意に鏡音君がそう言った。正直言つとあまり気は進まなかったけれど、もう一度イヤフォンを耳に差す。鏡音君がプレーヤーの再生ボタンを押して、また、音楽が始まった。

……さっきのとは違う曲だ。ゆっくりした曲調で、ずっと聞きやすい。歌っているのは男の人。残念ながら、部分部分の単語は聞き取れても、何を言っているのかまではわからない。あれ……？ この旋律、どこかで聞いたことがあるような……？ え？ あれ？

「なんでミミの名を呼ぶの？ ムゼッタのワルツでしょ？」

プッチーニのオペラ『ラ・ボエーム』は、貧乏暮らしの若い芸術家たちを描いた作品で、ミミとムゼッタはこのオペラの登場人物だ。「ムゼッタのワルツ」は『ラ・ボエーム』で歌われるアリアで、タイトル通りにムゼッタが歌う。今の曲で途中から使われていたフレーズ、あれはかなり感じが変わっていたけれど、「ムゼッタのワルツ」に違いない。でもそれならどうして、ムゼッタではなく、ミミの名を呼んでいたんだろう？

「あ……やっぱりわかるんだ」

そう言つて鏡音君は、プレーヤーを止めた。

「……かなり感じが変わっていたから、名前が出てくるまでは自信がなかったんだけど」

あの「ミミ」と名前を呼ぶ声で気がついた。これは「ムゼッタのワルツ」だって。

「作中でもそう言われるけどね。『それじゃムゼッタのワルツだってわからないよ』って」

……どういうことだろう？

「これ『RENT』っていうミュージカルの曲なんだよ。『ラ・ボエーム』を現代に翻案した作品。ちなみに、前に巡音さんと劇場で会った時に見てたのもこれなんだけど。で、今は主人公のロジャーが、最後の方でミミに歌う曲」

「ロジャー……ロドルフォのこと？」

詩人のロドルフォは、『ラ・ボエーム』の主人公で、ミミは彼の恋人だ。二人は愛し合うのだけれど、貧しさが若い恋人たちを引き裂いてしまう。そして、ミミは最後は結核で死んでしまうのだ。

「そうだよ」

「どうしてロドルフォがムゼッタのワルツを歌うの？」

「さあ……何でだろう？ でも、三回ぐらいこのフレーズ弾いてるよ」

鏡音君にもわからないらしい。それにしても、ロドルフォがこの歌を歌うのだろうか？ あんまり想像したくないかもしれない。

「ロドルフォが、『わたしが街を歩くと、誰もが立ち止まって、わたしの美しさに見とれるの』って歌うの？」

わたしがそう言ったら、鏡音君は笑い出した。

「……さすがにそれはないよ。あくまでギターで弾いてるだけ。その台詞自体は別の曲にあわせて、ムゼッタに当たるキャラクターが歌ってるけどね」

ちよつとほつとした。

「この曲の歌詞自体は『君こそが探し求めていた歌なんだ』とか、そんな感じ」

「その台詞、『ラ・ボエーム』にも似たのがあるわ。『詩をみつけたんだね』ってみんなが言うの」

第一幕の最後の方で、ロドルフォの芸術家仲間であるマルチエロやコツリーネやショナールは、ロドルフォとミミが一緒にいるのを見て、そんなことを言う。

「へえ……『ラ・ボエーム』は見たことがないからなあ。一度見てみたいとは思ってるけど」

鏡音君がそう言った時だった。鞆の中に入れておいた携帯が振動し始めた。

「あ、ごめんなさい。携帯に着信入ったみたい」

わたしは携帯を取り出して中を確認する。運転手さんからで、迎えに来たとのことだった。あ……じゃあ……帰らなくちゃ。

「誰から？」

「運転手さん。今日は車の調子が悪いから少し遅れるって、少し前に連絡があつたの。で、今、迎えに来たって」

なんだか少し淋しい気がする。わたしは鏡音君にさようならを言つて、本を書棚に戻し、帰宅の途についた。

わたしが街を歩くと（後書き）

このネタをやりたいばかりに、冒頭でレンが見ているミュージカルを『RENT』に設定しました。実はプロットを考えた時は、『ウエストサイドストーリー』だったのです。ただこれだと、共通する楽曲がない！ というわけでこういうことに。

まあ一発で聞いてもわからないような気がするんですが……。情けない話ですが、私は何度も巻き戻して聞きなおして、やっと「あ、同じ曲だ」と理解できました。

ラ・ボエーム「ムゼッタのワルツ」

↓ <http://www.youtube.com/watch?v=sdnHvxmo2N0>

（演奏会形式、日本語字幕あり）

↓ <http://www.youtube.com/watch?v=znLx0zds0dQ>

（舞台版。2008年度メトロポリタンのもの。字幕無し。珍しくムゼッタがちゃんと美人）

RENT「Your Eyes」

↓ <http://www.youtube.com/watch?v=8eKiJfUYtS4>

（1：50辺りで流れ出すメロディーが、「ムゼッタのワルツ」）

おまけに、レンが最初に聞かせた曲はこれ。

『RENT』より「RENT」

↓ <http://www.youtube.com/watch?v=ffBe4bYLd91k&feature=rela>

t
e
d

作戦会議中のクオ

俺は、喫茶店でミクと向かい合っていた。言わずもがな、ミクに「作戦会議よ！」と引つ張り出されたわけなんだが。というか、何で喫茶店なんだ？

ちなみに、作戦というのは言わずもがな、この前失敗した「レンと巡音さんをくつつけよう作戦」のことである。理由はさっぱりわからないが、ミクは未だに燃えているのだ。

「とにかく、どうにかしてもう一回呼び出したいの。クオ、何かいい案ない？」

……思わず深いため息が出る。どうしてミクは諦めてくれないんだ。

「なあ、ミク……もう止めようぜ、こんなこと」

ミクはふるふるとかぶりを振った。二つに束ねた髪が一緒に揺れる。はあ……見た目やしぐさは滅茶苦茶可愛いのに、なんで中身はこつぱつ飛んでるんだ。

「絶対に嫌」

なんでこいつはこんなに意地になってるんだ？ えーと、じゃあ、別の方面から攻めてみるか。

「そもそもレンの奴をお前んちに呼ぶのに無理があるんだよ」

「だって、クオと鏡音君は友達でしょ？ 友達の家に遊びに行くのって当たり前のことよね。クオはよく鏡音君の家に遊びに行くじゃない」

「だからさあ、お前んちはお前んちであって、俺んちじゃないの」「今はクオの家よ」

いや、さすがにそれはちよつとなあ。ミクの家には中三の時から厄介になってるけど、俺は未だにお客さんみたいな気分にいる。あ、別に邪険にされてるわけじゃないぞ。俺はミクと同じ広さの一人部屋（俺の実家の部屋の倍ぐらいある）使わせてもらってるし、食事

もミクと完全に同じメニュー（しかも量は俺の方が多い……ミクと同じ量じゃ少ないだろうって）だし、小遣いまでミクと同額（これまた、実家でもらってた額よりもずっと多い……）だったりするし、ミクが何か（服とか、学用品とか）を買ってもらう時は、同じランクのものを買ってもらえたりするが、そこまでされると、なんていうか……逆に申し訳ない気がするんだよな。そんなにしてもらっていいんだろって。

「レンに怪しまれたんだよ」

仕方がないのでそう言ってみる。

「怪しまれたって？」

「この前、なんでいきなり自分を家に呼んだのかって、しつこく訊かれた。何か魂胆があるんじゃないかって。考えてもみるよ、レンと知り合って一年半なのに、俺があいつをお前んちに呼んだの、この前が初めてなんだぜ」

ミクは、半眼でじーっと俺を睨んだ。怖いのでやめてほしい。

「クオ、まさかとは思うけど」

「誓って計画のことは喋ってない。適当にごまかしておいた」

ミクがふうつと息を吐く。ごまかしの内容を訊いてきたりしませんように。さすがに何重もの嘘をつくのはしんどい。幸い、ミクはその辺りを訊いてはこなかった。次の「作戦」とやらで頭がいっぱいらしい。

「そろそろハロウィンだし、パーティーをするってのはどう？」

「断言するが、そんな口実じゃ怪しまれるだけだし、あいつは来ない」

そもそもそのイベント、全然定着してないじゃないか。毎年商戦だけが異常に活発なだけで。

「うーん……わたしの家に呼ぶのが難しいとなると……あ、そうだな。みんなでどこかに遊びに行かない？」

ちよつと楽しそうかもな……はっ、いかんいかん。ミクに乗せられてる。

「行くつてどこへ？」

「リンちゃんは門限があるし——あそこのお父さん、門限にはすぐうるさいのよ——近場じゃないと無理だけど」

ミク、お前と俺も門限あるの、忘れてないか？ 巡音さんのところよりは遅い時間だし、連絡さえしつかり取っておけば、伯父さん伯母さんはそこまで心配しないけど。

「ゲーセンとか？」

呼び出す理由としてはこれが一番楽だろうなあ。ミクはあんまりゲーセンには行かないから、社会見学として連れて来たと言えば、あいつも怪しまないだろう。巡音さんは更におまけということでは……。

「リンちゃんをゲームセンターに誘うのは無理だと思う。ゲームやらないもの」

「じゃ、カラオケは？」

これまた社会見学という理由でなら（以下略）

「それも厳しいと思う。リンちゃん、クラシックしか聞かないから巡音さんって、普段どういう生活送ってるんだ？」

「あんまり変なところだと、レンを引っ張り出すのが難しくなるぞ」俺がレンと遊びに行く場合、行き先は映画館かゲーセンだ。映画は好みがバラバラすぎて難しいし——正直、恋愛映画はもうたくさんだ——、ゲーセンはさっきの理由で駄目、となると……。

「……遊園地なんてどう？」

俺が考え込んでいると、ミクがそう言ってきた。

「遊園地か……」

ここしばらく行ってねえな。そもそも、男二人で遊びに行くような場所じゃあないし。けど、男女混合四人連れで行くんならいいか「それならいけるかも」

俺がそう言うと、ミクは嬉しそうな顔になった。

「でしょでしょ」

得意げだな。「褒めて褒めて」と言わんばかりだ。まあ、可愛い

から許そう。

「で、いつにする？」

「リンちゃんはまだ足の怪我が治ってないから、足が治ったら誘ってみる」

あゝ、そういや、二週間ほど前に捻挫したとか言ってたな。この前ミクの家に来た時も足を引きずっていたっけ。そうなると来月か？ まあ、ミクに連日せっつかれないんだからよしとしよう。レンを引っ張り出す口実も、考えとかなきゃな。

作戦会議中のクオ（後書き）

前回のエピソードでリンが言っていた「ミクの用事」っていうのは、これです。

そんなわけで次の作戦は遊園地作戦に決定したわけですが……これを書いてる私は、出不精であの手このところ、もう年単位で行ってないんですよ。ちゃんと書けるんだろっか……。

ロウソクに火をください

帰宅すると、家庭教師の先生はもう来ていた。制服を脱いで私服に着替え、勉強道具を持って学習室に移動する。

学習室はそこその広さがある。何年か前までは、姉妹三人でここで揃って勉強していた。今は、ここで勉強するのはわたし一人だけ。ルカ姉さんはもう社会人だし、ハク姉さんは部屋から出てこない。

……だからどうというわけではないけれど。

ルカ姉さんが神威さんと結婚したら、いずれはわたしの甥か姪が産まれる。そうしたら、この部屋を使うことになるのかな。そして、その子も……。

無意識に鉛筆を噛んでしまい、家庭教師の先生に注意される。いけない、集中しなくちゃ。わたしは、目の前の英文に意識を戻した。例文は、インターネットに関するエッセイだ。ネットの公平性とオープン性について書かれている。わたしはパソコンを持っていないし——お父さんに、高校生の間は駄目だと言われている——携帯も厳しく制限されているから、ネットを自由に閲覧するというわけにはいかない。もっとも、文章はそういうことについては書かれてないんだけど。

何をやっているんだろう。これは単なる課題なのだから、問題を解くことだけに集中していればいいのであって、文章の意味するところなんか気にしても仕方がないのに。わたしは雑念を追いつつ、目の前の問題に集中しようと努めた。

勉強が終わると、夕食の時間だ。最近は、お母さんと二人のことが多い。お父さんは仕事で忙しいし、ルカ姉さんもそう。ハク姉さんは、やっぱり部屋から出てこない。冷蔵庫に食べられるものはいつも入れているので、皆が寝静まっている時間帯に食事をしているみたい。それで大丈夫なのかな……？

今日は珍しく、ルカ姉さんがいて、先に食事を取っていた。背筋が真っ直ぐ伸びていて、その作法には全く乱れというものがない。……いつもこうだけど。わたしは自分の席に着いて、手をあわせ、食事を始めた。

「リン、学校はどう？」

食事をしていると、お母さんがそう訊いてきた。

「……普通」

別に何も無い。強いて言うなら鏡音君と喋ったことぐらいだけれど、これを言っちゃうと後が怖いし……。

「楽しい？」

「……多分」

ミクちゃんがいるから。

「ならいいのだけれど。足は？」

「もうしばらく固定してないと駄目だって」

「無理はしないのよ」

「ええ」

体育は見学しているし、部活は英会話だから動くような部活じゃない。早く治らないかな。やっぱり何かと不自由だ。

わたしが食事をしながらあれこれ考えていると、ルカ姉さんが立ち上がった。いつの間にか、食べ終わってたみたい。

「ごちそうさま。先にお風呂入ってもいいかしら？」

「リン、それでいい？」

「お先にどうぞ、ルカ姉さん」

「では、お先に」

ルカ姉さんは一つ頷いて、すたすたと食堂を出て行ってしまった。ルカ姉さんの動きには無駄というものがない。昔から、ルカ姉さんはあんな風だった。

食事をして、お風呂に入って、自分の部屋に戻る。何か音楽でも

聞こうかな……。わたしはCDが並べてある棚の前に立った。ラフマニノフとリストのCDを取り出す。どっちにしよう。……。あ、そういえば。

CDが並んでいる段の下には、DVDが並べてある。ほとんどがオペラとバレエのそれだ。わたしは一度手にしたCDを脇に置いて、一枚のDVDを手についた。プッチーニのオペラ『ラ・ボエーム』。確か、見てみたいって、言ってたわよね。貸してあげたら、喜ぶかも……。

でも……。いきなり渡されたら、迷惑かな……。
えーと……。

わたしは悩んだあげく、『ラ・ボエーム』のDVDを綺麗な紙袋に入れて、通学鞆の中に入れた。

その次の日。登校したわたしは、早速頭を抱えていた。DVDを持ってきたのはいいけれど、どうやって声をかけたらいいのかわからない。いきなり「これ、貸してあげる」じゃ、唐突よね。じゃあ、どう言ったらいいんだろう？

鏡音君はもう登校してきていて、自分の席でノートを広げて何か書いている。声をかけるのなら早くしないと、先生が来てしまう。でも、どうやって？

わたしが悩んでいると「おはようっ！」という、明るい声が飛んできた。ミクちゃんだ。

「おはよう、ミクちゃん」

ミクちゃんに相談してみようかな。……。でも、こういう相談って、どういう風にすればいいの？ 切り出し方がわからない。

「ねえリンちゃん、この前の現国の課題って……」

あ、先にミクちゃんの方が話し始めてしまった。こうなると、ますます切り出しにくい。結局、始業のベルが鳴るまで、わたしはまともに何か言うことができなかった。

何事もなく授業は進み、昼休みになった。お昼は大体いつもミクちゃんと一緒。だけど、今日はミクちゃんは委員会のミーティングがあるとかで、四時間目の授業が終わると、あわただしく行ってしまった。そういうわけで、今日の昼食は一人。ミクちゃんがいないと、やっぱり淋しい。

そうだわ、DVDを渡さなくちゃ。見てみると、鏡音君は教室にはいなかった。食堂で食べているのかも。わたしは立ち上がると、DVDを入れた紙袋を手にとって、教室を出た。

食堂に行ってみたけれど、食堂にもいなかった。……お昼休みは半分以上経過しているし、もう食べ終わって教室に戻っちゃったか、他の場所にいるのか……。学校は広いから、他の場所だと探すのは難しい。おとなしく教室で待っていた方が得策かもしれない。

そうは思ったのだけれど、何だかこのまま引き返すのも嫌だったので、わたしは図書室に行ってみることにした。前にあそこで見たからといって、今日もいるとは限らないのだけれど……。あ。

図書室に行く途中の渡り廊下。そこを渡ろうとした時、探していた人の姿が目に入った。校庭に植えられている木の陰で、座って音楽を聞いている。……一人みたい。

わたしは鏡音君に近づいた。気配で気づいたのか、鏡音君が顔をあげて、耳からイヤフォンを外す。

「……巡音さん、俺に何か用？」

そう言われて、わたしは口ごもった。

「あ、えつと……」

向こうは、わたしをじっと見ている。

「それ、昨日と同じ曲？」

「そうだけど」

と、とにかく……用件を話さなくちゃ。わたしは紙袋を、鏡音君に差し出した。

「これ……貸そうと思って。『ラ・ボエーム』のDVDなの」

鏡音君は紙袋を受け取って、中を確認した。

「え……いいの？」

「見たいつて、言つてたから」

「なんで、これだけのことを言うのに、わたしはこんなに苦勞して
いるんだろう。」

「じゃ、遠慮なく貸してもらつよ。……あ、返すの、多分週明けに
なると思うけど、それでもいい？」

「あ……良かった。喜んでくれているみたい。」

「ええ……それじゃあ」

わたしはそう言つて、その場を後にした。

ロウソクに火をください（後書き）

Would you light my candle?

すいせんボエームの方じゃなくて。イタリア語はわからないので
歌詞がさっさと出てこない……。まあ、要するに、そういうことで
す。

嵐

日曜日がやって来た。今日は外出の予定はない。家で本でも読むか、オペラのDVDでも見てようかな……そんなことを考えながら、わたしは階下に降りて行こうとして、凍りついた。食堂から、お父さんとお母さんの話し声が聞こえてくる。ううん、これは、話しているんじゃない。

……喧嘩、しているんだ。

「朝からそんなくだらない話につきあう気はない！」

「くだらないことじゃないわ。ハクがひきこもってもう三年よ。やつぱり一度きちんとしたお医者様に見せるか、カウンセリングでも受けさせた方が」

「そんな恥ずかしい真似ができるか！ 精神科に連れて行くことも、その手の医者家を家に呼ぶことも許さん！」

「だって……！」

「そもそも、お前があの子をちゃんと見てなかったのがいけないんじゃないか！ 全く、なんであんな家の恥になるような娘になったんだか……」

わたしはその場に座り込んだ。……やめて。お願いだからやめて。言い争ったり怒鳴ったりしないで。でも、二人の口論は収まらない。

「あなた、そんな言い方は……」

「実際、恥だろうが！ 全く、誰に似たんだ」

「……ハクだって……」

「ハクのことはもういい。それより、リンはどうなんだ」

突然わたしの名前が出てきたので、わたしははっとなった。

「リン？ あの子は普通にしているわ。ちゃんと学校に行っているし、成績も学年で十番以内に入ってるし、門限だっていつもきちんとして守っているし、問題はないわ」

「……ならいい。リンまで、ハクみたいになったら困るからな。い

いか、目を離すなよ」

「え……でも……」

「とにかく、お前はリンをちゃんと見てろ」

ハク姉さんみたいになつたら困る、か……。お父さんは、わたしを放っておいたら、ハク姉さんみたいになると思っているんだ。でも……。

……頭がくらくらする。わたしは両手で顔を覆った。と、その時。
「リン、何をしているの？」

「ルカ姉さん……」

いつ来たのか、わたしの後ろにルカ姉さんが立っていた。

「……お父さんとお母さんが喧嘩してるみたいなの。ハク姉さんのことで。ルカ姉さん、どうしたらいいの？」

「立ち聞きは感心しないわ」

ルカ姉さんはいつもと変わらない口調でそう言つて、そのまま階段を下りて行つた。

「待つて、ルカ姉さん！」

「私には関係ないことだし」

わたしは半ば呆然として、ルカ姉さんの背を見送つた。どうして平然としていられるんだろ。ルカ姉さんのことがわからない。何だか……怖い。

ルカ姉さんはそのまま、食堂に入つて行つた。お父さんとお母さんの声が止む。しばらくして、お母さんとルカ姉さんが朝食について話し始めた。お父さんの声は聞こえない。

……わたしはのろのろと立ち上がると、自分の部屋へと戻つた。食欲は無くなつていた。

部屋に入ると、わたしは音楽CDを並べてある棚から、シューマンの交響曲のCDを取り出してプレーヤーに入れ、音量を上げた。

……何も考えなくなつたから。

どれくらいの間、そうしていただろう。部屋のドアを叩く音がした。CDを止める。

「……誰？」

「リン、朝ごはんは食べないの？」

お母さんだった。

「食欲無いから、今日はいない」

「成長期の女の子は、きちんと三食取らないとだめよ」

「……とにかく、いない。ほつといて」

ドアの向こうからため息が聞こえた。続いて、廊下を歩いていく音が。わたしは、もう一度CDのスイッチを入れ、ベッドの上に突っ伏して頭から上掛けをかぶった。

嵐（後書き）

今回は短いですが、繋げるとなんだかバランスが悪い気がしたので、独立させました。

ルカさんがこういう態度になった理由は、外伝その一参照、というところで。

冷たくもなく、熱くもない

結局、日曜日は一日ぼんやりとして過ごしてしまった。そして、次の日。月曜になっても、気分は晴れない。

「リン、ちゃんと食べないと駄目よ。昨日もろくに食べてないでしょう?」

お母さんにそう言われたけれど、わたしは食が進まなかった。お父さんがいないのをいいことに、わたしは朝食を半分以上残して、席を立った。通学鞆を持って、家を出て車に乗る。

……考えちゃだめ。考えたらだめ。普通にしていなと。

しばらくすると、学校についた。校門で車から降りて、校舎へと向かう。その時、声をかけてきた人がいた。

「おはよう、巡音さん」

……鏡音君だ。

「あ……おはよう、鏡音君」

普通にしてくなくちゃ。普通に、普通に……。

「週末にあれ見たんだ。巡音さんが貸してくれた『ラ・ボエーム』……そう言えば貸していたつけ。

「そうなんだ……」

「姉貴が暇だったらしくて一緒に見たんだけど、見ていたら姉貴が怒り出しちゃってすごかったよ。『こんのヘタレ男』って、ロドルフォのことを怒鳴りまくっちゃって。うちの姉貴、感情の起伏が激しいもんだから。何もそんなに怒らなくてもいいと思うんだけどさ」

鏡音君にもお姉さんがいるんだ。ルカ姉さんみたいな人でも、ハク姉さんみたいな人でもないみたい。……って、わたし、一体何を考えているんだろう。

「……………」

お父さんはルカ姉さんを成功作だと思っていて、ハク姉さんのことは失敗作だと思っていて。でも……わたしは……。

だから、いらないことは考えないの。考えたら駄目。とにかく駄目。

「巡音さんはどう思う？」

「……お姉さんのこと？」

「そうじゃなくて、『ラ・ボエーム』のこと」

「プッチーニの代表作の一つよね。彼の作品の中では一番ロマンティックと言われている、現代でも人気が高いわ」

確かそうだったはず。

「俺が訊きたいの、そういうのじゃないんだけど」

鏡音君はそんなことを言い出した。もつと専門的なことが知りたいのだろうか。

「だからさあ、巡音さんは『ラ・ボエーム』をどう思っているわけ？」

どうって……。あれはオペラだ。十九世紀のオペラ。プッチーニが作った傑作で。

だから、わたしがどうこう言っているものじゃないの。

「……………」

「何も評論家みたいなこと言わなくてもいいから。『こんな恋愛してみたい』とか『ミミよりムゼッタの方がすてきだと思う』とか、そんな単純なのでいいんだってば。なんならうちの姉貴みたいに『ロドルフォのヘタレ顔を洗って出直してきやがれ』とかでもさ。なんかないの？」

言葉が、周りを舞っているような気がする。わたしには、絶対に捕まえられない。

「別に……………」

「巡音さんには自分の意見ってものがないの？」

鋭い声が飛んできた。思わず顔をあげる。正面から目があった。

自分の意見……………？

「そんなこと……………訊かないでよ……………」

わたしに意見を求めたりしないで。そんなこと訊いてほしくない

の。だって、わたしは……。

「……巡音さん？」

「それに……そんな言い方しないでっ！ 言われても困るの！ わたしは……わたしはっ……！」

気がつくと、わたしは叫んでいた。頭がくらくらし、手足が冷たい。

「ちよつと巡音さん、落ち着いて」

わたしの両肩に、鏡音君の手がかかった。……え？ 今、わたし、何をしたの？

胸の奥がしめつけられるように痛い。痛くて、苦しい。周囲が回っているような気がする。頭上の空がガラスみたいに思える。ああ、あれがきつと落ちてきて、わたしは潰れてしまうんだ。

「ガラスが……」

「巡音さん？ ちよつと、巡音さん！？」

そして、わたしの意識は途切れた。

気がつくと、保健室のベッドの上だった。

「あれ……？」

「あら、気がついたのね」

校医の先生がこっちに近づいてきた。

「二年C組の巡音リンさんね。校門のところで貧血を起こして倒れたとかで、同じクラスの男子生徒があなたを運び込んで来たのよ」

「鏡音君が……？」

「そう言えば、そんな名前だったわね。あなたのことを心配していたわよ」

わたしは、気を失う前のことを思い出した。確か頭の中が真っ白になって、鏡音君の前で大声で叫んでしまったんだ。それも、言っても仕方のないようなことばかり。……どうしよう。

「巡音さん、朝ごはんはちゃんと食べてきたの？」

「……いいえ」

「食事はきちんと取らないと駄目よ。あなたはまだ成長期なんですからね。無理なダイエットなんてしないでいいの」

先生、ダイエットじゃありません。ただ単に食欲が無かったんです。

「それで、今の気分はどう？」

わたしは起き上がろうとしたけれど、ひどいめまいのせいで、結局起き上がれなかった。

「めまいがします……」

「今日のところは、無理はしない方がいいかもしれないわね。うちに連絡を入れておきましょう」

わたしは先生に自宅の電話番号を告げた。先生が電話をかける声が聞こえてくる。……お母さん、ショックだろうな。無理してでも食べておけばよかったかも。

電話を終えた先生が戻って来た。

「巡音さん、お母さんがすぐに迎えに来るそうです。担任の先生には、私から早退すると伝えておきますから」

「……わかりました」

わたしは保健室のベッドに横になったままで、お母さんが来るのを待った。どれぐらい経過しただろうか。あわただしい足音と共に、お母さんが血相を変えて保健室に飛び込んできた。

「リン！」

お母さんはわたしが寝ているベッドに駆け寄ってきた。その後で校医の先生に気づいて、慌てて頭を下げる。

「巡音さんのお母さんですね」

それから先生はわたしの状態について話し、この年頃の女の子は血液が不足しやすいので、栄養バランスの取れた食事を三度食べさせるようにと付け加えた。

バランスの取れた食事自体は与えてもらっている。食べなかったのはわたしで、お母さんのせいじゃないのに。

「リン、立てそう？」

わたしはめまいをこらえて、何とか起き上がった。

「ふらつくけど……多分大丈夫」

家に帰るぐらいなら、何とかなるはず。わたしはお母さんに支えられながら、保健室を出て、迎えの車に乗った。

「……怒らないの？」

家に帰る途中、車の中で、わたしはお母さんに訊いてみた。

「何を？」

「朝ごはん食べなかったことと、それが原因で倒れて、手間をかけたこと」

お母さんは、何故かため息をついた。

「起きてしまったことは仕方がないから……リン、家に着いたらおかゆを作ってあげるから、それを食べて、今日は横になってなさい」
わたしは頷いて、目を閉じた。やっぱりまだくらくらする。

帰宅すると、お母さんは言葉どおりおかゆを作ってくれた。さすがにもう残すわけにはいかない。それを全部食べてから、部屋に戻る。制服を脱いで寝巻きに着替え、わたしはベッドに横になった。

学校ではお昼休みぐらいの時間になった頃、携帯に着信があった。メールだ。差出人はミクちゃん。「どうしちゃったの？ 学校に来てないけど、具合でも悪いの？」と書いてある。……しまった。連絡を入れてなかった。「一度登校したんだけど、貧血で倒れて早退したの。連絡しなくてごめんね」と返信する。すぐに返事が来た。

「大丈夫？ 無理しちゃダメだからね」と書かれていた。

「ありがとう」とミクちゃんに返信した後で、わたしは鏡音君のことを思い出した。心配させた上に迷惑をかけたわけだし、一言謝っておいた方がいいかもしれない。……でも。

わたしは鏡音君のメールアドレスを知らない。ミクちゃんも……多分、知らないだろうなあ。ミク才君なら同じ部活だし、知ってい

るかもしれないけれど……。ミクちゃんに、ミクオ君にそのことを訊いてもらうのも気が引ける。

……それに、鏡音君に下手にメールをすると、携帯をチェックされた時に気づかれてしまうかもしれない。お父さんは時々抜き打ちでわたしの携帯を調べるから、見慣れないアドレスへの送信履歴があつたら問い詰めるだろう。そうなると、ごまかす自信がない。

また気分が重くなってきた。わたしはため息を一つつき、鏡音君に連絡することは諦めた。

冷たくもなく、熱くもない（後書き）

普通はこの状況になったら、後に待っているのはクラッシュだけなんです……。

クラッシュされると話がそこで終わってしまうので、無理にかなりの好条件を重ねて、そうならないようにしています。

クオの当惑

その日の昼、ミクからメールの着信があった。見ると、「今日のお昼、一緒に食べない?」と書かれている。ミクからお昼のお誘いか……。

ミクは大体いつも、昼飯は巡音さんと一緒に自分の教室で食べている。故に、俺に声がかかったということは、向こうに何か用事が入ったんだろう。……俺っていざという時のためのキープ君か? まあいいや。ミクに「いいぜ。中庭で待ってる」と返信すると、弁当箱と水筒を抱えて、俺は中庭に向かった。ベンチの一つにかけて待つことしばし。ミクが、自分の分の弁当を持って姿を現した。

「クオ」

ぶんぶんと手を振って、ミクはこっちに駆け寄ってきた。そのまゝ、俺の隣にすくと腰を下ろす。

「今日は振られたのか?」

そう訊くと、ミクは首を傾げた。

「振られたって?」

「巡音さん。お前、いつも昼は一緒だろ」

「クオ、振られたって言い方はないでしょ。リンちゃんはね、今日は学校休んでるの。具合が悪いんだって」

さすがにミクは心配そうだ。ま、友達が病気とくれば、誰だってそうか。

俺は頷きながら、自分の弁当箱の蓋を開けた。今日も美味そうだ。一口カツを箸でつまんで口に入れる。

「具合が悪いって、風邪か何か?」

「貧血だって」

「それ、病気か?」

軽い気持ちで訊いたら、ミクにこつんと額を叩かれた。

「あのねえ、あれ、辛いんだからね」

「経験したことあるような口ぶりだな」

「わたしだって、貧血になったことくらいあるわよ」

ミクはそんなことを言った。お前が貧血ねえ。

「血の気多いの？」

むしろ血の気が多すぎてぶっ倒れましたと言われた方が、まだ納得できるような。

「もう、クオってば！ 女の子はね、色々と大変なの」

お前に言われても説得力がないんだが……あんまりミクを怒らせると、また俺の首を絞めかねないな。もうよそう。

今日は部活の活動日だ。もっとも、演劇部の大きなイベントである学祭は終わったので、ここところは基礎の体力作りや発声練習とかをやってるだけである。……退屈だ。やっぱり、舞台の練習の方が楽しい。

されはさておき、今日は一つ妙なことがあった。部活の最中、レンがぼーっとしていたのだ。いつも真面目にやってる奴なのに。

「……レン、お前、今日なんか変だぞ」

気になったので、俺は部活が終わった後、レンにそう訊いてみた。こいつも具合が悪いとか言い出さないだろうな。

「なあ、クオ。あのさ……」

「なんだよ」

「……やっぱいいや」

おい。言いかけて途中で止めるなよ。

「言いかけたことは最後まで言えよ」

「大したことじゃないからいい」

「気になるだろ」

レンはちよつと考え込む表情になって、それからこんなことを訊いてきた。

「クオ、お前、なんで恋愛映画嫌いなんだっけ？」

……はあ？　なんでいきなりそんな、どうでもいいことを訊いてくるんだ。俺は時々、本当にこいつがわからなくなる。

まあいいか。

「だって退屈じゃないか」

「そんだけ？」

「なんかずーっとうだうだやってるだけだろ、あれ。俺には理解できない世界なんだよ」

とつと好きですつって、カップルになればいいだろ。……それじゃ映画が三十分で終わるか。要するにそれだけの話ってことだ。

「初音さんは好きそうなのに」

レンはそんなことを言ってきた。あゝ、ミクはな。もっともあいづが好きなのはラブコメの類で、ドロドロの不倫恋愛とかはお断りなんだが。

「ミクはなゝ、基本的に、可愛らしいもんが好きなんだよ。動物が出てくる映画とかも好きだぜ、あいつ。そっちならまだ見てられるんだけど、恋愛映画は、俺はパス」

飼ってる犬もボメラニアンで、名前はニッキ。ミクは「ニキちゃん」と呼んでいる。ミク曰く「ぬいぐるみたいで、可愛いでしょ」とのこと。でかい方が抱きつきがいがあるといいと思うんだがなあ。その点俺のジョン（ハスキーミックス、雄、四歳）は……。

……って、レン、お前、俺の話聞いてないじゃないか。人に話振っついてそれはないだろ。いや、聞いてないというより、心ここにあらずって感じか。どうしたんだこいつ。

「レン、どうしたんだ。またばーっとして」

「ちよっと考え事」

それがレンの返事だった。何か悩みでもあるんだろうか。

「悩みがあるんだったら聞け」

「悩んでほじやない。ところでクオ、お前、ガラスって言われて何連想する？」

はあ？　お前、本当にわからない奴だな。

「なんだよ、今度は連想クイズか？ ガラス……ガラスねえ。窓だろ、コップだろ、電球だろ……ぱっと思いつくのはこんなところか」
「うーん……」

レンは腕を組んで考え込んでしまった。俺の答えはお気に召さなかったらしい。何なんだよ、本当に。

「ガラスの靴」

ふっと、俺はそんなことを思い出した。ミクが以前、そんな話をしていた。レンが怪訝そうな顔になる。

「……へ？」

「『シンデレラ』だよ。ミクなら絶対そう言うね」

いつだったかな。確か、まだ俺たちは小学生だった。ミクが「ガラスの靴がほしい！」って大騒ぎしていたことがあったっけ。多分、絵本かアニメで見たんだろう。懐かしいな。

「うーん、そうじゃないんだよね……」

結局レンの奴は、何を悩んでいるのかは教えてくれなかった。

部活を終えて帰宅すると、ミクは居間でテレビを見ていた。……音楽番組か。

「あ、クオ、お帰り」

「おう、ただいま」

「ねえクオ、今ね……」

ミクは最近お気に入りのアイドルについて、あれこれ話し始めた。ちなみにミクの趣味は結構移り気で、お気に入りによく変わる。

「ミク、ちよつといいか？」

「何？」

「お前、ガラスって言われて何を連想する？」

ミクはちよつと首を傾げて考え込み、それからおもむろにこう言った。

「ガラスの靴！」

……やっぱり。

「それって『シンデレラ』だよな」

「決まってるじゃない」

些細な予想だけど、当たると何となく嬉しいもんだ。

「もしかしてプレゼントの話？」

期待するような表情で、ミクがそう訊いてくる。プレゼント？

誰が、何をだよ。

「……なんでそうなるんだよ」

そう言つと、ミクはむっとした表情になった。

「クオのバカ！」

クツションが飛んできた。おい！　と言うまでもなく、ミクは部屋を飛び出して行ってしまった。……あいつの考えていることもよくわからん。レンといいミクといい、一体何なんだ。

クオの当惑（後書き）

ドロドロの不倫恋愛映画が好みという女子高校生、いたら怖いと思う。

それにしてもこの話のクオは、えらく不憫なような。

わたしの魂は空虚で

火曜日。めまいは治まったので、学校に行こうとしたのだけれど、お母さんに止められてしまった。

「昨日倒れたのよ。リン、大事を取って今日も休みなさい」

「……もう平気よ」

「いいから、今日は家にいなさい。学校には連絡しておくから」

結局、わたしは休むことになってしまった。何だかちょっと後ろめたい。朝食を食べて、自分の部屋に戻る。そうだ、ミクちゃんに「今日も休む」って、メールしておかなくちゃ。携帯を取り出して、メールを送信する。

さてこれからどうしようか。めまいはもう治まっているから、横になる必要もない。突然できてしまった空白の時間に。わたしは戸惑っていた

音楽でも聞か、本でも読むか……結局、いつもと同じになるのね。ため息をつきつつ、CDやDVDの並んでいる棚の前に立つ。

その時、あることに気づいた。

「……あれ」

並べておいたDVDが崩れていて、一枚が床に落ちている。なんでこんなことになっているんだろう。……昨日、ふらついた時にぶつかりでもしたのだろうか。考えてみたが、思い出せない。わたしはため息をつく、崩れたDVDを並べなおし、落ちていたDVDを拾い上げた。ケースを開けて中を確認する。……破損はないみたい。

落ちていたDVDは、十九世紀のフランスの作曲家、マスネが作ったオペラ『タイス』だった。確か宗教物よね。前に見たの、いつだったかな。

……もうこれでいいか。わたしは『タイス』のDVDを片手に、部屋の外に出た。わたしの部屋にはテレビやパソコンといった、映

像の再生機器が無い。だからDVDを見ようと思ったら、下の居間に行かなくてはならないのだ。

居間には誰もいなかった。お母さんはキッチンか、自分の部屋にいるのだろう。平日だからお父さんとルカ姉さんは当然仕事だし、ハク姉さんは相変わらず自分の部屋だ。わたしはDVDをプレーヤーにセットして、リモコンのスイッチを押した。

このオペラの舞台は昔のエジプトだ。でもこの舞台では、演出はあまりエジプトということは意識していないみたい。着ているものも、エジプトの衣装じゃない。かといって、現代でもない。ちょっと不思議な感じの衣装をみんな着ている。外国の有名な劇場の公演だから、背景も衣装もかなり凝っている。

画面では、主人公の修道士アタナエルが、遊女のタイスを改心させたという決意を歌っている。タイスは昼は舞台にあがる人気スター、お金を積まれれば身体も売るといふ設定だから、例えて言うなら吉原の花魁や太夫が近いだろうか。そんな彼女がアレクサンドリアを墮落させているから、正しい道に導いてやりたい——早い話、出家させたいということだ——のだと。修道院長は止めるけれど、アタナエルはこれが自分の使命だと言って、反対を押し切って出かけていく。どうしてあんなに一生懸命なんだろう。

ふっと、鏡音君が言っていたことを思い出した。鏡音君のお姉さんが、ロドルフォのことを「ヘタレ」だと言っていた、という話だ。鏡音君のお姉さんだったら、アタナエルのことはなんて言うのかな……なんだろう。胸が痛い。

アレクサンドリアに行ったアタナエルは、旧友の哲学者、ニシアスと再会する。タイスの所在を訊くと、ニシアスはタイスは自分の館にいと答える。ニシアスはタイスをお金で館に引き留めていたのだ。二人は、ニシアスの館の宴で出会う。

アタナエルは信仰の素晴らしさを説き、タイスは情愛の素晴らしさを歌って、アタナエルをあしらう。くいちがう二人の言葉。正直わたしには二人の言うことがよくわからない。タイスが歌って讃え

る情愛のことなんて、わたしでは理解のしようがないし、アタナエルが歌う信仰についてはもっとわからない。二人が、違うものを信じているということだけが、かるうじてわかるぐらいだ。このオペラはよく「霊と肉の相克」と説明されるけれど、その言葉の意味もわからない。……駄目だな、わたし。マスネの音楽はとても綺麗なのに。

「……リン？」

後ろからお母さんに呼びかけられて、わたしははっとなった。

「あ……お母さん」

わたしはリモコンの一時停止ボタンを押そうとして、戸惑った。いつの間にか、最後のシーンになっている。死にかけているタイスと、アタナエルの二重唱だ。相変わらず二人の言うことはくいちがつている。今度はタイスが信仰の素晴らしさを歌い、タイスに魅了されてしまったアタナエルが、情愛について歌っているのだ。いつの間にか、二人の立場は最初とや逆になってしまっている。

「お昼ごはんよ」

「うん……すぐ行く」

おかしいな……まだ第一幕だったはずなのに。居眠りしちゃったんだろうか。DVDを止めてテレビの電源を切り、わたしは食堂に向かった。お昼ごはんを食べながら、さっきのことを思い返してみる。やっぱり、寝ちゃったのかな。オペラを見ながら居眠りなんて、わたしらしくないけれど。

「リン、具合はどう？」

「もう大丈夫」

「無理はしないのよ」

「……ええ」

お昼ごはんを食べ終わった後、わたしは居間に向かった。居間のテーブルの上には、タイスのケースが置きっぱなしになっている。わたしはプレーヤーからDVDを取り出してケースに仕舞うと、それを持って、自分の部屋へと戻った。

わたしの魂は空虚で（後書き）

当初はこの次の章とあわせて一つの章にする予定だったのですが……
……どうも座りが悪いので、切りました。そのせいで短いですが

鏡よ、答えて

夢の中で、わたしはタイスになっていた。場所はタイスの部屋。中央に大きなベッドが置いてあって、わたしはそこに座っている。

どうしてわたしは、ここにいるのだろう？ 考えてもわからない。わたしは立ち上がって、部屋の中を歩き回った。がらんとしている。ほとんど何も無い。壁際に、大きな鏡がかかっているぐらいだ。

わたしは鏡の前に立った。鏡には、当然わたしの姿が映っている。胸元の開いた裾の長い衣装を着て、宝石のついた装身具をたくさん身に着けた姿だ。……ルカ姉さんの方が似合いそうね。十代のわたしじゃ、衣装の派手さがどうしても浮いてしまう。

「誠実な鏡よどうか答えて。わたしは……」

何を訊きたいんだっけ？ 考えたが出てこない。わたしは苦笑した。これじゃあ鏡の方でも困ってしまっただろう。もっとも、この話は白雪姫じゃないから、鏡は喋ったりはしないのだけれど。残酷に、真実を映すだけだったはず。

わたしはそつと手を伸ばして、鏡の表面に触れてみた。その瞬間、鏡の表面がさざなみのようにゆらめいて、映像がぼやけた。

「……え？」

ゆらめきはすぐに収まり、鏡の表面は元に戻った。でも、そこに映っているものは、わたしじゃない。

お母さんだ。でも、今よりももっと若い。ソファに座って、編み物をしている。そこに走ってくる、リボンを着けた四歳くらいの小さな女の子。両手に、しっかりと一冊の絵本を抱えている。

「ねえ、ママ。えほんよんで」

……あれは、わたしだ。今より、もっとずっと小さかった頃のわたし。

「いいわよ。さ、こっちいらっしやい。何を読むの？」

お母さんがわたしを抱き上げて、膝に乗せる。鏡の中のわたしが、

絵本を手渡す。

「あのねえ、これ！」

「あら、また『シンデレラ』なの？ 今日とは別のにしたら？」

鏡の中のわたしは、首を横に振る。

「うっん、これがいい」

「わかったわ。それじゃあ読むわね」

お母さんが絵本を読もうとする。でも、鏡の中のわたしは膝を滑り降りる。

「あ、ちよつとまって！ うさちゃんをとってくる！」

駆け出していく、鏡の中のわたし。やがて戻ってくる。その手には、ピンクのうさぎのぬいぐるみが抱えられている。

……うさちゃんだ。

鏡の中のわたしは、もう一度お母さんの膝に乗って、自分の膝にはうさちゃんを乗せている。お母さんが、にっこり笑う。

「うさちゃんにも聞かせてあげるの？」

「うん！」

「じゃあ読みましょうか。『むかしむかし、あるところに……』」

……あの頃は、こんな毎日が当たり前だった。

わたしの前で、もう一度映像がぼやける。再び映像が鮮明になった時、今度はさっきとは違う光景が映っていた。

さっきよりも、少し成長したわたし。顔をぐしゃぐしゃにして泣きじゃくっている。隣にはお母さんがいて、必死でわたしをなだめている。

「ほら、もう泣かないの」

鏡の中のわたしは泣きやまない。

「ね、いい子だからもう泣くのはやめて」

「だって……ママ……」

鏡の中のわたしは相変わらず泣き続けている。途方にくれるお母さん。そこへ、お父さんがやってきて、泣いているわたしを怒鳴りつける。

「いつまで泣いているんだっ！ お前はもうじき三年生になるんだぞ！ 絵本やぬいぐるみなんかもう卒業しなさいっ！」

鏡の前でわたしは、はっとなった。これは、あの日だ。鏡の中では、八歳のわたしが、更に激しく泣き出している。

「リン、いい加減にしないか！」

……やめてよ。

「あなた……そんな大声出さなくても……」

自分の方が泣きそうな声で、お母さんがそう言う。でも、お父さんの返事は、確か……。

「お前は黙ってる。自分の腹を痛めたわけでもないくせに」

お母さんは、それ以上何も言おうとしない。鏡の中のわたしが、お父さんに向かって叫ぶ。

「パパなんか……パパなんか……大っきらいっ！」

「親に向かってその口の聞き方はなんだっ！」

顔を真っ赤にして、お父さんが叫ぶ。鏡の中でわたしが、ひきついても起こしたかのように泣き叫んでいる。

「あなた……リンはまだ小さいんですから……」

「ルカがこれぐらいの年の時は、もっと聞き分けが良かったぞ。お前が甘やかすから、こうなるんだ」

鏡の中でお父さんが、わたしの腕をつかんで引きずっていく。泣きわめくわたしを、お母さんが泣きそうな表情で見ている。

「もうやめてよっ！ こんなもの見たくないっ！」

鏡の前で、わたしは叫んだ。八歳だったわたし。三月のあの日、お父さんは、わたしの絵本やぬいぐるみをみんな捨ててしまった。大事にしていたうさちゃんも、たくさんあったお気に入り絵本も、全部、全部、捨てられたんだ。

「リン、お前はしばらくそこで反省してる。いい子になるまで、出してやらんからな」

「いやあっ！ 出してっ！ 出してっ！ ここはいやあっ！」

お父さんの前で泣き続けたわたしは、罰として暗いロフトに放り

込まれた。薄暗いその場所が子供心に怖くて、ずっと泣いていたけれど、誰も来てくれなかった。泣き疲れて眠ってしまって、目が覚めたらロフトは真っ暗になっていた。わたしはパニックを起こしてそれから、確か……。駄目だ。この先は思い出せない。この鏡を見れば映るだろうけれど……。

わたしはうつむいた。こんなこと、ずっと忘れていたかった。もう見るのはよそう。鏡に背を向けて、歩き出そうとする。顔をあげて、はっとなった。いつの間にか、部屋の中に他の人がいる。

それは修道士アタナエルだった。

「タイス、逃げてはいけない」

「嫌よ！ あんなもの見たくない！」

わたしは叫んだ。アタナエルがわたしの手をつかむ。

「きちんと向き合うのだ。さもなければ、私のように、信じるものを失うことになる」

「わたしのことなんか放っておいてよ！」

あなたの信仰なんて、わたしは知らない。わたしに構わないで。放っておいて。

「それはできない。私は修道士アタナエルで、君はタイスだから」

「わたしはタイスじゃないわ」

「君はタイスと同じように逃げている。逃げるのはやめて、向き合いなさい」

「できないわよ！ わたしの中には何も残ってないの！」

だって……みんな、取り上げられてしまっただから。

「やりなさい。心をガラスに閉じ込めるんじゃない。君はあの詩人みたいに、若くして自殺したいのか！？」

「だからできないの！」

自分自身の絶叫で、目が覚めた。わたしは驚いて、身体を起こした。いつもと同じわたしの部屋だ。

「……夢、だつたんだ」

嫌な夢。わたしは暗い気持ちのまま、ベッドから抜け出して、時計を見た。いつも起きるよりちょっと早い時間だ。でも、もう一度寝る気にもなれない。このまま起きてしまおう。

寝巻きの上にガウンを羽織って、部屋の外に出る。行き先は洗面所だ。鏡を見る……ひどい顔。わたしはため息をつきながら、冷たい水で顔を洗った。少しはましになっただろうか。

「あら、リン。今日は早いね」

ルカ姉さんだ。今起きたところみたい。わたしと同じように、寝巻きの上にガウンを羽織っている。

「目が覚めちゃって……おはよう、ルカ姉さん」

「おはよう。終わったのなら、そこいいかしら？」

わたしはルカ姉さんに場所を譲った。ルカ姉さんが顔を洗い出す。わたしは自分の部屋に戻った。

今日こそは学校に行かなくちゃ。いつまでもぐずぐずと休んでいるわけにもいかないし。クローゼットを開けて、制服に着替える。

……早い時間に起きたから、時間が余ってしまった。わたしは部屋の椅子に座って、ぼんやりとしていた。そうしていると、どうしてもさっきの夢が頭に蘇ってくる。

……逃げないで、向き合え、か。タイスは、何と向き合ってたんだっけ？

わたしは立ち上がると、CD棚から一枚のCDを取り出した。ヴァイオリンの有名な曲を集めたCDで、「タイスの瞑想曲」も収録されている。わたしはCDをプレーヤーにセットして、瞑想曲の番号を押した。

……何度聞いても綺麗な曲だ。ヴァイオリンが、優しくて甘くて、いたわるような旋律を奏でている。一分半を過ぎた辺りから、少しテンポが早くなって、何かを動かすかのような激しさを少しだけ見せて、それから、また、甘く優しい音色に戻っていく。

わたしはタイスの瞑想曲を聞きながら、ドレッサーの前に座って

鏡を見た。第二幕で一人になったタイスは、派手な生活を送っていても、自分の心は満たされないと歌う。そして、自分の美貌は永遠に衰えないのよね？ と鏡に問いかける。もちろんそんなはずはない。現実から目を背けたくても、現実を突きつける。それが鏡の役割だ。

その時、月曜の朝、鏡音君に言われたことを思い出した。

「巡音さんには自分の意見ってものが無いの？」

わたしは不意に怖くなって、鏡の前から離れ、CDを止めた。

鏡よ、答えて（後書き）

鏡という小道具はかつては虚栄の意味合いが強かったのですが、近代に入ってから「真実を映す」という意味合いで使われることも多くなりました。この『タイス』でもそうですし、私の好きなG・マクドナルドの作品にもそういうシーンがあります。

余談ですが、『タイス』の衣装は、特にこれといって決まってい
るわけではありません。私が見たことのあるものは2008年度の
メトロポリタン（タイス役はルネ・フレミング）と、2002年度
フェニーチェ（タイス役はエヴァ・メイ）のものですが、双方で
かなり衣装は違っていました。

2008年度メトロポリタン↓http://www.theepochtimes.com/n2/index.php?option=com_content&task=view&id=8683

2002年度フェニーチェ↓http://1.bp.blogspot.com/_fNwIxaU8w/TDZNSBg9zI/AAAAAAAAASi/NZemZ0Fx9bA/s1600/Thais.png

衣装はメトロポリタンの方が素敵なんです、キャストはフェニー
チェの方が良かったです。アタナエル役のミケール・ペルトウー
ジがハマりすぎ。メイのタイスも声がピッタリでした。

最後の方でリンが聞いている「タイスの瞑想曲」は、こういう曲
です。↓<http://www.youtube.com/watch>

c
h
?
v
||
m
X
u
z
L
R
V
i
6
q
k

その耳に届くただ一つの調べがあれば

お母さんはまだ心配そうだったけれど、わたしはもう大丈夫と何度とも言って、この日は学校に行った。

学校に着いて教室に入ると、わたしはいつものように持ってきた本を広げた。そう言えば、この本は何だったっけ……。思わず本の表紙を確認してしまう。ガルシンの短編集だった。……なんでこんな本、持って来ちゃったんだろう。

正直、今読むのに向いた本とはいえない。わたしは半ば上の空で、並んだ文字だけを追っていた。

「おはよう、巡音さん」

突然後ろから声をかけられて、わたしは飛び上がりかけた。振り向くと、鏡音君がいる。ええと……。どうしよう。

「……おはよう、鏡音君」

何とかそう返したものの、次の言葉が出てこない。この前のこと、謝らなくちゃいけないのに。思わず下を向いてしまう。

「貧血は、もう大丈夫なの？」

わたしが何か言う前に、鏡音君の方からそう言ってきた。

「……ええ、もう平気。この前は……。その……。ごめんなさい」

下を向いたまま、わたしは何とかそれだけを口にした。

「あゝ、気にしてないからいいよ」

鏡音君はそう言ってくれたけど、わたしはそうは思えなかった。

「でも……」

口にしかけたけれど、それから先が出てこない。そもそも、何を言ったらいいんだろう？ そんな時、鏡音君がこう言い出した。

「それより巡音さん、今日、時間空いてる？」

「え？」

言われた意味がわからず、わたしは訊き返した。

「良かったら、放課後、ちょっと話せないかな」

「話すつて……何を？」

「大したことじゃないんだけど、巡音さんに訊きたいことがあって」
「……わたしに？」

「そう」

鏡音君は頷いた。何がしたいのかよくわからないけれど……。

でも、それを言ったら……そもそも、わたしは、何がしたいの？
ふっと、今朝の夢が頭に蘇った。

「多分、大丈夫だと思う……」

気がつく、わたしはそう答えていた。

「それ、いいつてこと？」

鏡音君が確認してきたので、わたしはもう一度頷いた。

「じゃあ、放課後、屋上に来てくれる？」

「……わかったわ」

そう答えると、鏡音君は、それじゃあ、と言って、自分の席へと向かった。

……何をやっているのかな、わたし。でも、約束しちゃったし……

……。あ、そうだ。運転手さんに、お迎えを遅らせてもらうよう連絡をしておかないと。理由は……あんまり込み入った理由だと、逆に疑われちゃうか。と、その時。

「おはよう、リンちゃんっ！　ねえ、貧血は大丈夫？」

ミクちゃんだ。ミクちゃんはこっちに駆け寄ってくると、心配そうな表情でわたしの顔を覗きこんだ。

「なんだかまだ青白くない？」

「もう大丈夫だから」

これ以上、ミクちゃんを心配させるわけにはいかない。

「昨日も大事を取って休んだだけで、ほとんど体調は戻っていたの。だからあんまり心配しないで」

「リンちゃん。わたしはね、友達だから、心配する権利があるのよ」
ミクちゃんはそんなことを言い出して、わたしの手をぎゅっと握った。ミクちゃんの手は温かいな。

「あ……ねえ、ミクちゃん」

「何？」

「あのね……今日の放課後、ミクちゃんと一緒にいたことにしても
られない？」

放課後になった。ミクちゃんは、放課後一緒にいたことにしてお
いてもらえないかという、わたしの唐突な頼みを、あれこれ訊かず
に快諾してくれた。

「リンちゃんも、たまには羽根伸ばさなくちゃ。わたしにできるこ
とがあつたら、何でも言つてね」

ミクちゃんは「じゃあね！」と明るく言つて、帰つて行つた。…
ミクちゃんがいなかったら、わたし、どうなっていたんだろう。

鞆を手に、屋上への階段を上がる。そう言えば、屋上に行くのは
初めてだ。屋上に行くだけじゃなくて、図書室や部室以外の場所に
寄つて帰ることも。

屋上へと続く階段を上り、重い扉を開けて外に出る。目の前に秋
晴れの青い空が広がった。

「……あ」

鏡音君はもう来ていた。わたしは鏡音君の近くに行った。

「鏡音君、話つて、何？」

「あ、えーと……」

鏡音君は自分の鞆を開けて、中から何か取り出した。

「まずはこれ、返しとくよ。どうもありがとう」

……『ラ・ボエーム』のDVDだ。わたしはそれを受け取つて、
自分の鞆に入れた。これを返すぐらい、教室でもできると思うけど
……。

「あの……巡音さん、二日前のことなんだけど」

そんなことを考えていると、鏡音君がこう切り出してきた。わた
しが倒れた日のことだ。

「巡音さん、倒れる前に『ガラス』って言ってたけど、何のことだったの？」

……ガラス？ そんなこと言ったたろうか。

「わたし……そんなこと言った？」

「少なくとも俺にはそう聞こえたけど」

鏡音君がそう言ったので、あまり思い出さなくなかったが、わたしは倒れる前のことをもう一度思い返してみた。でもやっぱり思い出せない。

「ごめんなさい……憶えてないわ」

ガラスか……。そう言えば今朝の夢では、アタナエルがわたしに「心をガラスに閉じ込めるな」って言ったんだっけ。

心をガラスに閉じ込めたシルヴィアは、三十代で命を絶った。夢は所詮、夢だけど……。

「ガラスって、透き通っているから外が見えるのよね。だから、ガラスの中に閉じ込められたら、すごく苦しいと思う。外は自由に見えるのに、自分は動けないから」

気がつくと、わたしはそんなことを言っていた。だから、シルヴィアは辛くて、自分で自分の命を絶ってしまったんだ。

「その状態だと、眠っている方が楽だと思う？」

鏡音君はしばらく考えてから、わたしにそう訊いてきた。……え？ 鏡音君がそんなことを言い出すとは思っていなかったの、わたしは驚いてしまった。

「……多分、ね。眠っていれば、外は見えないから」

見えなければ苦しい思いをしなくて済むだろう。眠るというのは、ある意味では時間が停止すること。何も感じないで済むし、考えなくて済む。

「何も見えないし、何も感じないんじゃない？」

鏡音君はそんなことを言ってきた。

「だから楽なのよ。見えるけれど動けないのとは違うから」

見えることは苦痛だ。時々思う。眠ったまま、目が覚めなければ

いって。

「でもそれだと、死んでいるのと一緒にじゃない？」

「……一緒かも」

どっちでもいいことだ。

でも……オペラ『タイス』では、信仰に目覚めたタイスは幸福を感じながら死んでゆく。目覚めて死ぬのと、眠ったまま時を停止させるのでは、やはり違うのかもしれない。……タイスは、少なくとも幸せだった。

……幸せって、一体何？

「ちよつとほつとした」

わたしがあれこれ考えていると、鏡音君がそう言い出した。

「……え？」

「巡音さんの考えてること、初めてちゃんと聞いたから」

どうしてそれでほつとするんだろっ……？ わたしにはわからない。

「どうして鏡音君がそんなことを気にするの？」

「単なる好奇心だよ」

訊いてみたところ、そんな答えが返ってきた。……どう反応したらいいんだろっ。

「あ……それと」

わたしが頭を悩ませていると、鏡音君が鞆から、何かを取り出した。それをわたしに差し出す。

「良かったら、これ、見てみない？ 残念ながら映画版だけど」

わたしは、差し出されたDVDを受け取った。パッケージの表面は八分割されていて、それぞれにキャストとおぼしき人が映っている。中央には『RENT』の文字。裏返すと「トニー賞&ピューリッツァー賞受賞 伝説のミュージカル完全映画化！」の文字が目に入った。

「これ……鏡音君がこの前聞いていた曲のミュージカル？ 『ラ・ボエーム』が原案の」

「そうだよ」

わたしはもう一度、DVDの裏面を眺めた。「未来も過去もない。僕らはこの一瞬を生きる。最後の瞬間まで……」と書かれている。……『ラ・ボエーム』に、こんな歌詞は無かった。どうしたら、こうなるんだろう？

……見てみたいな。

でも……。

前にも書いたことだけど、わたしは映像の再生機器を持っていない。居間のプレーヤーでこれをかけたら、間違いなく誰かの目に止まってしまう。

「……巡音さん？」

鏡音君にそう声をかけられて、わたしははっとなった。

「こういうのには興味ない？」

「そうじゃなくて……」

わたしはどうしようか、思い悩んだ。

「言いたいことあるならはつきり言ってくれていいよ」

全部……喋った方がいいのかもしれない。鏡音君に対しては。

「あのね……わたしとしては、これ、とても見てみたいんだけど……」

……

言いづらい。でも、言わなくちゃ。

「わたしの家……この手のもの、全部禁止なの……」

小さい頃からずっとそうだった。そして、それは今も変わっていない。

「……全部って？」

「漫画とか、アニメとか、ゲームとか、最近の音楽とか……」

だからわたしはこの手のものを満足に知らない。映画も、昔の名画とか、そういうものだけに限られている。ミクちゃんの家で映画は時々見せてもらっけれど、漫画やゲームは怖すぎて触る気になれない。

「えーっと……それ全部禁止なの？ 何か条件ついてるとかじゃない

くて、最初から全部？」

鏡音君が信じられないといった表情で訊いてきたので、わたしは頷いた。

「そういうものは、悪影響があるって……」

どういふ悪影響があるのかまでは説明してもらってないので、よくわからない。それに、ミクちゃんの家はどれも禁止じゃないけれど、ミクちゃんに何らかの悪影響が出ているようには見えないし……。

「俺の本音を正直に言わせてもらうと、巡音さんの親って、厳しすぎるというか、むしろおかしいと思う」

きっぱりと鏡音君はそう言い切ってしまった。

「……やっぱり、そう思う？」

おかしいのはわたしの家の方なのよね。

「やっぱりって？」

「わたしも……その、変じゃないかとは思ってたんだけど……。ミクちゃんの家は、どれも禁止じゃないし……。あまり話したことないけど、他の人もそうみたいだし……。でも、ミクちゃんの家はミクちゃんの家だから……」

「要するに、これが我が家ルールなんだからそれに従ってろって、そう、言われているわけ？」

わたしはまた頷いた。ずいぶん前に一度、訊いてみたことがあるのだけれど、大体こんな感じのことを言われて、怒られて終わりだった。

「そういうわけだから……。わたし、これ、借りて帰るわけにはいかないの。もし見つかったら、鏡音君にも迷惑がかかるし」

どうなるかは想像したくない。鏡音君が相手だったら、お父さん、怒るだけじゃ済まないかも。

「迷惑って？」

「……わたしがまだ小さかった頃の話なんだけど、ミクちゃんに漫画を貸してもらったことがあるの。そうしたら、それが見つかって

……お父さん、ひどく怒って。ミクちゃんの家で電話をかけて……
ひたすら苦情を……」

あの時。お父さんはミクちゃんの家で電話をかけて、電話口です
と強い調子で文句を言っていた。わたしは、お父さんが怖かった
のと、ミクちゃんへの申し訳なさで、ずっと部屋の隅で震えていた。
「その時、巡音さんいくつだったの？」

「確か……小学校の一年生」

幸い、ミクちゃんは怒らなかった。だから、わたしたちの関係は
今も続いている。わたしの方が、一方的にミクちゃんの好意に甘え
ているような状態ではあるけれど。でも……わたしにとって、ミク
ちゃんは大切な友達だ。

「あのさ……巡音さん。だったら、いつそ俺の家に来る？」

え……？ 想像していなかった申し出に、わたしの頭の中は真っ
白になった。

「家って……」

……鏡音君の家に、行くってこと？

「だから、俺の家。友達連れてきてどうこう言われるような、うる
さい家じゃないから。クオはよく遊びに来てるよ」

ミク才君は、そうだろうけど……。鏡音君の家に行くなんて、絶
対に許可してもらえない。それだけじゃない。何を言われるか……。
でも……このミュージカルがどんなものなのか。『ラ・ボエーム』
がどうやって、現代のお話になったのかは見てみたい。鏡音君も考
えてこう言ってくれたわけだし、断りたくはない。

言ったら……確実に怒られる。怒られるだけじゃない。下手をす
ると外出禁止にされてしまうかも。

じゃあ……言わなかったら？ 黙っていたら、もしかしたら、わ
からないんじゃない？

いけないことなのはわかってる。でも、わたしはどうしてもこ
のミュージカルを見てみたかった。

こんな風に何かを積極的に見たいって思うのも、ずいぶん久しぶ

りのような気がする。

「……本当に行つていいの？」

「来るつてこと？」

わたしは頷いた。

「……日曜なら、なんとか、家を抜け出せるところから……」

一日図書館で調べ物をするつて言えば、ごまかせるかもしれない。劇場も考えたけれど、あれだといつ終わるのがはつきりしてしまふ。その点図書館なら、閉館ぎりぎりまでいてもおかしく思われなはいはず。

「鏡音君の家つて、どこにあるの？」

わたしが訊くと、鏡音君は手帳を取り出して、何やら書き始めた。そしてそのページを破つて、わたしへと差し出す。

受け取つてみると、鏡音君の住所と電話番号が書いてあつた。携帯の番号とメールアドレスも。

「俺の家、ちよつとわかりにくいところにあるから、駅に着いたら電話して。迎えに行くから」

「……ありがとう」

「ついでに巡音さんの携帯の番号とアドレスも教えてもらえる？
もしうちに不都合があつたら、連絡しないといけないから」

鏡音君は、もっともなことを言つた。それ以前に、わたしの方からも教えるのが筋だろう。でも……。

「あの……教えるのはいいけど、なるべくかけないでもらえる？」

「どうして？」

「お父さん、わたしの携帯を調べることがあるから……見慣れないアドレスがあつたら、多分問い詰めると思うの」

鏡音君が呆れた表情になつたので、わたしはいたたまれなくなつた。

「だから、教えてくれたのは嬉しいけれど、わたしの方から携帯とかにかけることは、多分ないと思うの……ごめんなさい」

それから、わたしは自分の携帯番号とメールアドレスを、紙に書

いて鏡音君に渡した。

「それじゃあ、日曜日に」

「ええ……ありがとう」

そうして、わたしたちはそれぞれ自分の家に帰った。

その耳に届くただ一つの調べがあれば（後書き）

この作品は一人称で書かれているので、当然、キャラクターごとに持っている情報量に違いがあります。よって、リンの知っていることを他のキャラが知らなかったり、その逆もあります。

何が言いたいのかというと、あるポイントにおいてリンは事実を正しく認識していないということです。本筋とは直接関係ない部分ではありますが。

作中でリンが読んでいる作家、ガルシンですが、私は小学生の時に、児童向け文学全集に収録されていた、彼の『信号』という短編小説を読んで、一週間ぐらいひどく落ち込みました。要するに、そういう作家です。ただし名作だとは思いますが。

どんな作品書くの？ という方はこちらをどうぞ。ただし私みに落ち込んだとしても、保証はしません。

http://www.aozora.gr.jp/cards/000340/files/48128_34445.html

（本当は、『信号』にリンク貼りたかったけど、ここには収録されていないですね……）

道は歩くにつれてできるもの

その日の夕食の時間——お父さんは仕事、ルカ姉さんも仕事、ハク姉さんは自分の部屋、したがって、お母さんとわたしだけ——の時、わたしはお母さんに、日曜の予定について話すことにした。

「次の日曜は、図書館で調べ物をしようと思っているの」

図書館で調べ物は、前から度々やっているから、変に思われなはずだ。

「調べ物？　どれぐらい？」

「多分、一日かかると思うわ」

「そう……じゃあ、行つてらっしゃい。お弁当持たせてあげるから、門限までには帰ってくるのよ」

予想通り、お母さんは怪しまなかった。嘘をついてしまった罪悪感で、胸が痛む。……ごめんなさい、お母さん。

日曜になった。わたしは鞆に必要そうなものを詰めて、車に乗り込んだ。図書館までは少し距離がある。図書館で車から降りると、運転手さんは「では、夕方お迎えに来ます」と言つて、車で引き返して行つた。わたしは車が見えなくなると、図書館には入らずに、道を歩き始めた。

……何だか落ち着かない。わたしはいわゆる「箱入り娘」なので、こんな風に外の道を一人で歩くのは初めてだ。図書館から駅までの道の地図はコピーして来たけれど、何度も、こっちでいいのか確認してしまう。

幸い道は間違つていなかったようで、しばらく歩くと駅に着いた。わたしは大きく息を吐いた。次は切符を買わなくちゃ……。

切符を買つて、電車に乗る。……実はこれも初めてだ。もともと出歩く方では無いし、外出時は車で送り迎えしてもらえるので、電

車などの公共の交通機関を利用する機会が無かったのだ。だから学校の遠足や修学旅行以外で電車に乗ったことはないし、そういう時は切符はまとめ買いだし……。

来るまでは自分にできるのかどうか不安だったが、いざ来てみると、拍子抜けするぐらいことは簡単だった。わたしは電車の座席に座って、一息入れようとした。だが上手くないかない。結局、目的の駅につくまで、わたしはずっと緊張しっぱなしだった。

鏡音君の家の近くの駅に着いた。この駅はあまり大きくないので、改札は一つだけだ。駅前に公衆電話があつたので、そこから鏡音君の家にかける。コール三回で、相手が出た。駅に着いたことを告げると、すぐに行くので改札の前で待っていてくれ、と言われた。

わたしは落ち着かない気持ちのまま、改札の前で待っていた。十分ほどで、鏡音君が来てくれた。

「巡音さん」

「あ……鏡音君」

「大丈夫だった？」

「……なんとか。親に嘘ついちゃったけど」

思わず下を向いてしまふ。バレたら……うつん、こんなことを考えるのはよそう。

「俺の家、こつちだから。ついてきて」

わたしは、鏡音君に後について歩き出した。やっぱりまだ緊張する。

しばらく歩くと、鏡音君の家に着いた。

「着いたよ」

鏡音君が鍵を出して、ドアを開けてくれた。わたしは「お邪魔します」と言っ、中に入る。鏡音君も後から入って、ドアに鍵をかけた。

「姉貴、帰ったよ！」

家の中に入った鏡音君は、家の奥に向かってそう叫んだ。ぱたぱたと音を立てて、奥の部屋から女の人が出てくる。ルカ姉さんと同

じぐらい……かな？ 活発そうな感じの、スタイルのいい、綺麗な人だ。この人が鏡音君のお姉さんなんだ。

「レン、お帰り。そちらがお友達？」

「そっだよ」

「初めまして、レンの姉のメイコです」

鏡音君のお姉さんは、笑顔でそう言っただけで頭を下げた。慌ててわたしも頭を下げる。

「は……初めまして。巡音リンです。鏡音君とは同じクラスです」
わたしはそう言っただけで、お姉さんは怪訝そうな表情になった。

「……巡音？」

「そうです……どうかしましたか？」

どうしたのかな。そう思った矢先、お姉さんが言い出したのは意外なことだった。

「昔の知り合いに同じ名字の人がいたから……もしかして、親戚か何か？ 巡音ハクって、いうんだけど……」

わたしは驚いてその場に立ち尽くした。鏡音君のお姉さんが、ハク姉さんと知り合い？

「姉をご存知なんですか？」

「え、姉ってことは、あなた、ハクちゃんの妹なの？」

ハク姉さんをちゃん付けで呼んでる……。

「あ……はい」

「やだ、嘘、信じられない。世間って狭いのねえ。まさか弟が、ハクちゃんの妹と同じクラスとは」

お姉さん、なんだか嬉しそう……。でも、わたしは困ってしまった。となると、この後は絶対……。

「姉貴、巡音さんのお姉さんを知ってたの？」

鏡音君が、お姉さんにそんなことを訊いている。

「高校の時の部活の後輩なのよ。卒業してからずっと会ってないんだけど。懐かしいな。ハクちゃんはどう？ 元気にしてる？」

やっぱり……。どうしよう。引きこもってますなんて言えない……

…。

「あ……えーと、その……」

わたしは困り果てて、結局また要領を得ない返事をしてしまった。
「姉貴、お客さんを玄関に立たせっぱなしにしとくの？」

不意に、鏡音君がそう言った。お姉さんがはつとした表情になる。

……もしかして、今の、わたしを助けてくれたんだろうか。

「ああ、ごめんごめん。さ、あがってちょうだい」

お姉さんがそう言うて脇に退いたので、わたしは靴を脱いで、鏡音君の家にあがり、脱いだ靴を揃えた。

「俺たちは予定どおり『RENT』を見るから、姉貴、邪魔しないでくれよ」

わたしの後からあがった鏡音君が、お姉さんにそんなことを言っている。

「はいはい、わかったわ。じゃ、私は自分の部屋にいるから、用があつたら呼んでちょうだい。それと、お客さんには失礼のないようにね」

鏡音君のお姉さんはそう言うて、二階へと上がっていった。二階にお姉さんの部屋があるのね。

「巡音さん、こっち」

わたしは鏡音君の後について、隣の部屋に入った。畳敷きの和室で、中央に大きめの卓袱台、その周りに座布団が置いてある。

「適当に座ってて。今、お茶を淹れるから」

そう言われたので、わたしは座布団の一つに座った。鏡音君は居間に隣接しているキッチンに行つて、お茶道具を用意している。

「緑茶でいい？」

鏡音君が声をかけてきた。

「あ……うん」

わたしはまだ落ち着かない気分で、周囲を見回した。そんなに広くない——もつとも、わたしの感覚の方が一般的ではないのだろう——部屋は、おおむね片付いていた。サイドボードや本の詰まった

本箱が、壁際に置いてある。サイドボードの上の、大きめの写真立てがわたしの目に留まった。

その写真立てに入っていたのは、家族の集合写真だった。犬を抱いている男の子は、多分小学生の時の鏡音君だろう。隣にお姉さん、後ろに両親とおぼしき二人が立っている。お父さんの方はお姉さん、お母さんの方は鏡音君に似ている。

わたしが写真立てを見ていると、鏡音君がお茶を乗せたお盆を手に戻って来た。

「どうぞ」

鏡音君がわたしの前にお茶を置く。わたしはお礼を言った。

「……ありがとう」

写真のことを訊いてみたいけれど、いいものだろうか。わたしがためらっていると、鏡音君の方から説明してくれた。

「俺と姉貴と両親と、前に飼ってた犬。確か、旅行に出かけた先で撮ってもらったんだ」

「犬を飼ってたの？」

ミクちゃんはポメラニアンを飼っていて、ミクちゃんの家遊びに行った時に撫でさせてもらったりしている。ミク才君も種類は忘れたけど、大きな犬を飼っていて、いつだったか、庭でフリスビーを投げて遊んでいた。

「ああ、去年死んじゃったけど。巡音さんとは、ペットとかは？」

鏡音君に訊かれたので、わたしは首を横に振った。お父さんは、動物が嫌いだ。ミクちゃんのペットがうらやましくて、わたしも飼いたいとねだったけれど、許してもらえなかった。

「あの……そう言えば、鏡音君のお父さんとお母さんは？ 家にはないの？」

今日は日曜だから、たいていの人は家にいるはずなのに、出てきて挨拶をしたのはお姉さんだけだ。

「あー、えっとさ……うち、今、どっちもいないんだよ。あの写真を撮ったちよつと後に、父親が交通事故で亡くなって……」

鏡音君がそんな話を始めたので、わたしは固まってしまった。訊いてはいけないことを訊いてしまったみたい。

「……それは……その……ごめんなさい。わたし、そんなことだとは思わなくて……」

わたしは下を見ながら、やっとのことでそう言った。

「あんまり気にしないでくれ。実は……構えられるとこつちが辛くて、で、話戻すけど、そういうわけで、俺のところは母子家庭なんだ。で、母親の方は、去年から仕事で海外に行ってて、この家は実質上、俺と姉貴の二人暮らし。あ、夏と冬の休みの期間には、母さんも戻ってくるけど」

そう話す鏡音君の声は、普段とあまり変わらない。けれど、わたしは申し訳なくて、鏡音君の顔がまともに見れなかった。

「この話はここまでにして、『RENT』を見ようか」

……鏡音君は優しい。でも……だからかな。なんだか辛い。

道は歩くにつれてできるもの（後書き）

本人も言及していますが、この話のリンは滅茶苦茶箱入りなので、一人で外に出ることがほとんどありません。

ちなみに買い食いも基本的に禁止です。だから、ちょっと出かけた時にその辺のファーストフード店に入って、ということもありません。多分、ファーストフードの類を口にしたこと自体が皆無に近いかと……。

一歩一歩、一言一言

ミュージカル『RENT』は、不思議な作品だった。『ラ・ボエーム』とは、同じようできて、違う。『ラ・ボエーム』が十九世紀半ばのパリを舞台としているのに対し、『RENT』の舞台は二十世紀末のニューヨーク。百五十年でこんなに色々変わってしまったのかと思えるところと、ああ、やっぱり同じ話なんだと思えるところがあつて、わたしは見ていてちよつと混乱しかけた。

着ているものや、登場人物の考え方や扱われ方が違うだけではない。わたしはこの作品から、もっと「違う何か」を感じ取った。その、違いが何なのかはよくわからないけれど……。

『RENT』が終わつて、画面がメニューモードに戻った後も、わたしはしばらく、そのまま画面を見つめ続けていた。頭の中で、今見た作品のかけらが回っているような、そんな感じた。

……こういう感覚、前にも憶えがある。いつだっただろうか。もう、ずっと前のことだけれど、確か……。

自分の思考に没頭していたわたしは、目の前に新しくお茶の入った茶碗を置かれて、我に返った。

「……ありがとう」

「どういたしまして。で、どうだった？ 『RENT』」

訊かれて、わたしは考え込んだ。鏡音君には、ちゃんと返事をしない。

「その……すごく、力強い作品なのね」

わたしがそう言うと、鏡音君は嬉しそうな表情になった。

「そう思う？」

「ええ」

『RENT』では、登場するキャラクターの一人一人の中に、しっかりした軸のようなものが感じられた。『ラ・ボエーム』の方では印象の薄いコッリーネやシヨナールも、『RENT』では強い印象

が残る。むしろ、彼らの方が強いと感じる人もいるだろう。

「『ラ・ボエーム』とは、同じようで全然違うから、ちょっと驚いたけど」

わたしがそう言うと、鏡音君は頷いた。

「『ラ・ボエーム』は恋愛だけに話を集中させていた感じがするけど、『RENT』では、生きていくことに焦点が当たってるから」

ああそうか。枠組みが一緒なのに、テーマ性が違うから、違う感じがするんだ。

生きていくこと……。

「でも、今日だけをみつめて生きて行くっていうのは、何だか悲しい感じがするわ」

何度もでてきたフレーズ。「あるのはただ、今日という日だけ」
きつと作り手が訴えたかったことなのだろうけれど。

「そうかな？」

「だって、過去も未来も見なくて、ただ、ここにある今だけを見つめて生きるんでしょう？　そうやって刹那の生に意識を集中させてしまえば、過去のこと未来のこと、思い煩うことはないわ。でも、そうしないと生きていけないっていう、その事実自体が辛い気がするの。そうやって結局、日々は過ぎて行くんだもの。積み重なってできた過去という時間を、全部見ないようにしちゃっていいの？　無かったことにできるの？　その人を形作るのが、過去なんじゃない？　それを忘れて生きられるものなの？　未来だってそうよ。見ないようにしたって、いつかは来てしまうわ」

どんなに見ないようにしていても、いつかは終わりが来る。ロジャーもミミも、いつかは死んでしまう。この結末を、ハッピーエンドと見なしていいのだろうか。

「確かにそういう側面もあるんだろうけど……ロジャーもミミもエイズだし、ああいう『死が目の前にぶら下がっている』状態だと、それこそ、今、巡音さんが言ったように、その日一日一日だけに、意識を集中させていかないと辛いのかも」

鏡音君は真面目な表情で、そう語った。

「でも、ラーソン——あ、このミュージカルを作った人なんだけど——が考えていたことは、それだけじゃあないと思うな。このフレーズは最初、部屋に閉じこもっているロジャーをミミが誘いに来るシーンで使われるし。『悔やんでばかりだと人生を逃す』という歌詞にもあるとおり、過ぎた時間に囚われないことを訴えたかったんじゃないのかな」

わたしは、ハク姉さんのことを考えた。死ぬ病にかかっているわけではないけれど、ハク姉さんも部屋に閉じこもっている。閉じこもる一番の理由は……。

「ロドルフォは、結局、見たくなかったのよね」

「何を？」

「ミミがもうすぐ死ぬっていう現実。ロジャーも、きつとそう。自分もミミも、そんなにしないうちに死んでしまう。だからロドルフォは第三幕でミミと別れるし——春が来るのに別れるなんて、変なもの——ロジャーはギターを売ってサンタフェに引っ越すんだわ」

ハク姉さんは、何を見たくないんだろう？ ……訊いても、教えてくれそうにはない。そもそもわたしだって、何も考えないようにして過ごしてきた。考えたら、怖いことになりそうだったから。

でも、鏡音君と話をしてみても、こうやって、家に呼んでもらって確かに今でも色々と怖いけれど、それだけじゃないことがわかった。悩んだけど、来て良かったと思う。

そのとき、階段から下りてくる足音が聞こえてきた。お姉さんね。「ちよつといい？」

お姉さんは気を使ってくれているらしく、部屋には入ってこないで、廊下からそう声をかけてきた。

「いいよ」

鏡音君がそう言つと、お姉さんは部屋に入ってきた。

「姉貴、何か用？」

「あんたたち、お昼はどうするつもりなのかって訊きに来たのよ」

鏡音君の問いかけにお姉さんはそう答えた。あ……正午を大分過ぎてるんだわ。『RENT』と話に夢中になっていたから、気がつかなかった。

「何、姉貴、作ってくれるとでもいうわけ？」

「……あんたねえ。まあ、そのつもりで下りて来たんだけどね。スバゲッテイでいい？」

「作ってくれるんなら、なんでも」

お姉さんに鏡音君がそう答えている。

「巡音さんもそれでいい？ 姉貴の飯、一応それなりに食えるから」
「あのねえ……それが、作ってもらう側の言う台詞？」

お姉さんが呆れ顔で鏡音君を見ている。でも、本気で怒っているわけでもないみたい。

「あ……わたし、自分の分はお弁当持ってきたんですけど……」

図書館で一日過ごすと言って出てきたので、お母さんはお弁当を持たせてくれた。行きつけの図書館には飲食コーナーがあるので、図書館で一日過ごす時はそこで食べている。

「お弁当？ そういやハクちゃんのお弁当は、いつも手が込んだたわね……」

あ……藪蛇になっちゃったかもしれない。また、ハク姉さんのことを訊かれたらどうしよう……。

「でも折角来たんだから、少しは食べて行ってちょうだい」

「あ……はい」

わたしは頷いた。お姉さんはそのままキッチンへと行ってしまふ。

……助かった。

「巡音さん、ちょっと待ってて」

不意に鏡音君はそう言って立ち上がると、お姉さんの後を追ってキッチンへと行ってしまった。……どうしたのかな。

しばらくそのまま待っていると、鏡音君が戻ってきた。

「とりあえずブロッコリーを入れるのは阻止した」

「嫌いな？」

「ああ」

そんなに不味いかな？

「緑黄色野菜は身体に良いはずだけど」

栄養の宝庫って、家庭科の授業では習ったし、お母さんもそう言っていた。

「姉貴と同じようなこと言わないでくれよ。不味いもんは不味い」
きっぱりとそう言う鏡音君。本気で嫌いみたい。

「パン粉とチーズをかけて、オーブンで焼くと美味しいと思うけど」
「絶対にパス！ それ、姉貴に言わないでくれよ。聞いたら試すから」

「そんなに嫌わなくてもいいのに」

「巡音さんだって、食べられないものの一つ二つぐらいあるだろ」
「それは、あるけど……」

正直、納豆は苦手だ。あの食感とにおいが受け付けない。

「それと一緒に。ちなみに、嫌いなものって何？」

「納豆とか…… オクラとか……」

オクラはまだ食べられなくもないけど、納豆だけはどうしても無理だったりする。我が家の食卓に乗ることはあまりないけれど、学校の給食で出た時は泣きたくなった。

「オクラは俺も苦手だけど、納豆は好き」

え〜と。どう返事したらいいんだろう。

「そんなに真面目な顔して考え込まなくてもいいってば」

鏡音君にそう言われてしまった。それからしばらく、わたしたちは料理に関する話を続けた。

キッチンの方から、「レン、ちょっとこっち来て」と、お姉さんが鏡音君を呼ぶ声がした。

「ちよつと行ってくる」

そう言って、鏡音君は、またキッチンに行ってしまった。今度はそんなにしないうちに、台拭きを片手に持って戻って来た。それで、テーブルの上を拭いている。

「巡音さん、緑茶と紅茶とコーヒーと、どれにする？」

「あ……じゃあ、紅茶を……」

「紅茶ね」と言っ、鏡音君はキッチンへと戻っていった。今度はすぐ、フオークを手に持って戻ってくる。その後ろからお姉さんが、お皿の乗ったお盆を手に入ってきた。

「お待たせ」

お姉さんが手際よく、お皿をテーブルの上に置いて行く。キャベツとベーコンを使った、シンプルなパスタだ。

「はいどうぞ。飲み物を取ってくるから、ちょっと待っててね」

お姉さんは言ってしまった。わたしは、一応お弁当を取り出して、テーブルの上に置く。全部食べられるだろうか……。

「はい、リンちゃん、紅茶ね」

わたしの前に、紅茶の入ったカップが置かれる。鏡音君とお姉さんは、両方ともコーヒーみたい。

「あ、それがお弁当？」

お弁当箱を見て、お姉さんがそう訊いてきた。

「ええ」

「見てもいい？」

そう訊かれたので、わたしは頷いた。

「……どうぞ」

お姉さんはわたしのお弁当箱を手にとって、風呂敷を解いて蓋を開けた。

「わ……美味しそう」

中を見て、お姉さんは感激した様子でそう言った。

「他所のお弁当見るのってなんか、新鮮よね」

「あの……良かったら、少し食べます？ これ、全部はちょっとさすがに多くて……」

出されたものを残すのは気が咎めるし、かといってお弁当を残すとお母さんがまた心配しちゃうだろうし……。

「巡音さん、そんなこと言うとうちの姉貴、図に乗るよ」

「なんてこと言うのよあんたはっ！」

お姉さんはそう言っ、鏡音君を軽くはたいた。

「あの……本当に、食べてくれた方が助かるから。お弁当を残して帰ると、心配されちゃうし……」

「リンちゃんもこう言ってくれていることだし。シェアしましょうか。取り皿持ってくるわね」

「だからさあ、姉貴……」

鏡音君の言葉を見して、お姉さんはキッチンに行ってしまった。

「巡音さん、残すところさいの？」

「うるさいというか……この前貧血で倒れたから、お母さんがちょっと過敏になってるの」

そのせいか、最近のメニューは鉄分多めの料理が多い。昨日の夕食は、カキとほうれん草のクリームソース和えだった。

「鏡音君のお姉さんが作ってくれたパスタ、結構量があるし、これを食べるとお弁当を全部食べるのは無理だから。食べてもらった方がわたしも助かるの」

そこへ、お姉さんが取り皿を手に戻って来た。

「じゃ、食べましょうか」

一歩一歩、一言一言（後書き）

私自身はブロッコリーは美味しいと思いますが、嫌いな人、多いですね。

めーちゃんが作ったのはキャベツとベーコンをオリーブオイルで炒めておいて、そこに茹で上がったスパゲッティを投入してあわせるシンプルなパスタです。ささっと作れるので、お昼に重宝します。キャベツをブロッコリーに変えたり、ベーコンをソーセージに変えたりしても美味しいです。

何がわたしの心をひきつけるの

鏡音君のお姉さんが作ってくれたパスタは、とても美味しかった。鏡音君はああ言っていたけど、多分謙遜していたのだろう。

そのお姉さんは、わたしのお弁当箱のおかずを「美味しい」と感激しながら食べていた。鏡音君がやや呆れた表情で、そんなお姉さんを見ている。

ハク姉さんの先輩ということは、ルカ姉さんとハク姉さんの間ぐらの年齢ってことよね。でも、全然感じが違う。賑やかだし、よく喋る。鏡音君との食事中のやりとりを聞いていて思ったのだけけど、わたしはルカ姉さんとも、ハク姉さんとも、あんな風に話をしたことがない。

お姉さんは食べ終わると、空になった食器を下げにキッチンに行った。わたしは、鏡音君に訊いてみることにした。

「鏡音君のお姉さんって、いつもあんなに賑やかなの？」

「姉貴？ まあね。大体いつも、うるさいくらいよく喋るよ」

そこへ、お姉さんが戻って来た。飲み物のお代わりが乗ったお盆を手に持っている。

「はい、どうぞ」

「……ありがとうございます」

わたしはカップを受け取って、口をつけた。

「ねえ、リンちゃんって、今の学校は、中学と高校、どっちから？」
不意に、お姉さんがそんなことを訊いてきた。わたしの通っている高校は、中高一貫の進学校で、お父さんの卒業した学校でもある。そしてわたしは中学の時から、今の学校に通っている。

「中学からです」

「ふーん、知ってるだろうけど、レンは高校からなのよ。やっぱり、編入と持ち上がりって、何か違いとかあったりする？」

そう言われても、わたしにはよくわからない。今までそんなこと

を、気にしたことがなかったし。それに、鏡音君が高校からの編入組であることも、今聞いて知ったぐらいだし……。

「ちよつとわかりません……」

「中にいるとわからないものかしらね」

お姉さんはそんなことを言っている。鏡音君が割って入った。

「姉貴、何だつてそんなことを訊くわけ？」

「ただの好奇心よ」

それが、お姉さんの答えだった。……今の答え方、鏡音君とそっくり。顔は似てないけど、こういうところは似てるんだ。

わたしも他の人から見ると、どこかしら、ルカ姉さんや、ハク姉さんに似てたりするのかな……。今ひとつピンとこないのだけれど。

「あんまり質問責めになると、巡音さんが困るだろ」

「リンちゃん、困ってる？」

「え……いいえ」

わたしは首を横に振った。これくらいなら、平気だ。答えられないのがちよつと心苦しいけど……。

「ほーら、こう言ってるじゃない」

「それは、巡音さんが姉貴に対して気を使ってるんだつてば。……

巡音さん、姉貴に訊きたいことあるんだつたらなんでも訊いていいよ。巡音さんばかり答えるのは、フェアじゃないから」

鏡音君は、今度はそんなことを言い出した。……訊きたいこと？

わたしは、お姉さんの方を見た。明るい笑顔だ。

「あの……」

「うん、何？ スリーサイズと体重以外だつたら何でも訊いていいわよ」

訊いても、大丈夫かな……？

「……鏡音君から聞いたんですけど。お姉さんが、『ラ・ボエーム』のロドルフォのことを、ヘタレだつて言っていたつて。それで……」

そこまで言つたところで、お姉さんはくるつと鏡音君の方に向き直つた。

「ちょっとあんた、リンちゃんになんてこと言ったの!？」

「話のネタにちょうどよかったから、つい……」

「ついじゃないわよついじゃ! 何考えてるの!？」

「だって本当のことだろ。姉貴が酔っ払ったあげく、ロドルフォをヘタレの甲斐性なしって怒鳴りまくったのも、脚本にケチつけまくったのも」

「だからってハクちゃんの妹にそんなこと、言わなくてもいいでしょうがっ!」

「その時は、巡音さんのお姉さんが姉貴の後輩だなんて知らなかったんだよっ! わかるかそんなことっ!」

鏡音君とお姉さんは喧嘩を始めてしまった。……どうしよう。こんなことにするつもりじゃなかったのに。

わたしが困っていると、不意に、鏡音君とお姉さんは、言い争うのを止めた。

「あ……えーと、その……」

「ああ、気にしないでリンちゃん。定例の姉弟喧嘩だから」

そう言われてしまった。え……でも……。

「で……『ラ・ボエーム』の話ね。確かに言っただし、今でもそう思うわよ。あの主人公はどうしようもないヘタレの甲斐性なしだって。だって、生活力はないし、つまらない理由で恋人を捨てるし——くだらないこと画策してる暇があるんなら、バイトして薬代の一つでも作ればいいのよ——最後の時は恋人の手すら握ってあげられないんじゃないやあねえ。ヘタレとしか言いようがないわ」

「あの……すみません……」

訊かない方が良かったみたい。

「ああ、リンちゃんに怒ってるわけじゃないから、そんなに構えないで。怒ってるのはあの主人公に対してだから」

手をぱたぱた振りながら、お姉さんはそう言った。

「……えっと……」

「何?」

「そういうこと言うのって……怖くないんですか」

わたしがそう訊くと、お姉さんは首を傾げた。

「怖いって、何が？」

「その……プッチーニって、もともとイタリアオペラを代表する作曲家ですし、その中でも『ラ・ボエーム』は、彼の代表作で、最高傑作だって言う人もいるし、『泣けるオペラ』と評判だったりするし……」

「え、あれって『泣ける作品』だったの」

心底驚きましたという表情で、お姉さんはそう言った。ええーつと……わたしの持っているオペラの解説書とかには、そう書いてあるんだけど……。

「一応そのはずです……」

「うーん、でも、あれじゃ泣けないわねえ。何せ主人公がボンクラすぎるし」

そう断言するお姉さん。ボンクラでヘタレ……。ロドルフォはオペラの主人公の中では、嫉妬深いとはいえ、どちらかというと大人しい部類に入るのだけど……。他を見たら、どんな反応を示すんだろう？

「泣けるとか何とか云々以前に、姉貴その手の作品じゃ泣かないだろ。人を死なせて泣かせのシーンを作るのはあざとって、しょっちゅう言ってるじゃん」

鏡音君が口を挟んだ。……普段からそういう話をしているんだ。

「レンは黙ってて。あんたが口挟むと話がわき道に行くから」

お姉さんはぴしゃつとそう言ってしまった。

「で、リンちゃんは何が気になっているの？」

「あの……だから……高い評価を受けている作品に対して、そういうことを言っちゃっていいのかって……」

「そう言われてもねえ……実際に見ていてしらけちゃったわけだし。その、プッチーニって人には悪いんだけど、もうちょっと話の組み立て方を考えてほしいわ」

確かに、プッチーニのオペラは構成が無茶苦茶なところがある。

『ラ・ボエーム』はまだいい。『マノン・レスコー』を見た時は、あまりにストーリーの飛び方が唐突なので、わたしは見ていてひどく混乱した。

「そうねえ……じゃ、ちょっと訊くけど、リンちゃんはあれ見て泣いたの？」

「……いいえ」

そもそも、オペラは見て泣くものではないような気がする。息が詰まりかけたことなら何度かあるけれど。でも、それも、『ラ・ボエーム』ではないし……。

「結局、そこに帰結していくと私は思うのよね。例えば世界中の九十パーセントの人が認めた名作だって、あわない時はあわないんだし、リンちゃんはその作品を見てどう感じたのか、どう思ったのかわかることを、まずははっきり見極めないと」

お姉さんは真面目な口調で、そう言った。

「おかしくて笑っちゃうにせよ、逆に悲しくて泣いてしまうにせよ、自分がどう思うのかが大事でしょ。それがわからないんじゃ、自分がどこにいるのかもわからないわよ。そして更に自分の立ち居地をはっきりさせて、自分の考えってものを確立させて行く。そこが大事なんじゃないのかな」

わたしは……ずっと、考えることや、判断をすることが怖かった。そうすると、何もかもが終わってしまうような、そんな感情に囚われていた。

「まあ、更に付け加えさせてもらうと、一言だけ『つまらない』だの『泣きました』だので、終わらせてしまつのも良くないと思うのよね。せめてどうしてそう思ったのかぐらい、自分でちゃんと説明できなくちゃ。少なくとも、私自身は、自分で自分の感情や考えを、説明できるようにしておきたいの」

そこまで話すと、お姉さんはふうつと息を吐いて、コーヒーの残りを飲んだ。

「なんか、らしくもなく真面目な長話しちゃったわ」

「いえ……色々、ありがとうございます」

本当に……今日来て良かった。

「あの……もう一つ、いいですか？」

わたしは鞆を手元に引き寄せて、中からDVDを取り出した。マスのオペラ『タイス』だ。

「もしよかったら、これを見てもらいたいんですが……」

お姉さんはDVDを受け取った。

「……『タイス』ね。これもオペラ？」

「はい。このオペラの主人公のことを、どう思っのかが知りたくて……わたし、どうにもよくわからなくて」

鏡音君のお姉さんが、アタナエルのことをどう思っのかが訊いてみたかった。ちよつと図々しいお願いかもしれないけれど……。

「巡音さん、『タイス』って、どういう意味？」

鏡音君が訊いてきた。

「ヒロインの名前なの。このパッケージの女性がそう。彼女は遊女というか、高級娼婦というか、吉原の花魁みたいな人なのね。で、主人公はアタナエルという男性で、修道士。オペラの舞台は四世紀のエジプト」

わたしはざつと設定を説明した。

「変わった設定だな」

「でも結構面白そうじゃない。今見てもいい？」

お姉さんがそう言った。

「わたしは構いませんが……」

鏡音君はいいんだらうか。視線を向けると、鏡音君が頷いた。

「俺もいいよ」

「じゃあ見ましょうか」

お姉さんは、『タイス』のDVDをプレーヤーにセットした。オペラが始まる。

オペラが始まって、大体十五分ぐらいが経過した頃だ。話の内容

としては、アタナエルがタイスの夢を見て、彼女を改心させることが神の意思なのだと主張する辺り。突然、鏡音君のお姉さんがくすくす笑い出した。

「あ、あの……？」

思わず、そつちを見てしまつわたし。

「あ、ああ、ごめんごめん……気にしないで……」

言いながら、相変わらずお姉さんは笑っている。鏡音君が、ちょっと呆れた声をお姉さんにかけた。

「姉貴、何がそんなにおかしいわけ？」

「だって……この主人公、あまりにもわかりやすすぎるバカやつてるんだもの。これが笑わずにいられますか」

お姉さんは笑いながらもきっぱりとそう言ったので、わたしは呆気に取られた。

「バカつて……」

後の言葉が出てこない。こんなことを言われるとは思っていなかったし。

「バカつて、どの辺が？」

鏡音君がお姉さんにそう訊いている。お姉さんはリモコンの一時停止ボタンを押すと、笑いながら説明を始めた。

「いや」だって、この主人公、アタナエルだっけ？ 要するにただ単にタイスのことが好きなのよ。タイスが墮落してるから救ってあげなければとか言ってるけど、結局のところ、彼女が自分以外の不特定多数の男と寝てるのが気に入らないってだけ。なのに、自分が身体売ってる女に恋をしてるってことを認めたくないから『タイスを救うのが神の与えた我が使命！』だなんて、必死こいて言い訳作って、そうやって自分の体面を保ってるの。いや、本当、笑えるわ」

そこから先は笑い声だけになった。わたしは、お姉さんに言われたことを考えてみた。アタナエルはタイスのことが好き？ 確かにオペラのラストはそういう幕切れだけれど……。

「周りの態度を見る限り、結構ランクが上の人みたいなんだけど、だから余計認められないんでしょうね。この立派な俺様が、あんな穢れた女になんか！ って感じで。援助交際やりまくってる女の子に恋をした優等生みたいなもんって言ったら、わかりやすいかしら？」

わたしが前に読んだオペラの解説書では、アタナエルはタイスを改心させようと接している間に、彼女の色香に堕ちたと説明されていた。でも、最初からタイスが好きだったのだと考えると、話の意味合いがかなり変わってくる。

「大体、たった一人の女のせいで、都市全体が堕落するわけないでしょ。この男はそういう理屈でも作らないと、自分を騙せないのよでも、そうやって自分に嘘ついてごまかしたところで、どこかで限界来るわよ。まあ続きを見ましようか」

自分に……嘘をつく……

「まあ続きを見ましようか」

お姉さんはリモコンの再生ボタンを押した。オペラの続きが始まる。アタナエルが何かしら言う度に、お姉さんは吹き出していた。一方で、場所がニシアスの館に移り、タイスを始めとする複数の女性たちが登場して場が華やかになると、衣装に感嘆していた。

第二幕。一人になったタイスは鏡の前で現実を突きつけられる。そこにアタナエルがやってきて、信仰によって得られる永遠の幸福について語る。次第にアタナエルの説く世界へ、関心が傾いていくタイス。葛藤の後に、有名な瞑想曲が流れる。

「あれ、この曲って……？」

「『タイスの瞑想曲』といって、これ単独で演奏されることのある有名な曲なの」

『タイス』というオペラは知らなくても、この曲だけは聞いたことがあるという人も多い。意外とこういうことはよくある。例えば「天国と地獄」は、『天国と地獄』というオペラで使われる曲だ。他にも「真珠採りのタンゴ」や「韃靼人の踊り」等、元の作品を離れ

て有名な曲は多い。

瞑想曲の後、タイスはキリスト教への改宗を決意する。アタナエルはタイスに、不浄な仕事で築き上げた財産を、全て燃やして灰にしろと指導する。火は、おそらく浄化と結びついている。タイスはそれに従おうとするけれど、小さな象牙の像を取り出して、これだけは焼かないで、誰かに持ってほしいと訴える。古代の名工の手によるもので、価値のあるものだからと。でもそれがニシアスからの贈り物だと聞くと、アタナエルは激昂して「今すぐ壊してしまえ」と命じる。

お姉さんは、ここで派手に笑い転げた。テーブルの上に、突っ伏しそうな勢いで。

「ね？ 言ったとおりでしょ？」

「これは……確かにヤキモチ以外の何物でもないな」
鏡音君が頷いている。

「相手が自分の友達だから、なおさら許せないんでしょうねえ。でも、それを自分で自覚してない辺り、始末が悪いのよね……ああ、おかしい……」

お姉さんは笑いの発作を抑えこもうとしながら、そう言った。わたしはちよつと気になったので、訊いてみることにする。

「あの……そうなんですか？」

「ニシアスからのプレゼントだって聞くやいなや、即激怒する辺り間違いないわ。それまで割と落ち着いて聞いていたのに、急にぶつんしたでしょ。どう見てもこれは嫉妬ね」

きつぱりとお姉さんは断言してしまった。画面では、オペラが続いている。アタナエルはタイスを連れ出そうとし、アレクサンドリアの人々が激怒する。そこへニシアスがやってきて、金貨をばら撒いて二人の逃亡を助け、タイスへの別れの気持ちを歌う。ここで第二幕が終了。

第三幕では、アタナエルとタイスは女子修道院へ向かうため、砂漠を渡っている。疲労で倒れるタイス。アタナエルは初めてタイス

を氣遣う。その後タイスは修道院に入ってしまった、アタナエルは「もう会えないのか」と、淋しそうに彼女を見送る。解説書などではこの旅で情が移ったとか、魅惑されてしまったとか、書かれていることが多い。……お姉さんは相変わらず笑っている。

自分の修行場である砂漠の修道院に帰ってきたアタナエルだけど、その心が安らぐことはない。夢にタイスが現れ、彼を誘惑して苦しめるからだ。彼女を忘れられないと苦悩するアタナエル。……限界って、こういうこと？

「遅いつて！」と、お姉さんが突っ込んでいる。そこへ、タイスが死にかけているとの知らせが入り、アタナエルは女子修道院へと向かう。

いよいよオペラはフィナーレを迎える。タイスは瞑想曲の調べに乗せて「あなたのおかげで私は安らぎ、神の国へ入れる」と歌うのだけれど、アタナエルは「お前の美しさだけが真実だった。置いていかないでくれ！」と歌うのだ。二人の歌声がすれ違ったまま、タイスは死んでしまい、アタナエルは絶望して、最後の幕が下りる。「ああ、おかしかった……オペラがこんなに面白いとは思わなかったわ」

お姉さんは相変わらず笑いながらそう言った。え、えーと、どう答えれば……。まさかここまで笑われるとは思ってなかったし……。

「姉貴、今回は主人公がバカ入ってる割に怒らなかったね」

隣から、鏡音君がそんなことを言う。アタナエルって、鏡音君から見てもバカに見えるんだ……。

「んー、ここまで道化に徹されると、笑えて来ちゃって怒るところじゃなくなるわね。かなり主人公を突き放した作りになってる辺り、作った人もわかってやってるんじゃない？ それにしても救いよりのない主人公だわ。傲慢と嫉妬のあわせ技抱えてる人が、神の道を説くんだから。まず自分を振り返りなさいって」

アタナエルに救いが来ないイコール突き放した作り、と受け取っているみたい。悲劇性を増したいだけだと思っていたのだけれど、

違うようだ。お姉さんの言うことを聞いていると、『タイス』が、今まで思っていたのとは、全然違うストーリーに見えてくる。

「俺は、その辺りが皮肉だと思うんだよね。だってこの主人公、自分に嘘ついて誤魔化しまくっているのに、ある意味ではタイスを救ってしまっただから」

今度は鏡音君がそんなことを言い出した。アタナエルの行動は本心から出たものでなくとも、タイスはそれによって一種の宗教的救いを得る。

……差し出された物が偽物でも、それに真摯な気持ちで向き合ったら、自分の中では本物になるということなのだろうか。でも、それを目の前で見せられるアタナエルは気の毒だ。

……タイスはどうなんだろう。宗教に生きて、あれで本当に良かったんだろうか。

「タイスは……幸せだったのかな」

最後彼女は幸せだ幸せだと何度も歌うけれど、その「天上の幸福」というのが、わたしにはよくわからない。

「俺は宗教の話はよくわかんないけど、幸せではあったんじゃないかな？」

「自分の心に素直に向き合った分、アタナエルよりは幸せな結末と言えるんじゃない？ 死ぬまでの日々は穏やかだったんじゃないのかな」

心に素直に向き合うこと……自分に嘘をつかないこと……。あの日の夢。わたしの中には……何か残っているものがあるのだろうか。「あの……ありがとうございました」

そう言うと、お姉さんはにっこり笑った。

「そんなかしこまらなくていいわよ。かなり言いたい放題だったし。面白い作品見せてくれて、こっちこそありがとう」

もう一つ……訊いてみよう。

「『ラ・ボエーム』と『タイス』だったら、どっちが好きですか？」
「当然『タイス』ね」

お姉さんは即座にそう答えた。……やっぱり、こっちなんだ。

と、ここでわたしは時間に気づいた。もつと話していたいけど、もう帰らなくちゃ。お迎えまでに図書館に戻れなくなってしまふ。

「あの……お話するのは楽しいんですけど、わたし、そろそろ帰らないと……」

「そう？　じゃあ、気をつけてね」

お姉さんはプレーヤーからDVDを取り出して、ケースに入れて渡してくれた。わたしはDVDケースとお弁当箱を、鞆に仕舞った。これでもう、忘れ物はないわよね。

「それでは、失礼します。今日はありがとうございました」

「駅まで送ってくよ」

鏡音君がそう言って立ち上がった。ちょっとほっとする。一人で駅まで戻るかどうか、自信がなかったから。

「……ありがとう」

わたしは鏡音君と一緒に、玄関から外に出た。お姉さんは、玄関まで見送ってくれた。

何がわたしの心をひきつけるの（後書き）

ちなみに、めーちゃんの料理の味ですが、この作品ではちゃんと美味しいレベルです。レンが手厳しいのは、血の繋がった姉だから弟という生き物は、姉の手料理なんて褒めないもんです。

それにしても、めーちゃん笑いすぎ……。

とはいえ、やや極論に走っているとはいえ、めーちゃんの言うことはポイントを突いている部分もあります。

よくわからない、という人には、実際に『タイス』を見てほしいんですが、マイナーな作品だからちよつと難しいかなあ。『ラ・ボエーム』なら、少し前にオペラを映画にしたものがあるので、レンタルショップなどで借りれると思うのですが。

死ぬ前に一度は生きてみたい

わたしは、鏡音君と一緒に駅へと向かった。来る時は緊張で周りの景色を見ることができなかったけれど、帰りの道はもう少しゆったりした気分で歩けたので、歩きながら辺りを眺めることができた。この辺りは住宅街なのか、小さな家がずっと並んでいる。

「姉貴の言うことは、あんまり真に受けない方がいいと思うんだよね」

鏡音君がそんなことを言ってきた。

「どうして？」

「んー、滅茶苦茶言う人だし、思ったこと全部言わないと気が済まないようなところあるし、言い回しに容赦が無いし……巡音さん、びつくりしたんじゃない？」

確かに驚いたけれど……でも、鏡音君のお姉さんのような人の方が、話しやすい気がする。少なくとも、話しかけたらいつもちゃんとした返事が返って来そうだ。

ルカ姉さんと最後にまともな話をしたのって、いつだっけ……。思い出せない。もしかしたら、そんな時間自体が無かったのかもしれない。

「驚きはしたけれど……鏡音君のお姉さんは、嫌いになったら、はつきり『嫌い』って、言ってくれそう」

「まあ、そりゃなあ……」

鏡音君が言いながら首を傾げている。伝わりにくかったみたいだけど、否定はされなかった。

……ルカ姉さんは、本当はわたしのことが嫌いなんじゃないか。時々そう思う時がある。でも訊いても穏やかな調子で「嫌いじゃないわ」とだけ、答えるんだろうな……。それに……こんなことを考えてしまうわたしの方が、おかしいのかもしれない。

そうこうするうちに、駅に着いた。券売機で帰りの切符を買うと、

わたしは鏡音君の方に向き直った。

「送ってくれて、ありがとう」

「これくらい大したことじゃないから」

「送ってくれたことだけじゃなくて……今日のこと全部、本当にありがとう。とても楽しかった」

こんなに気持ちが浮き立ったのは、本当に久しぶり。前にそう感じたの、いつだったろう。……思い出せない。

あれ……鏡音君、なんだかびっくりした表情でわたしを見ている。わたし、何か変なことを言ったの？

「……鏡音君、どうかした？」

「あ、いや……なんでも」

そう言われてしまうと、それ以上訊いてはいけないような気になる。……それに、もう行かないと。

「それじゃあ、わたしはこれで。また明日、学校で」

「ああ、気をつけてね」

わたしは鏡音君に向けて手を振ると、改札を抜けて、駅のホームへと向かった。急いで帰らなくちゃ。

幸い道に迷ったりすることもなく、わたしは無事図書館までたどり着いた。後はお迎えに来てもらえばいい。運転手さんに連絡して、図書館まで来てもらうと、わたしは家に帰った。

帰宅すると、また神威さんの車が止まっているのが目に入った。

なんとなく眺めていると、玄関のドアが開いて、神威さんとルカ姉さんが出てきた。

「それでは、行ってきます。そんなに遅くならないようにしますから」

神威さんがドアの方を振り向いて、そう言っている。ここからは見えないけれど、多分お母さんがいるのだろう。お父さんは今日はおかけているはずだから。

「楽しんでいらつしやい」

やっぱり、お母さんの声だ。神威さんは、「では」と言って、車に向かつて歩き出した。その少し後ろを、ルカ姉さんが歩いている。神威さんは車のドアを開けてルカ姉さんを乗せると、自分は運転席に乗り込み、走り出して行つた。多分、食事にも行くのだろう。時々、二人はこうやって出かけている。

……でも。ルカ姉さん、楽しそうじゃないのよね。かといって、嫌がつているという風でもない。何だろう……何て言っているのか……。

わたしは頭を振ると、玄関に向かった。玄関には、まだお母さんが立っていた。

「リン、お帰りなさい」

「ただいま、お母さん。ルカ姉さん、出かけたんだ」

わたしがそう言つと、お母さんは頷いた。

「神威さんとお食事に行つてくるそうよ。楽しんできてくれると、いいのだけれど……」

ルカ姉さんの楽しみつて何なんだろう？ 今日、わたしは鏡音君の家に行つて、楽しかった。ルカ姉さんが何を楽しいと思つているのか、わたしには想像がつかない。

「……リン、何かいいことでもあったの？」

不意に、お母さんがそう訊いてきた。

「えっ……どうして？」

「そういう顔をしているから」

「あ……その……図書館に、面白い本があつたの。オペラに関する本」

本当のことを知られたらまずいと思つたわたしは、咄嗟に適當なことを言つた。これでごまかせるだろうか……。

「そう……良かったわね」

怪しまれてはいない……かな？ ごまかせたみたい。やっぱり申し訳ない気がするけれど。

「リン、お弁当箱を出しておいてね。夕ごはんは七時よ」

「わかったわ」

わたしはキッチンに向かうと、お弁当箱を流しの上に置いた。それから、階段を上って二階へと上がり、自分の部屋へと向かうとした時だった。

突然、近くの部屋からガラスか何かが割れる音が聞こえてきたので、わたしは驚いて立ち止まった。何なの？

音が聞こえて来たのは、ハク姉さんの部屋だった。わたしはおそるおそるハク姉さんの部屋に近づいて、耳を澄ました。……今は何の音も聞こえない。とりあえず、ドアをノックしてみる。

「……ハク姉さん？ リンだけど、何があったの？」

中からはやっぱり何も聞こえて来ない。……寝ているんだろうか。そう思った時、中から聞こえてきたのはけたたましい笑い声だった。「ハク姉さん？ どうしたの？」

返事はない。笑い声だけだ。ハク姉さん、どうしちゃったの……。わたしはドアの取っ手をつかみ、回してみた。あ……。鍵、かかってないわ。

「ハク姉さん、入るわ……。ちょっと、どうしたの!？」

部屋に入ったわたしは、思わず大きな声をあげてしまった。いつものように散らかった部屋の中、ハク姉さんは床にべったり座り込んで、赤い顔で笑っている。手にしっかり抱えているのは……。お酒の瓶。

「あゝれゝ、リンじゃない。あははっ……」

「ハク姉さん、どうしちゃったの!？」

わたしはドアを閉めると、ハク姉さんの傍らに駆け寄った。ハク姉さんは相変わらず笑っている。……お酒臭い。ずいぶん飲んだみたい。あ、この瓶、応接室のガラス棚にあったウイスキーだわ。いつの間に持ち出したんだろう。

部屋を見回すと、壁際に粉々になったガラス片がまとまって落ちていた。どうやら、コップを壁に向かって投げつけたらしい。

「ハク姉さん……」

「リン、あんたも飲む？」

ハク姉さんはそう言っ、わたしにウィスキーの瓶を差し出した。
「……わたしは未成年よ」

とはいえ、このままにしておくのも良くないわよね。わたしはハク姉さんからウィスキーを取り上げると、テーブルの上に置いた。

「固いこと言わないの」

「固いこととかじゃなくて……それより、どうしちゃったのよ？」

ハク姉さんは成人しているから、飲酒自体は構わない。問題は、どうしてこんなになるまで飲んだのかということ。そもそも……

ハク姉さん、お酒飲む人だっけ？

「ん、べつに」

「いつから飲んでるの？」

「わすれ」

わたしは困ってしまった。どうしたらいいんだろう。

「ハク姉さん……」

「どーせ、あたしは厄介者」

今度は歌いだした。うちで日常的にお酒を飲むのはお父さんぐら
いだし——お母さんとルカ姉さんは、おめでたい時にワインかカク
テルをグラス一杯飲むくらいだから——そのお父さんにしても、前
後不覚になるまで飲むなんてことはまずやらない。だから人が酔っ
払った時、どうしてあげたらいいのかわからない。……鏡音君だ
ったら知ってるのかな。お姉さんがお酒飲む、みたいなことを言っ
ていたし。

「……そう言えば、ハク姉さん。今日、ハク姉さんの先輩って人に
会ったの」

「へえ……誰？」

「鏡音メイコさん。ハク姉さんの高校の先輩だったって、言っ
たわ。ハク姉さんのこと、懐かしがってた」

対処に困ったわたしは、そんな話を始めてしまった。ハク姉さん

の焦点のあつてない目が、こつちを見る。

「……メイコ先輩？」

「そう、メイコ先輩」

わたしの言っていること、伝わっているのかな。そう思った時だった。ハク姉さんが、不意にわたしに抱きついてきた。

「……ハ、ハク姉さん!？」

「メイコせんぱあいつ!」

……苦しい。わたしはハク姉さんを離そうとしたけれど、向こうはすごい勢いでしがみついてくる。

「聞いてくださいよおメイコ先輩っ!」

「わたしは、メイコ先輩じゃないってば!」

叫んだけれど、ハク姉さんには聞こえていない……というか、伝わっていないみたいだった。

「あたしはいらな子なんですよお」

「ちよつと、ハク姉さん……」

「でもそれもしょーがないんです。だって、あたしだけデキが悪いんですから。不公平ですよねえ。姉も妹もデキがいいのに、あたしだけデキが悪いって。姉はともかく、妹は同じ遺伝子からできてるんですよ。神様って、どーして配慮つてものがないんですかあ」

ハク姉さんは、ものすごい勢いでばやし始めた。

「ね、ねえ、ハク姉さん……」

「この家はデキの悪い子はいらないですよお。あたしが受験に失敗した時、パパはあたしのこと、負け犬でも見るみたいな目で見ていたしい」

「……………」

「あたしの不幸は、こんな家に産まれたことから始まってんですよ。デキの良すぎるお姉ちゃんを持ったばかりに、小さい頃から比べられてばかり! パパも先生も、『ルカと比べて勉強ができない』『ルカと違って面倒ばかり起こす』って! 唯一の味方だったママは出て行っちゃったしい、妹はママの存在を忘れて継母なん

かにべつたり懐かしい」

そんなこと言われたって……わたしは実のお母さんの顔を憶えていないのだ。顔も憶えていない人を、どうやって懐かしがれというの？

「結局、あたしは中学も高校も受験に失敗して、パパからは『人生の落伍者』扱いされて、お姉ちゃんからは『私にあんたとは違うのよ』って目で見られてえ——あの人絶対人間じゃないです、きっとどこかで作られたいい子のロボットなんです——妹は妹であたしが落ちた中学にあっさり受かるしい」

わたしだって……好きで受験したんじゃないのに。それに「あっさり」受かったわけじゃない。わたしの成績は確かにそれなりのレベルだけれど、それでも、ルカ姉さんと比べるとやっぱり見劣りする。何しろルカ姉さんは、中高六年の間、ずっと学年トップだったのだ。七つ離れているとはいえ、古くからいる先生方から度々「お前のお姉さんは凄かった」と、どうしても言われてしまう。

「ハク姉さん、ぼやくのやめてよ！　わたしにどうしろって言いたいのか！？」

気がつく、わたしは叫んでいた。ハク姉さんが、反射的に黙る。「せんぱあい……相変わらず、手厳しいですねえ……」

ハク姉さんはまた笑い出した。さっきまでぼやいていたのに……酔っ払いつて、こういうものなんだろうか？

それにしても……鏡音君のお姉さんに、ハク姉さんはこういう話をしていたのだろうか。頭が痛くなってきた。明日、鏡音君にどんな顔をして会ったらいいんだろう。

「先輩って、前からそうですよねえ……あたしがサブ入らないってぼやいていたら、叱咤しながらも練習つきあってくれたしい……」
ハク姉さんは、わたしから離れて床に座り込んだ。でもまだ、わたしのことを鏡音君のお姉さんだと思っているみたい。

「……眠い」

わたしが困り果てていると、ハク姉さんはそんなことを言い出し

た。

「ハク姉さん、眠いって……」

「眠い……もう寝る」

ハク姉さんは子供みたいな口調でそう言うと、のろのろと立ち上がって、ベッドに向けて歩き出した。酔っ払っていても、ベッドに向かうんだ……。そのままどさっとベッドに倒れこむと、次の瞬間には寝息を立てている。

わたしはため息をつくくと、眠ってしまったハク姉さんに掛け布団をかけた。このままにしておいたら、風邪を引いてしまう。えーっと、このウイスキー、戻しておいた方がいいわよね。わたしはウイスキーの瓶を手に取ると、ハク姉さんの部屋を出た。

応接室は一階だ。瓶を抱えて階段を下りて行くと、お母さんとはったり会ってしまった。

「リン、どうしたの？」

「え、えーっと、その……」

わたしは途方にくれた。お母さんが、わたしの手にあるものを見る。

「それ……」

「……………」

何て言えばいいんだろう。そう思っていると、お母さんはわたしの手から、ウイスキーの瓶を取り上げた。

「……ハクね？」

言われて、わたしは驚いた。

「知ってたの？」

そう訊くと、お母さんは頷いた。知ってたんだ……。

「リン、このことはお父さんには言わないでちょうだい。言つとまた話がこじれるから」

わたしは頷いた。お父さんが知ったら怒るだろう。そんな修羅場はわたしだって見たくない。

「お母さん……ハク姉さん、いつから飲んですの？」

「多分一年ぐらい前から。その頃から、応接室やキッチンのお酒が時々無くなるようになっていて……現場を押さえたのは半年ぐらい前だけど、止めるとあの子、余計荒れそうで……」

お母さんはため息をついて、ウイスキーの瓶を軽く振った。

「ずいぶん飲んだわね……これは戻しておくから、リンは自分の部屋に戻ってなさい」

「うん……わかった」

わたしは階段を上って、自分の部屋に入った。入った瞬間、疲れを感じて、ベッドの上に座り込む。

折角いい日だったのに、終わりがこれなんてあんまりだ。わたしだってお父さんに無理矢理受験させられたのに。自分の通った中学及び高校に、娘を通わせるのがお父さんの「ステータス」だったから。なんでわたしもなの、ルカ姉さんだけじゃ満足できないのって、どれだけ言いたかったことか。でも怖くて言えなかった。お父さんがわたしのぬいぐるみや絵本を捨てたのは、ハク姉さんが中学受験に失敗してから数日後だった。いつまでも子供っぽいことばかりしてるんじゃない、お前までハクと同じになるなって。あの日のことが怖くて怖くて、わたしは言われるまま大人しく勉強した。逆らったら、今度はわたしが捨てられるんじゃないかって気がして。

……涙がでてきた。わたしは自分の部屋で、ひとしきり泣いた。

そう言えば……絵本やぬいぐるみを捨てられてしまってから数ヶ月後、たまたま点けたテレビに映っていたのが、チャイコフスキーのバレエ『眠れる森の美女』だった。無くしてしまったおとぎ話の世界。わたしはうつとりとそれを見ていた。それを見たお母さんが、時々わたしを劇場へと連れて行ってくれるようになったんだ。

わたしはバレエやオペラの世界に夢中になった。『くるみ割り人形』『シンデレラ』『火の鳥』『ヘンゼルとグレーテル』『魔笛』……。お父さんは最初それも嫌がっていたけれど、ある時家に来た

お客さんがわたしのことを「バレエやオペラの鑑賞とは、高尚なご趣味ですね。この年齢で芸術がわかるなんて、きっとご両親の教育がよろしいのでしょう」と褒めて以来、これに関してはさほどのさく言わなくなった。実を言えば、芸術がどうこうなんてわたしにはわからない。ただ、無くした世界を取り戻したかっただけなのだから。

それでも、お父さんがまた何か言い出すんじゃないかという恐怖だけは、拭いさることができなかった。いつもおとぎ話に近いものだけを見ていたら、変に思われるんじゃないか。お前は結局、小さい頃と何も変わってない、そう言われるんじゃないかって。だから無理をして難しいものも見るようにしていった。そして、解説書の類を買ってもらって、知識もつけた。咄嗟に何か訊かれたら、そのない受け答えができるようにするためだ。

そういうことをやっているうちに、わたしはこういうものを見始めた理由を忘れてしまった。そして劇場に通ったりDVDを鑑賞したりすることが、何も考えず時間を潰すための行為になってしまっていたんだ。何を見ても楽しいとか悲しいとか、そういう感情がどんどん湧いてこなくなつて。ただぼんやりとしていた。

……例外は、ミクちゃんという時だけ。ミクちゃんと一緒にいる時だけは、何かをすることが楽しかった。多分、ミクちゃんがいつも楽しそうにしているくれたからだろう。

「ミクちゃん……」

わたしたちは、同じ幼稚園に通っていて仲良くなった。その幼稚園は、いわゆる附属の幼稚園で、そこに入っていれば大学までエスカレーター式に進むことができた。けれどお父さんは、ルカ姉さんが中学受験に成功した時から、わたしとハク姉さんにも受験させると決めてしまった。

わたしは、ミクちゃんにその話ができなかった。だけど小学校の高学年になって、ミクちゃんが「中学になってもずーっとずーっと友達だからね」と言った時、黙っていることが後ろめたくなって、

受験の話を打ち明けた。ミクちゃんは驚いていたけれど、次の日、あっけらかんとう言ってきたのだ。

「わたしも受験する。リンちゃんと一緒に中学に通いたいから」
わたしは哑然となった。ミクちゃんがこんなことを言い出すなんて、思ってもみなかったのだ。そして一緒に学校の通いたいと言ってくれたことが嬉しかった反面、こんなことに巻き込んでしまつてすまないと思わずにはいられなかった。

どうやったのかは知らないけれど、ミクちゃんは自分の両親を説得して、家庭教師をつけてもらい、その日から猛勉強を始めた。そして、わたしと一緒に受験して、合格した。合格発表の日、わたしたちは抱き合つて喜んだ。

ミクちゃんは、本当は受験なんてする必要はなかったんだ。ミクちゃんのお父さんは、わたしのお父さんのように勉強勉強とやかましく言わない。わたしと友達でさえなかったら、ミクちゃんは今も、最初の学校に通つてのんびり学生生活を送っていただろう。

わたしは自分の両腕をきつくつかんだ。爪が肌に食い込む。そうやって、ただずっとそこに座っていた。

死ぬ前に一度は生きてみたい（後書き）

クリュソミテースはこんな気持ちだったんだろうな、と思ってしま
うリンでした、というお話。父と母が逆だけど。

ちなみに、ル力は別にハクに対し「私はあると違うのよ」とま
では思っていない。まあ「どうでもいい」存在ではあるのですが
……。

どうか扉を開けさせて

月曜の朝、学校に行く前にハク姉さんに声をかけてみようかと思っただけで、誰かに見咎められるのが嫌で、声をかけることはできなかった。お父さんやルカ姉さんとはったり会って、何をやっているのか訊かれたら答えづらいし……。

ちょっと暗い気分わたしは朝食を食べ、学校に向かった。教室に入り、自分の席に座る。いつもならここで持ってきた本を開くところなのだけれど、今日はそういう気分になれない。わたしは席に座って、ただぼんやりとしていた。

「おはよう、巡音さん」

声をかけられて、わたしは振り向いた。……鏡音君だ。大体いつも、わたしより少し後の時間に登校している。

「おはよう、鏡音君」

わたしはどんな表情をしたらいいのかわからず、下を向いてしまった。

「何かあったの？」

鏡音君がそう訊いてきた。……なんでいつも、わかつちゃうのかな。

「あの……鏡音君。ちょっと訊きたいんだけど」

わたしは話を切り出すことにした。

「何？」

「昨日……わたしが帰った後で、お姉さんから何か話を聞いた？」
わたしの言葉を聞いた鏡音君の表情に、一瞬動揺が走った。やっぱり聞いたんだろうか。わたしと二人の姉のややこしい関係は、できればあんまり話したくない。

「話って、例えば？」

「その……わたしの、姉のことか」

鏡音君はほっとした表情になった。……聞いてないの？

「ちょっとはね」

何を聞いたんだろう。

「どんなこと？」

「姉貴が高校時代のアルバム引つ張り出してきて、巡音さんのお姉さんと映ってる写真を見せられた。姉貴が言うには、今が一番いい時代なんだって。姉貴、まだ、過去を懐かしむような年でもないと思うんだけどね」

「そうなんだ……」

そう言う鏡音君の声は、いつもと全く変わらない。どうやら本当に聞いていないようだった。良かった……。でも、じゃあ、さっきの動揺は何だったんだろう？

でも、それは訊かない方がいいかもしれない。何か個人的なこともかもしれないし。

「もう一つ訊いてもいい？」

「いいけど」

「鏡音君は、お姉さんがひどく酔っ払った時ってどうしてるの？」

少なくとも、『ラ・ボエーム』を見た時はひどく酔っていたって言うていたわよね。そういう時はどうしているんだろう。

「放っとく」

鏡音君の答えは、ひどく簡潔だった。……え？

「放っとくって……」

「だってあんな状態の姉貴の相手なんてしてられないよ」

鏡音君は両手を上にあげて、そう答えた。

「酔っ払いつて理屈通じないし、そんなになるまで飲む方が悪いし。まあ、姉貴も年がら年中そうなるわけじゃなくて、年に一度か二度ぐらいだけ。寒い季節で寝てしまったってんなら毛布ぐらいはかけてやるけど、後は放置」

「それでいいの？」

「姉貴は別にアル中じゃないから、次の日になれば、酔いも醒めて正気に戻ってるしさ。なんか話があるってのなら、その時にした方

「が早いし」

ハク姉さんだって、いつも飲んでるわけじゃないのよね……昨日はあんなところを見てしまったせいで慌ててしまったけど、今頃は正気に戻ってるのかな。

「誰か漬れでもしたの？」

鏡音君はそう訊いてきた。

「……ええ、まあ」

わたしは頷いた。

「ありがとう」

「お礼なんかいいいよ、別に。これぐらいのことで」

そう言った後で、鏡音君は考え込む表情になった。

「巡音さん。もしかして、酔っ払ったのってお姉さん？」

「あ……」

唐突にそう訊かれて、わたしは動揺した。……これでは、はいと答えているようなものだ。

「え、ええ……」

ハク姉さんのこと、やっぱり説明した方がいいのかな。でも……。こんな話をされても困るだろうし……。鏡音君に話したら、お姉さんにも伝わるわよね。

「心配なら、なんで飲んだのか後で訊いてみたら？ うさばらしとかなら問題だけど、単に楽しくて飲みすぎたってんなら、放つといて大丈夫だと思う」

うさばらしか……。誰かと何かあったのかな？ お母さんとか、ルカ姉さんとか……。でも、お母さんもルカ姉さんも、自分からハク姉さんに話しかけることなんて、ほとんど無いし……。

「う、うん……。ありがとう……。色々」と

鏡音君にお礼を言っていると、ミクちゃんがやってきた。

「リンちゃん、おはよう」

「おはよう、ミクちゃん」

「じゃ、俺はこれで」

鏡音君は、自分の席へと戻って行った。

ふと気がつくと、ミクちゃんが興味津々といった表情で、わたしを見ていた。……思わず後ずさりしそうになる。

「……ミクちゃん？」

「リンちゃん、鏡音君と何話してたの？」

ミクちゃんにも、ハク姉さんのことは話していない。どうやって話したらいいのかわからないし、それに……ミクちゃんにわたしの家の問題を持ち込むわけにはいかないもの。

「あ……えっと……オペラの話」

なんだか、嘘が増えているような気がする。

ちなみに、ミクちゃんはオペラにはあまり興味がない。バレエの方は好きなのだけど。

「オペラ？ 鏡音君ってオペラに興味あったの？」

「鏡音君が好きなミュージカルが、オペラを現代劇に翻案したものだっただけ。だから、ちよつとその話を……」

「ふーん、そうなんだ……」

どうして、ミクちゃんは嬉しそうなんだろう？ わたしにはわからない。

「あ、ねえ、リンちゃん。そういえば、足はどうなの？」

足……ああ、捻挫のことか。もう大分良くなっている。

「一週間後には全快するでしょうって、言われたわ」
結構長かった。

「一週間後かあ……中間テストよね。勉強してる？」

訊かれたので、わたしは頷いた。勉強自体はいつもしている。日曜以外は毎日家庭教師の先生が来る家だし……。

「ねえ、リンちゃん。考えたんだけど」

「何？」

「中間テストが終わったら、どこかにぱーっと遊びに行かない？」
え？

「遊びに行くって、どこへ？」

「わたしは遊園地がいいな」

訊いてみると、ミクちゃんはそう答えた。遊園地……。ずいぶん行っていない。前に行ったのは確か小学生の時だ。やっぱりミクちゃんが誘ってくれたんだっけ。うーん、遊園地か……。いつの間にか、敷居の高い場所になってしまっている。

というようなことを考えていると、ミクちゃんがわたしの手をつかんだ。

「ねえ、行こつ。きっと楽しいつて」

「えーつと……」

遊園地に行きたいって言っても、お父さんが許してくれないわよね……。お前はもう子供じゃない、で、終わりだ。お父さんは昔から、子供っぽいものがとにかく嫌いだった。

「わたし、リンちゃんと一緒に遊園地に行きたいなあ」

「……………」

「高校生活の思い出作りにいいと思うの。リンちゃんは行きたくない？」

行きたいか、行きたくないかで訊かれれば……。行きたい。折角こうしてミクちゃんが誘ってくれているんだし、わたしだってたまには外に出たい。でも、お父さんの承諾なんて絶対に貰えないだろうけど……。

「あ……。あの……。ちよつと、考えさせて……」

そう言った時、始業のベルが鳴った。ミクちゃんは「考えておいてね」と強く言って、自分の席へと戻って行く。

……………どうしよう。

「何も正直に全部話す必要はないと思うのよ、リンちゃん。わたしの家に一日いましたって、お父さんには言っておけばいいじゃない。何なら、うちのお父さんに電話かけてもらってもいいわよ」

というのが、ミクちゃんの主張だった。確かに昨日のことを考え

れば、ごまかすことは可能ではあるのだけれど……。ミクちゃんのお父さんを巻き込む件に関しては、さすがに断った。

とりあえず、ミクちゃんには「一日考えさせて」と言っ、帰宅する。何だか、考えなければならぬことが、増えているような気がする。

家に帰ると、お母さんは居間で雑誌を読んでいた。

「ただいま、お母さん」

「お帰り、リン。すぐにおやつを出してあげるから、ちょっと待っていてね」

「あ、うん。じゃあ、その間に着替えてくる」

自分の部屋に戻って制服から普段着に着替え、また一階に下りる。お母さんは、居間のテーブルにお茶道具を並べていた。お皿の上には、八等分にカットされたタルトが置いてある。

「今日はタルトにしたんだ」

「ええ、紅玉のいいのがあったから、りんごのキャラメルタルトを焼いたわ」

お母さんは、焼き菓子を作る時はいつも紅玉を使っている。酸味があつて、固いから。生で食べるのには向いていないけれど、焼くとも美味しくなるのよ。でも最近あまり見かけないから淋しいとも。

今日のタルトは少し苦味が強かった。お母さんにしては珍しく、キャラメルを煮詰めすぎたみたい。

「キャラメル、煮詰めすぎちゃった？」

「最近は紅玉も水分が多くなってきていて、しっかり煮詰めて水分を飛ばさないと、下の生地がべちゃべちゃになってしまうの。それで念を入れていたら、濃くなりすぎてしまつて……。リンは、苦すぎるのは好きじゃなかったわよね？」

濃いめが好きなのもいるのだろうけど、わたしが苦いものが好きじゃないせいか、お母さんはあまり濃いキャラメルを作らない。

「……これくらいなら平気」

わたしはそう答えて、タルトを口にした。……タルトは手間がかかる。既製のタルト台やパイシートを使って手間を省くこともできるけれど、お母さんがタルトを焼く時は、台の生地から全部自分で手作りする。わたしが小さい頃、どうして台から作るのかを訊いたら「美味しさが違うからよ」という答えが返ってきたっけ。

……これも台からちゃんと作ったのよね。いつものお母さんの味だもの。

「学校はどう？」

「えーと……中間テストが近いから、先生はその話ばかり」

「あまり無理はしないのよ」

お母さんにそう言われてしまった。倒れてから、お母さんはやっぱり過敏になっている気がする。

「ね、ねえ……お母さん」

「何？」

「その……ミクちゃんが、中間テストが終わったら、一緒に遊びに行かないかって……」

わたしは思い切って、お母さんに話してみることにした。

「遊びに行く？ どこへ？」

「ミクちゃんは遊園地に行きたいって言うの……その……やっぱり、駄目？」

お母さんはちょっと首を傾げて、わたしを真っ直ぐに見た。

「リンは行きたいの？」

「……ええ」

わたしは頷いた。折角ミクちゃんが誘ってくれたんだし。

「じゃあ行つてらっしゃい」

「いいの？」

ためらいがちにわたしは尋ねた。

「ミクちゃんと行くんでしょう？ 下手な心配はしないで、楽しんでいらつしゃい。ただ……お父さんには、言わない方がいいわね」

「……ありがとう」

お母さんが承諾してくれたので、わたしの後ろめたい気持ちは少し軽くなった。

おやつを食べ終えて部屋に戻ったわたしは、携帯を取り出してミクちゃんに電話した。

「もしもし、リンちゃん？」

「あ、ミクちゃん。あのね……遊園地のことだけど、行くことにしたから。お母さんが、行ってもいいって」

わたしがそう言つと、携帯の向こうからミクちゃんの歓声が聞こえた。

「良かったあ！　じゃあリンちゃん、中間が終わったらまず服を買いに行こうね」

当然のことのようにそう言われて、わたしは返事に詰まった。

「え……ミクちゃん、服って？」

「リンちゃんの外出用の服って、動きやすいものが一枚も無いでしょ？　特にボトムはスカート系しかなかったわよね？　遊園地みたいなところに行くのには向いてないの！」

確かにわたしの服はスカート、それも丈の長いものばかりだけど……。ロングの方が、なんだか安心だし。

「心配しなくても、最近はパンツやジーンズだって、おしゃれなのや可愛いのがたくさんあるから。あ、靴もいるわね」

ミクちゃんはすごい勢いで喋り始めた。わたしは、全く口を挟めない。

「上から下までゼーんぶ選んであげるから心配しないで。パンツ類よりミニスカートにタイツかレギンスの組み合わせの方がいいかな？　絶対可愛いわよ」

「あの……ちよつと、それは……」

多分、気になってまともに歩けないと思う。

「わかってるって。それはさておき、中間テストが終わったら、そ

の足でショッピングに直行よっ！」

ミクちゃんはうきうきとそう言って、電話を切った。わたしは携帯を握ったまま、少し呆然としてその場に立っていた。……何だか、妙なことになってきた。

あ、そうだ。ハク姉さん。お母さんはまだ当分下の階にいるだろうし、お父さんとルカ姉さんは当然まだ帰って来てないから、声をかけるのなら今のうちにおかないと。

わたしは部屋を出ると、ハク姉さんの部屋のドアを叩いてみた。

……返事が無い。幾らなんでも二十四時間寝ているということはないだろうから、明け方頃目を覚まして、昼過ぎに寝ちゃったのかな。ハク姉さんのタイムスケジュールは滅茶苦茶で、昼間に寝ていることも多い。みんなが寝静まった深夜にそっと部屋を抜け出して、食べられるものとかを調達していたりするわけだし。

わたしはため息をつくと、部屋に戻った。そろそろ家庭教師の先生が来る時間だ。勉強しなくちゃ。成績が下がりでもしたら、外出禁止にされてしまう。

どうか扉を開けさせて（後書き）

ミクの遊園地作戦が始動しました。なんか、この話のミクって案外策士なのかもなあ……。書いてる奴が言っなくなって感じですが。

この先の展開について少々悩み中です。まあ、大したことじゃないんですけどね。リンの服装をどうするのかということと、ミヤグミペアを出すのかということです。

ちなみに……ミヤグミペアは出たとしてもちよい役ですので、過剰な期待はしないでください。

クオと電話

「作戦はうまく行ったわっ！」

その日の夕方頃——ちなみに、中間テスト一週間前なので部活は休みである——俺の部屋にノックも無く駆け込んできたミクは、いきなりそんなことを言いやがった。……あのなあ、俺は勉強中だぞ。作戦って、なんの」

訊き返す義理はないような気がするのだが——何せ俺は勉強中なわけだし、ミクを怒るのが筋だよな——俺はミクにそう訊いてみた。「もちろん、例の遊園地作戦よっ！」

……その話かよ。こんな時に駆け込んできてする話か？

「今日リンちゃんに持ちかけてみたら、中間テスト明けに一緒に遊びに行くことで話がついたわっ！」

なんでミクは人のことでこんなに興奮できるのかなあ。俺にはさっぱりわからない。

「そういうわけだからクオ、鏡音君を誘う方お願いねっ！」

あゝ、そういう話だったな。

「そうかそうか。わかったから、それじゃあな」

俺はそう言ってミクに手で「出て行け」の仕草をすると、勉強に戻ろうとした。ミクがきよとした表情になる。

「クオ、今すぐ鏡音君に電話かけてってば」

「はあ？」

「だって、鉄は熱いうちに打って、昔から言うじゃない」

俺は机の上の教科書とノートを順番に指差した。

「お前、俺が今何やってんのかわかる？」

「テスト勉強？」

「わかってんじゃねえか。あのな、俺はテスト勉強で忙しいの」
しゅしゅと、もう一度ミクを追い払うそぶりをしてみせる。

「えゝ、だってクオ、やるって言っときながら、やってくれなかつ

たりするし」

……ちよつと待てやコラ。

「俺がいつそんなことをした」

「この前、クオが本屋に行つてくるつて言うから一緒に雑誌頼んだら、『OK、買つてくるよ』って答えておいて、結局自分の分だけ買つて来たじゃないの」

うつ……そういや、そんなこともあつたような……。

「だから今度は目の前でやつてもらふの！ でないとクオ、やらないでしょ？ そうこうするうちに、鏡音君が他に予定入れちゃったら困るし」

「あゝわかつた、わかつた！ かけりやいいんだろ、かけりや！」

俺は携帯を取り出した。かけるまでミクに騒がれても困るし、とつとつけてこの面倒くさい話を終わりにしよう。ミクはこっちをじーつと見ている。……ちよつと待てよ。

「ミク、ちよつと出ててくれ」

「えゝ、なんで？」

「お前が聞いていると思うと話しづらいんだよっ！」

なんとかミクを部屋から追い出すことに成功した俺は、レンの携帯の番号にかけた。

「もしもし」

「もしもし、ちよつといいか？」

「ああ」

いきなり言うのもあれだしな……。

「来週、中間テストだよな」

「……だから勉強中だよ」

うつ……。レンの声は不機嫌そうじゃないけど、微妙に嫌味が混じってるような気がする……。

「クオ、お前も勉強しといた方がいいぞ」

だからやってたんだよっ！ ミクが来る前はなっ！

「クオ？」

えーい、こうなったら、早いところ用件を言うに限るっ！

「……お前、中間明けに暇あるか？」

「あるけど。お前、遊びに行こうって誘いなら今じゃなくてもいいだろ」

ミクがうるさいんだよっ！ ああもうっ！

「じゃ、暇はあるんだな。つきあえ」

「つきあえて、どこへ」

「遊園地」

「……お前と二人で？ 悪いけどそれはパス」

「俺とお前の二人のわけないだろっ！ ミクと巡音さんが一緒だっ！」

俺だっってお前と二人で遊園地なんか行きたくないやい。四人だから行くんだよっ！

「今度はお化け屋敷に誘ってあわよくば抱きついてもらおうとか、そういう魂胆？」

レンはそんなことを言い出した。こゝいゝつゝは。誰の為に俺が苦勞してると思ってるやがんだ。

「んなわけあるかあっ！ ミクが絶叫マシンに乗りたいつて言うてんだよっ！」

ぜいぜいぜいぜい。叫んだら息が切れた。ちなみにこれはミクの「作戦」とやらである。ミクが言うには、巡音さんは絶叫マシンが苦手なんだそう。よって、俺とミクが二人で絶叫マシンに乗ってしまえば、その間レンが巡音さんの相手をしていてくれるだろう、とのことだった。……レンがそこまで面倒見いいとは思えないんだが。大丈夫なんだろうか。

「遊園地に行きたいなら、初音さんと二人で行ってくればいいじゃん」

こ……こいつは……俺の意図を完全に誤解してやがるっ！ いや、真の意図を見抜かれるのは、それはそれで困るんだが……。

「ミクが先に巡音さんを誘ったんだよっ！」

しょうがないのでこう言ってみる。嘘じゃないし。

「三人で行こうねって?」

あ、やっとまともな答えが返ってきた。

「そんな感じだ。女二人に男一人だとバランスが悪いだろ。そういうわけだから、お前も来い」

ぶつきらばうにそう言う。電話口の向こうで、レンが黙り込んだ。……どうしたんだ、こいつ。

「いいけど」

長い沈黙の後で、レンはそう答えた。

「は?」

一瞬言われた言葉の意味がわからなかったぞ。

「だから、遊園地の件。俺も一緒に行くよ」

どという風の吹き回しかわからないが、レンはそう言った。

「そ、そうか……ありがとうよ。恩に着る」

「いいって。それじゃ、俺はテスト勉強あるから」

「ああ、頑張れよ。俺も勉強しなくちゃな」

通話が切れた。俺は携帯を机に置くと、部屋のドアを開けた。廊下にはミクが立っている。俺が出てきたのを見ると、ぱっと顔をあげた。

「それでクオ、結果は?」

あーあ、この情熱をどこか他に向けてくれないもんかね。

「OKだとさ。その代わり、四人で行くことは事前に説明したぞ。男二人で遊園地なんざ行きたかねえって言われたから」

「それはいいのよ、来てくれれば! これで絶対上手く行くわ!

クオありがとうっ!」

そう叫んで、ミクは俺に抱きついた。う、うーん……喜んでいいのかどうか、複雑な気分だ。

「後は着る物よね……ミニスカートは、さすがに無理かな……下にレギンスかタイツを履くにしても……」

ミクはそんなことをぶつぶつ言いながら、行ってしまった。ミニ

スカートねえ……ミクのミニスカート姿を想像してみる。……下は生脚がベストだと思うんだが。ミクの奴、胸はそんなに大きくないけど、脚はすらっとしていて綺麗なんだよな。あれにはやっぱり生がいい……なんだよ、俺は別に脚フェチじゃないぞ。

俺は部屋に戻ると、机の前にまた座った。勉強しないとな……。はあ……それにしても、ミクはなんでいつもあなのか。アイドル級に可愛いくせに、中身が暴走ハリケーンな従姉を持つと気苦労が多いぜ。

クオと電話（後書き）

クオ、そこは素直に喜ぼう。

それと、一体どこを見てるんだお前は。

わたしには何の取り得もない

週末には、包帯が取れてわたしの足は元通りになった。そして週が開けると、中間テスト。特に難しいということもなく、簡単ということもなく、いつもどおり。

ハク姉さんとは、まだ話せずにいる。同じ家に住んでいるのに、二週間近く顔をあわせないというのは奇妙に思えるかもしれない。でも、ハク姉さんが自発的に部屋の外に出てくることはまず無いので、会おうと思うとわたしの方から会いに行かなければならないのだ。他の家族がいる時だと声をかけづらいし、様子を見て声をかけても寝ているのか、返事がないことばかりだった。

そんなわけで、わたしはハク姉さんの顔を見ることができなかったし、なんであんなに飲んでいたのかを訊くこともできなかった。まさか、避けられているということはないと思うけれど……。

一方で、鏡音君とは前よりもずっと話せるようになった。学校内だし、そんなに長い時間ではないけれど。

中間テストが終了し、ミクちゃんに買い物に連れ出され——ミクちゃんはかなり執拗にミニスカートを薦めてきたが、さすがにそれは断った——着ていく物を買ひ揃えた。ミクちゃんはものすごく張り切っていて、ちょっと気おされてしまったけれど、ミクちゃんと一緒に買い物をするのはとても楽しかった。

日曜日。わたしはミクちゃんが選んでくれた服——淡いベージュのカットソーにワイン色のジャケット、くるぶし丈のカーキ色のパンツ——を着て、ミクちゃんの家へと出かけることにした。

「リン、楽しんでいらっしやい」

「うん……ありがとう、お母さん」

お父さんは、昨日から泊まりがけで出かけている。家にいなくて

ほっとした……のは本心だけれど、そんなことを考えてしまう自分が嫌だ。ルカ姉さんは出かける用事がないのか、自分の部屋にいるハク姉さんは、今朝部屋の様子を伺ってみたけれど、返事がなかった。多分寝ているんだと……思う。

折角ミクちゃんと出かけるんだし、家のことはちよつとだけ忘れても……いいよね？ わたしは車に乗り込み、ミクちゃんの家へと向かった。

ミクちゃんの家に着くと、ミクちゃんが明るく出迎えてくれた。いつもは垂らしている髪を、今日はシニヨンにしている。着ているのはデニムのジャケットとミニスカートに、黒のタイツだ。

「おはよう、ミクちゃん。今日は髪、上げたんだ」

「遊園地だもの。垂らしていたら危ないわよ。それはさておき、ちよつと入って」

お邪魔します、と言ってミクちゃんの家に入る。ミクちゃんは居間へと歩いて行ったので、わたしも後に続く――あ。

居間にはミク才君と鏡音君がいた。あれ？ 遊びに来ていたの？

「じゃ、そろったことだし、出かけましょ」

そんなことを言うミクちゃん。えーつと、そろったって……。わたしはミクちゃんの袖を軽く引つ張った。

「何？ リンちゃん」

「あの……」

「四人で行くって、言っただけだったわけ？」

……全然聞いてない。そもそも、いつそういうことになったの？ わたしはミクちゃんとのやりとりを思い返してみた。やっぱり聞いてない……と思う。

「人数多い方があいうところは楽しいのよ。さ、行きましょ」

ミクちゃんはそう言って、わたしの手を取った。なんだか、よくわからないことになってきた。わたしはミクちゃんに引つ張られるようにして、ミクちゃんの家を出た。

混乱していたので、遊園地に行くまでのことはよく憶えていない。とにかく、わたしとミクちゃんとミクオ君と鏡音君の四人は、ミクちゃんの家の車で遊園地に向かった。入り口で、一日フリーパスを購入して、中に入る。

「中間も終わったことだし、今日は思いっきり楽しむわよ！　まずはやっぱり、あれに乗らないとね」

そう言ってミクちゃんが指差したのは、ジェットコースターだった。レールがぐるぐると何度も回転しているタイプの奴。見ているだけで目が回りそう……。

「遊園地の華って言ったら、やっぱりあれだよな」

ミクちゃんの隣で、ミクオ君がそんなことを言っている。

「ミ、ミクちゃん。あれに乗るの……？」

「うん」

笑顔でミクちゃんは頷いた。わ、わたし、あの手のものは苦手なんだけど……。

「わたし、あの手のはちよっと……怖くって……」

「えーっ、折角来たんだし、乗りましようよ」

わたしは首を横に振った。ミクちゃんの誘いでも、それだけは無理だ。

「ごめんなさい、ミクちゃん。わたし、コースターは無理……」

「うーん、でも……」

ミクちゃんが残念げにコースターを見る。……すごく乗りたそう。ミクちゃんたちだけ、乗ってきてもらおう。わたしはその辺で待っていればいい。そう思った時だった。

「じゃ、初音さんはクオとあれに乗って来たら？　俺と巡音さんはここで待つてるよ」

鏡音君がそう言い出した。え？　わたしはびっくりして、思わずそつちを見た。

「なんなら、しばらく別行動にしねえ？　折角だし、俺は色々と絶

「叫系乗りたい」

「俺はいいよ。初音さんは？」

「リンちゃんさえよければ、わたしもそれでいいわ」

わたしが混乱している間に、話はどんどんまとまっていく。ミクちゃんが、問いかけるようにこっちを見た。

「え……ええ」

乗らないで済むのならそうしたい……でも、ミクちゃんが誘ってくれたんだから、楽しんでほしいし。

「じゃ、決まりっ！」

「そんじゃ、俺とミクは絶叫マシン連続記録作ってくる」

ミクちゃんとミク才君は連れ立って行ってしまい、わたしは鏡音君と残された。

「あの……いいの？」

わたしは鏡音君にそう尋ねた。

「何が？」

「コースター乗らなくて」

「俺は別にいいよ。クオの邪魔はしたくないし」

よくわからない答えが返ってきた。邪魔って、さっき言っていた記録とかのことだろうか。

「それより巡音さん、何に乗りたい？」

「えーっと……」

わたしは遊園地内を見回した。メリーゴーラウンドが目に入る。

「わたしは、あれがいいんだけど……」

「じゃ、行こうか」

鏡音君があっさりそう言ってくれたので、ちょっとほっとする。

……なんだか、助けてもらってばかりのような気がする。いいのかな……わたしにも何かできたらいいのに。二人で並んで歩きながら、わたしはそんなことを考えていた。

最初のうちはまだ混乱していたけれど、段々落ち着いてきた。数年ぶりに遊びに来た遊園地は、やっぱり楽しい。ミクちゃんの誘いに乗って良かった。別行動にはなってしまったけれど……。

アトラクションに幾つか乗ったところで、わたしはお手洗いにいくたくなった。

「あの……鏡音君」

「何？」

「わたし、ちょっとお手洗いに行つて来るから、待っていてくれる？」

鏡音君が頷いたので、わたしはお手洗いに向かった。……あ、混んでる。しばらく待たないと駄目だ。

わたしはため息をついて、列に並びながらお手洗いの鏡を見た。

……髪のリボンが歪んでるので、ついでに直す。今日はリボンをしてこない方が良かったかな。でも、いつも結んでいるので、無いと落ち着かないのよね。

お手洗いで待っているうちに、結構時間が経ってしまった。もう一度鏡をチェックして、わたしは外に出た。さ、行かなくちゃ……あれ？

鏡音君が、誰かと話している。女の子の三人連れだ。……誰なんだろう？ 道を訊いているとか、そういう雰囲気じゃなさそう。そもそも、ここは遊園地だから、道を訊く人なんていないわよね……。声をかけることができなくて、わたしはぼんやりとそこに立っていた。すると、不意に鏡音君がこっちを見た。そして、わたしの方へ駆け寄ってくる。

「リン、遅い！」

……え？ 今、わたしのこと、下の名前で呼んだ？ 何がなんだかわからないまま、わたしは、事情を説明しようと試みた。

「ごめんなさい、お手洗いがひどく混んで……」

鏡音君がわたしの手をつかんだ。え？ なんで？

「じゃあ行こうか」

あの、さっきの子たちはいいの？ こっちに來てるけど。

「……その子、誰？」

三人連れの女の子のうちの一人の、一番背の高い子がそう訊いてきた。……わたしをじろじろ眺めている。なんだか、敵意を感じるんだけど……どうして？ 全然知らない人なのに。

「誰って、見りゃわかるだろうが」

ぶっきらぼうに鏡音君がそう答えている。わかるって、何が？

友達ってことだろうか。と思った時、不意に鏡音君がわたしの肩を抱き寄せた。え……ええっ！？ な、なんで……？ 何が起きているのかよくわからず、一瞬、頭の中が真っ白になる。

「だから誰？」

背の高い子はやっぱりきつい調子で、そう訊いてきた。残りの二人の女の子——ゆるいウェーブのかかった髪の子と、大人しそうな三つ編みの子——は、慌てた表情でその子の袖を引っ張っている。

「あの……鏡音君、こちらは知り合いなの？」

わたしはおそろおそろそう訊いてみた。わたしには全く心当たりが無いから、多分鏡音君の方の知り合いだと思っただけけれど。

鏡音君の腕はまだ、わたしの肩を抱いたままだ。……なんだか、頬が熱くなってきた。心臓の動悸も早くなってきた。

「中学の時の同級生だよ。……それじゃ、俺たちはこれで」

鏡音君がわたしの肩を抱いたまま、歩き出そうとする。背の高い子が、また声をかけた。

「ねえ……冷たいんじゃないの？」

……一体、何の話なんだろう？ わたしにはさっぱりわからない。その時、ウェーブの髪の子が口を開いた。

「マナ……もうやめてよ。気持ち嬉しいけど、レン君は迷惑してるよ。だって……デートの最中なんでしょ？」

え……デート？ 誰が？ もしかして、わたしと鏡音君が？ わたしは、思わず鏡音君の顔を見た。鏡音君の腕に力がこもり、わたしは強く鏡音君の方へと引き寄せられた。

「悪いけど、今だけ話あわせてくれ」

小声でそう囁かれた。話をあわせてって……デート中って振りをしてくれってこと！？ 何がどうなって……というか、どうしたらいいの！？

混乱したわたしにできたのは、鏡音君に抱き寄せられたまま、下を向くことぐらいだった。頬の熱さも、胸の動悸も、加速する一方だ。

「そういうこと。だから、邪魔しないでくれ」

鏡音君がそう言っているのが聞こえる。わたしは鏡音君に肩を抱かれたまま、その場を後にした。

わたしには何の取り得もない（後書き）

結局色々考えて、ミンス力は止めにしました。

今回ミクが髪を結ってますが、作中で本人が喋ってるとおり、あの髪型でコースターとかに乗るのは危ないと思うんですよね。機械に髪が巻き込まれでもしたら多分大惨事……。

恋とはどんなものかしら

頭の中が真っ白な状態で、わたしは鏡音君と一緒に歩いていった。どれだけ歩いたのか、それすらもよくわからない。とにかく、しばらく歩くと、鏡音君が立ち止まり、わたしの肩を抱く腕を放してくれた。

「……ごめん、変なことに巻き込んだじゃって」

「ね、ねえ……何だったの、今の？ あの子たち、中学の同級生って言うてたけど……それに、わたしとデート中って、どうしてそういうことになったの？」

何がなんだかわけがわからない。わたしがお手洗いに行っている間に、一体何があったんだろう。

「ちょっと座ろうか」

鏡音君はそう言うて、わたしを近くににあった椅子にかけさせた。そのまま、自分はかけずに、近くのジューススタンドの方へと歩いていく。

「巡音さん、何飲みたい？」

「あ……じゃあ、オレンジジュースを」

鏡音君が飲み物の入った紙コップを二つ抱えて戻ってきた。うちの片方を、わたしに差し出す。

「……ありがとう」

飲み物に口をつけかけて、それからわたしは、自分の分のお金を払ってないことに気づいた。

「あ……お金……」

「いいよ、これぐらい。迷惑料ってことで」

鏡音君は、わたしの向かいの椅子に腰を下ろした。

「でも……」

「だからいいって。で……さっきのことだけど」

鏡音君が説明を始めたので、わたしは背筋を正した。

「さっきの子たちは、俺の中学の時の同級生。で……まあその、なんていうか……そのうちの一人と、俺、前につきあってたわけ」

……え？ つきあってたつていうことは、あの中の一人が鏡音君の恋人だったつてことよね？

「さっきずっと喋ってた、背の高い子？」

「いや、それじゃないよ。髪を垂らしてた子の方」

ウェーブのかかった髪の子が、鏡音君とつきあってた子なのね。前にといい方をするということは、別れたということだけれど……。

訊いてみたいことはたくさんあった。どうして別れたのかとか、さっきは何を話していたのかとか。でも、訊いていいのかどうかわからない。デリケートな問題だろうし……。

「どうして……わたしとデートをしている振りをしたの？」

これだったら、まだ訊いても大丈夫かな……。わたしもびつくりしちゃったし。本当のことを言うと、まだ心臓の鼓動が落ち着いていない。

「一緒に回らないか、って言われちゃってさ。ユイ——あ、俺の前の彼女の名前ね——は嫌がってたけど、あの背の高い子、しつこくつて。デート中だつて振りをしたら、諦めてくれるだろうと思ったんだよ」

「え……別れたのに？」

それなのに、何故そういう話の流れになるんだろう？ あ、でも、肝心の人は嫌がっていたつて今言ったわ。……ますますわけがわからない。

「そうだよ」

「それなのに、どうして？」

「長い話になるけど、いい？」

わたしが頷くと、鏡音君は説明を始めた。あの、ウェーブのかかった髪の子に、中学三年の時に「好きでした」と言われて、つきあい始めたこと。でも、お互い別々の高校に進学することになって、

それが原因で一緒にいられる時間が減ってしまったこと。そうこうするうちにユイさんに別に好きな人ができて、高校一年の秋に別れたこと。そのままずっと会っていなかったけれど、今日ここですばり再会したこと。

「俺も気まずかったし、ユイもそうだったと思うんだけど、あの友達の子がえらく空気が読めなくてさ。なんかユイ、新しい彼氏とも最近駄目になったらしくて。話の流れで俺たちがつきあっていたことがわかつちゃったもんだから、どうも、よりを戻させようと必死になつちやっただけなんだよね」

マルチェロとムゼツタを、周りが復縁させようとするようなものなのだろうか？ さっきの子はムゼツタのような感じではなかったけど。そう言えば、ミミはあの時、会ったばかりなのに「あの二人はお互いに好きあっているのだから……」と言っていたっけ。

……わたしにはわからない。様子を見ただけで、相手を想っているのかどうかなんて。

「鏡音君の方は、それでいいの？」

「何が？」

「ユイさんのこと、まだ好きだったりとかしないの？ マルチェロやマークは、別れてもまだ相手を想っていたりするけれど、そういうのは？」

もしそうだったら、むしろわたしの存在の方が邪魔だったかもしれない。わたしがいなければ、もっと話だってできたかもしれないし。

「別にそういうのはないよ」

鏡音君はあっさりと言った。わたしは何も言わず、視線を落とした。何を言ったらいいのかがよくわからなくて。

「大体、うまく行くとは思えないんだよ。俺とユイは、高校入ってからぎくしゃくしだしたわけで。問題原因がそのままなのに、勢いでより戻したって、また同じことの繰り返しになるだけだと思う」
わたしが黙ってしまったせいか、鏡音君はそんな説明を始めた。

喋る声は、いつもと変わらないように思えるのだけれど……。わたしの希望的観測かもしれないし……。

「でも……」

「あのね巡音さん、俺、あの場から逃げるのに巡音さんを利用したわけ。未練があつたら逃げるなんて行動取らないってば。むしろ俺に怒っていいぐらいだから、そんな風に思いつめた顔しないでほしいんだけど」

鏡音君は、今度はこんなことを言い出した。そう言われても……わたしの方には別に怒る理由がないし……。でも、あんまり暗い表情をしているのは良くないみたい。鏡音君に心配させちゃう。何か他に、話題ないかな。

「あの……鏡音君」

「何？」

「恋をするのって、どんな感じ？」

少し唐突な気もしたけど、わたしは、気になっていたことを訊いてみることにした。鏡音君が、呆氣にとられた表情になる。

「オペラにもバレエにも、恋を扱ったものってたくさんあるんだけど……わたし、実感が無いからよくわからないの。恋をするのがどういう感じがって」

手に手を取り合つて切々と愛の喜びを訴えたり、引き裂かれそうになって離れたくないと苦しんだり、相手の心変わりに心を痛めて涙をこぼしたり。舞台の上のそういう情景はたくさん見たけれど、その中にあるものがよくわからない。恋って、どういふものなの？「初音さんとはそういう話をしないの？」

鏡音君はそう訊き返してきた。ミクちゃんか……。

「ミクちゃん？ 少しはするけど、ミクちゃんもまだ誰かとつきあったことはないから……」

恋愛映画を見て「わあ、素敵……」と言っていることはあるけど、ミクちゃんも実際に異性とつきあったことはないから、深い話をしたことはない。というよりできない。

「初音さん、つきあつた経験ないわけ？」

驚いた表情で鏡音君がそう訊いてきた。そんなに意外なのかな？

「ええ」

誰かとつきあっていたら、ミクちゃんの性格からいって、絶対にわたしに話してくれるだろうし。

「告白されることなんてしょっちゅうじゃないの？ ほら、初音さんって目立つだろ。確か去年も今年も、学祭のミスコンで一位だったし」

ミクちゃんが告白されたこと？ わたしが知る限りでは一度もないけど。なんで鏡音君はそう思ったんだろ。確かにミクちゃんは学祭のミスコンテストを二連覇してるけれど、ミクちゃんに交際を申し込みに来た人なんて、見たことがない。

「ミクちゃん、告白されたことなんて一度もないはず。前に言っていたもの。一度くらい、ドラマか漫画みたいな告白をされてみたいなあって」

でも自分の理想の王子様になってくれる人じゃなければ、つきあうのは嫌とも言っていたっけ。

「そういうわけだから、わたしの周りに、現実に恋愛した人っていないくって……」

「お姉さんは？」

鏡音君は、もつともな疑問を投げかけてくる。でも、ハク姉さんともルカ姉さんとも、そういう話をしたことはないのだ。そもそも、わたしのところは鏡音君のところで違って、会話が少ないし……。

「ハク姉さんは女子高だったし……ルカ姉さんは婚約してるし……」

「婚約者がいるんなら、恋愛したってことじゃ？」

「ルカ姉さん、お見合いなの」

だからルカ姉さんが神威さんに恋をしているのかどうかなんて、わからない。多分訊いても「神威さんはいいい人だし、お父さんが選んだ人だし、私も嫌いじゃないから」と言われてしまいそんな気がする。

わたし、嫌な妹だな。こんなことを考えるなんて。

「……………」

鏡音君の方は絶句してしまった。やっぱり……一般的な話じゃないのよね、こういうのって。

「で、でも、婚約したってことは、相手の人が気に入ったんだろ？」

「お父さんが強く薦めてたから……わたしのところは三人姉妹だから、長女のルカ姉さんには婿を取って会社を継がせるって。神威さんなら、申し分ないって」

気がついたら話はまとまっていて、神威さんは度々わたしの家に来て、ルカ姉さんやお父さんと話をしたり、ルカ姉さんを連れて出かけたりするようになった。でも、わたしは神威さんと話をしたことがないので、将来義兄になる人が、どういう人なのかはよくわかっていなかったりする。

「繰り返しになるけれど、わたしの周りには現実に恋愛をした人っていないの。だから、こういうことを訊ける人がいなくて……恋って、どんな感じなの？」

いいものなのか、嫌なものなのか。作品ごとに褒めてあったりそうでなかったりで、わたしには余計にわからない。

「うーん……俺とユイは中三の時に委員会が一緒に、それで仲良くなって、秋頃にユイが『好きでした』って言うてきて、それでつきあおうかって話になったんだけど、何せ中三の秋だろ。受験に追われてろくにデートする暇もなかったんだよね」

鏡音君はそんな話を始めた。

「デートできないと恋ってできないものなの？」

よくわからなかったので、わたしは訊いてみた。

「できないってことはないだろうけど、継続に響くんだよ……多分俺はともかく、ユイは淋しかったのかもしれないし。同じクラスだったから毎日顔はあわせてたけど、話題の半分は受験だったからなあ。出かける時も三回に二回は図書館で一緒に勉強してたし」

一緒にいられるだけでは、恋って続かないの？ やっぱり、よく

わからないな……。

「受験が終わってからは？」

どうしたんだろう。疑問に思ったので訊いてみることにする。

「……それが問題でさ」

鏡音君は、憂鬱そうな表情になった。

「俺とユイ、志望校が違ったんだよ。偏差値に差があったから仕方がなかったんだけど。ユイの奴、無理して俺と同じ高校受けて、で落ちたわけ」

わたしははつとなった。ハク姉さんが高校受験に失敗した日のことを思い出したからだ。あの時、わたしの家は滅茶苦茶だった。お父さんはハク姉さんをひどくのしつたし、ハク姉さんは自室で物を投げて暴れた。

「……ユイさん、きつとすごく辛かったんでしょね」

「大泣きされたよ。……学校の先生にも塾の先生にも『無理』と言われていた勝負ではあったんだけど、ユイは奇跡を信じたかったみたいで。春休みの間は、一緒の高校に行きたかったのに、って、そんな話ばかりされてた」

頑張っていたのに、努力が報われなかったのだから、それは辛いだろう。

「なんだか……悲しい話ね……」

わたしがそう言うと、鏡音君は「え？」とでも言いたげな表情でわたしを見た。

「鏡音君は、悲しくないの？」

「ごめん、俺はそんなに……」

悲しくないようだ。どうして？

「自分の恋が終わったのに？」

「巡音さん、現実の恋はオペラとは違うんだよ」

鏡音君にそう言われてしまった。ええと……確かに、現実とオペラは、違っただろうけれど……。でも、どこかに共通するものが、あるんじゃないかしら……。わたしは『タイス』を見て、自分の状況

に通じるものを感じたわけだし……。

「けど、鏡音君はユイさんのことが好きだったんでしょ？」

好きだったから、つきあってたわけよね。

「まあ、嫌いじゃなかったけど……」

それが鏡音君の答えだった。わたしは、気になっていたことを訊いてみることにした。

「あの……鏡音君。『好き』と『嫌いじゃない』って、イコールで結べるものなの？」

ルカ姉さんはよく「嫌いじゃない」という言葉を使う。ルカ姉さんがこの言葉を使う度、わたしは疑問に思ってしまう。ルカ姉さんは「嫌いじゃない」って言うけれど、だからといって、それを好きそうには見えないのだ。

「えーとね……例えば、『クッキーは好きですか？』って訊かれたとするわよね。その時『嫌いじゃない』て答えるのと、『好き』って答えるのと、何だか同じとは思えないの……」

ミクちゃんなら、「好き」って答えるわよね。ルカ姉さんなら「嫌いじゃない」だ。

「わたしの手元にクッキーがあって、誰かにあげるとしたら、『嫌いじゃない』って言う人より、『好き』って言うってくれる人にあげたいし……」

「うーん……確かに、そう言われるとその言葉は、イコールで結べない感じがするな……」

鏡音君は考え込んでしまった。イコールではないとしたら、鏡音君の当時の気持ちは、どうだったんだろう？

わたしたちが考え込んでいると、不意に、明るい声が沈黙を破った。

「あゝっ！ 鏡音先輩だっ！」

え？ わたしは、声が聞こえてきた方に視線を向けた。真面目そうな背の高い男の子と、元気の良さそうなショートカットの女の子が並んで立っている。二人とも、どこかで見たような気がするんだ。

けど……鏡音君のことを呼んだということは、知り合いよね……。
今日は人と遭遇してしまう日なのかな。

「グミヤ先輩、見てくださいっ！ 鏡音先輩が女の子と一緒にいますよっ！ もしかして先輩方もデートかも!?」

女の子は男の子の方に向かって、そんなことを言っている。えーと……どう反応したらいいんだろう。鏡音君の方を見ると、ため息をついている。

「鏡音君、あの二人は……」

「演劇部の子たちだよ。躍音グミヤと、活音メグミ」

鏡音君がそう答えている間に、二人はこっちにやってきた。女の子の方が、興味津々といった表情でこっちを見ている。

「あー、レン、すまん。俺は声をかけない方がいいと思ったんだが……」

躍音君は、鏡音君にすまなそうにそう言っている。

「いいよ別に。で、お前、グミとつきあうことにしたの?」

言われた躍音君は、赤くなって横を向いてしまった。活音さんは、勢いよく躍音君の腕に抱きついていてる。

「そうでーすっ!」

そう言つと、活音さんは元気よくこんなことを訊いてきた。

「それで鏡音先輩、そっちは先輩の彼女さんですかっ!？」

え? 何? 今、わたしたち、普通に座ってただけよね? さっきみたいにしていたわけじゃないし、それなのに、どうしてこんなこと言われるの?

わたしがまた混乱していると——今日は混乱してばかりな気がする——活音さんは、明るい笑顔になった。

「初めましてっ! 演劇部一年の活音メグミ、みんなにはグミって呼ばれてますっ!」

「あ……初めまして。巡音リンです。鏡音君と同じクラスなの」

「そしてこっちが、演劇部部長の躍音グミヤ先輩ですっ! あたしの彼氏なんですよっ! 彼氏……いい響きですよねえ」

活音さんは、うつとりと躍音君をみつめた。その勢いに、わたしはちよつと気おされてしまう。

あ……そう言えば、確か……。

「あの……活音さん……」

「あ、グミでいいですよ。みんなそう呼んでますし。『活音さん』なんて呼ばれると、あたしじゃないみたいで」

「あの……でも……わたしたち、初対面だし……」

いきなり「グミ」と呼べと言われても……。

「そんな他人行儀な呼ばれ方は嫌いなんです」

むつとした表情でそう言われてしまった。えつと……。

「じゃ、じゃあ……グミちゃん」

「はいっ、何ですか？」

呼び方を変えると、グミちゃんはあつという間にもとの笑顔に戻った。

「グミちゃんて確か、学祭の舞台で、愛に目覚めたロボットの役をやつてなかった？」

確か、舞台にいたんだつた。あの時はまだ鏡音君とは仲良くなつていなかったけれど、ミクオ君が出ているので、ミクちゃんと一緒に舞台は見に行った。ミクオ君の役は、ロボットの反乱軍のリーダーだったはず。ミクちゃんは「クオ、もつとかっこいい役やればいいのに」と、少し不満そうだった。

「そうです、あれはあたしです。そして、あたしの相手役をやつたのがグミヤ先輩です」

ああそうか、あの時、一緒にいたのが躍音君だったんだ。

「舞台の上でもそういう役回りで、現実でも恋人同士なの？」

「恋人同士……いい響きですよね、グミヤ先輩」

グミちゃんは、またうつとりした目で躍音君を見ている。

「あの……グミちゃん……」

「えへへ……あの時はまだあたしの片想いだったんですけど、学祭が終わってしばらくしてから、グミヤ先輩があたしとつきあうこと

をOKしてくれたんですよ。あの舞台がきっかけなのかも！」

グミちゃんは、うきうきとそう言った。学祭の舞台はどちらかというと暗い話で、救いがあるのか無いのかよくわからない終わり方だったけれど、グミちゃんにとっては、文句なしのハッピーエンドになったみたい。

「それで、巡音先輩と鏡音先輩は、いつからつきあっているんですか？」

え、えーと……わたしたちは、そういう関係じゃないのだけれど……。肯定していないのに、どうしてもグミちゃんはそう思ったんだろう。

「別につきあってないって。一緒に遊びに来ただけで」

鏡音君がグミちゃんにそう言っている。

「こんなところに二人で遊びに来て、それでデートじゃないんですか？」

「二人じゃないし。クオと初音さんも一緒。二人とも絶叫マシンに乗りに行ってるから、今ここにいないだけで」

そう言えば、ミクちゃんはどうしているんだろう？ この遊園地は絶叫系の乗り物が多いから、端から順繰りに乗って行っているのかな。

「あれ、クオの奴も来てんの？」

「ああ。さっきも言ったけど、絶叫マシンの連続記録作るって、初音さんと一緒に行っちゃったよ」

鏡音君と躍音君がそんな話をしている。

「巡音先輩は、鏡音先輩のことをどう思っているんですか？」

突然、グミちゃんがそう訊いてきた。

「え？ な、なにが？」

「だから、鏡音先輩のことをどう思っているのかって話ですよ。鏡音先輩、割とお得だと思いますよ。もちろんグミ先輩には負けますけど……」

ねえ？ とでも言いたげな表情で、グミちゃんは躍音君を振り向

いている。躍音君が、グミちゃんを引っ張った。

「グ、グミ、そろそろ行こうか」

「えー、あたしまだ話したいです」

不満気な表情になるグミちゃん。躍音君は、グミちゃんを引き寄せて、耳元で何か囁いている。グミちゃんが、わずかに赤くなった。

……何を言われたんだろう？

「それじゃ、邪魔して悪かったな。俺とグミはもう行くから」

「それでは、失礼します。先輩方も楽しんでくださいね」

よくわからないけれど、行くことで話がついたみたい。二人は手を振ると、寄り添って人ごみの中へと消えて行った。

グミちゃんか……エネルギーの塊みたいな子だ。いつもああなのかな。

そんなことを考えていると、携帯が鳴り出した。あれ？ メロディーが二つ、聞こえてくる。わたしのだけじゃなくて、鏡音君のも一緒に鳴っているんだ。

わたしは携帯を取り出して、表示を見た。ミクちゃんからのメールだ。「そろそろ合流して、お昼にしない？ 今、観覧車の近くにいるから」と書かれている。

「ミクちゃんが、お昼ごはんにしないかって」

「こっちもクオから、同じ内容」

もうお昼の時間なのね。あ……そう言えば。こんなシーンが、確かあったわ。

「ねえ、鏡音君」

「何？」

「一緒に鳴るのって、『RENT』にあったわよね。携帯じゃないけれど」

カフェ・モミュスが変化したライフカフェのシーンで、みんなで大騒ぎしている最中に、二人の着けてるアラームが同時に鳴る。それで、お互いに同じ病気だと気づく。ロジャーは遠慮しなくていいんだと気づいて、ミミと二人でそっとその場を抜け出す。幸せなシ

ーンなんだけれど、ちょっと悲しい気もする。二人を結びつけた共通点が、治療法の無い病気だなんて。

「……巡音さん？」

「あ……ごめんなさい。ちょっと考えちゃったの。ロジャーとミミを結びつけるのがエイズだっていうのは、何だか悲しいなって」

そう言えば、『ラ・ボエーム』にはこういう共通項が無いのよね。どうしてジョナサン・ラーソンは、こういう設定にしたんだろう？「どうしてラーソンは、両方ともエイズにしちゃったのかな。先が無くて、悲しいのに」

「ラーソンの周りにはエイズで亡くなった人が大勢いたし……それに、両方がエイズだったから、あのラストに繋がるんじゃないのかな。多分、ロジャーとミミの間にある絆は、ロドルフォとミミにあったものより強かったんだよ」

鏡音君はしばらく考えてから、そう答えてくれた。鏡音君って、わたしが何を訊いても、ちゃんとした答えを出そうとしてくれるのよね。わからなくても、探そうとはしてくれる……。きっと、誰に対してもそうなのだろうけれど、そういう対応が嬉しい。

「悲しいことと嬉しいことが、たくさん同時にあった人だったのかな」

「……だろうね」

恋とはどんなものかしら（後書き）

グミヤとグミの名字は私の創作で、公式ではありません。

一エピソード丸々二人が（ミヤグミが乱入するとはいえ）喋ってるだけってどうなんだろう……。

ただ、ここで二人が話す内容って、この話としてはかなり大事な、肝の部分ではあるんですね。

ちなみに、午前中混乱ばかりしていたリンですが、午後はもっと混乱することになります。何がどうなるのかは、まあ、次回のお楽しみって奴です。

二重になった物語

この後、わたしと鏡音君は、ミクちゃんたちと合流して、一緒にお昼を食べた。ミクちゃんはすぐくはしゃいでいた。午前中はミク才君と一緒に、絶叫マシンにずっと乗っていたらしい。

「やっぱり遊園地の醍醐味って言ったら絶叫マシンよね。リンちゃんも怖がらずに乗ってみればいいのに」

「わ、わたしはちょっと……」

「ごめん、ミクちゃん。怖いものはやっぱり怖いの。わたしは首を横に振った。ミクちゃんが、不意に真面目な表情になる。

「ねえ、リンちゃん」

「何？」

「楽しんでる？」

「……うん。びっくりするようなことがあったから、ちょっと混乱してるけど」

混乱はしたけど、楽しいことは楽しい。

「びっくりするようなことって？」

鏡音君の前の恋人の話は、しない方がいいわよね……。グミちゃんたちの方だけにしておこう。

「さっき、鏡音君の知り合いの演劇部の子たちに、ばったり会っちゃったの」

「演劇部かあ。じゃあ、クオとも知り合いよね。どんな子？」

「すぐく元気のいいグミちゃんて子と、その恋人で真面目そうな躍音君て子。デート中だって言ってたわ」

「デートか……わたしもデートとかしてみたいなあ。やっぱり憧れちゃうわよね」

夢見るような瞳で、ミクちゃんは言った。……わたしにはよくわからない。そもそも、わたしに恋愛する機会なんて、あるんだろうか……。

「初音さん、巡音さん。午後はどうする？ クオは絶叫マシンの連続記録更新に燃えているみたいだけど」

ミクオ君と話していた鏡音君が、不意にわたしたちにその声をかけてきた。

「ミク、お前、当然逃げたりしないよな」

これはミクオ君だ。……何の話？

「受けて立つに決まってるじゃないの。クオこそ、途中で音を上げないでよね」

妙な感じでミクちゃんとミクオ君は盛り上がっている。いつから勝負になったんだろう。

あれ？ ミクちゃんとミクオ君が午後もあの手の物に乗り続けるってことは、わたしは午後も鏡音君と一緒にすること？ 思わず鏡音君の方を見ると、鏡音君もわたしを見ていた。

……なんだか、気恥ずかしい。わたしは、下を向いてしまった。

「巡音さん、午後俺と一緒にいい？」

あ……しまった。鏡音君と一緒に行動するのが、嫌だと思われてしまったかもしれない。

「わたしはいいけど……鏡音君は、それでいいの？ わたしと一緒にだと、コースターとかには乗れないし……」

「別にいいよ。コースターだけがこういうとこの楽しみじゃないしさ」

鏡音君が明るくそう言うてくれたので、わたしはちょっとほっとした。……あれ？ ミクちゃん、なんでこっちを見て笑ってるの？

わたし、何か妙なこと言った？

お昼ごはんが終わると、ミクちゃんとミクオ君は、一緒にまた絶叫マシンに乗りに行ってしまった。そんなに楽しいんだ……。ミクちゃんがそこまでコースターとかが好きとは思ってなかったの、わたしはちょっと驚いてしまった。でも、楽しんでくれるのは、い

いことよね。

わたしは鏡音君と一緒に、どちらかというと大人しいアトラクションを回った。コースターの類は、やっぱり怖い。

遊園地の中を歩き回っていると、お土産を売っているショップの前を通りかかった。……そうだ。お母さんに、何か買って帰ろう。

「鏡音君、ちよつとショップに寄ってもいい？」

「いいよ」

わたしたちは、ショップの中に入った。何にしようかな。目立つものは、やめておいた方がいいわよね。あんまり使い勝手のよくないものも、良くないだろうし……。

わたしはあれこれ悩んだ末、ハンカチを二枚と、携帯用のストラップを選んだ。レジに向かおうとした時、棚に並んでいるあるものがわたしの目に留まった。

ピンクのうさぎのぬいぐるみ。昔持っていたものとはデザインが違うけれど、ちよつと似ているような気もする。捨てられてしまった、わたしの昔のお友達。わたしはぬいぐるみを手に取って、しばらく眺めていた。

「買うの？ それ？」

「……ううん、いい」

買って帰っても、また同じことになるだけ。見つかったら捨てられてしまう。それに、この子はうさちゃんじゃない。わたしはぬいぐるみを棚に戻すと、レジに行ってお土産のお金を払った。

ショップを出て、また少し歩くと、ミラーハウスがあった。確か、鏡がたくさんあるところよね。

「入ってみる？」

そう言われたので、わたしは頷いた。

ミラーハウスの中は、思っていたのよりもずっと暗かった。外の光が入って来ないようになっていて、みたい。あちこちに色とりどりのライトが点つていて、それが薄暗い中、数多くの鏡に反射して揺らめいている様は、なんとも美しくて幻想的だ。

「綺麗ね……」

鏡の表面で反射している光に触れてみようと手を伸ばす。もちろん、手に当たるのは冷たい鏡の感触なのはわかってはいるけれど、ついそうしてみたくなるのだ。

「巡音さんは、鏡って言われると、何を思い出す？」

「子供の頃に読んだ童話かな」

絵本は駄目と言われたけれど、絵本でない本ならもうしばらく許してもらえたので、わたしは二冊に一冊ぐらいの割合で、おとぎ話の延長のような童話も読んでいた。

「『鏡の国のアリス』とか？」

「それもあるけど、真っ先に思い出すのは、わがままなお姫様の出てくる話」

甘やかされて育ったわがままなお姫様は、見せられた鏡に映った自分の姿を拒絶して、床に投げつけて割ってしまふ。その鏡の意味は最後まで出てこないけれど、不思議な鏡だということだけは強調されていた。でも、もっと不思議なのは、もう一人の女の子が入れられる部屋だ。

「卵みたいな形の部屋が出てくるんだけど、鏡と良く似た何かできてるの」

冷たい青い光の差し込む部屋。扉も窓も無いのに、なぜか出入りのできる部屋。こういう不思議なものがたくさん出てきた。物語の舞台となる国は、空から降ってくる雨ですらトパーズのように見えるという。初めてそこを読んだ時、空からきらきら光るトパーズがたくさん落ちてくるところを想像して、わくわくしたのを憶えている。

「鏡と良く似た何かって？」

「そうとしか書かれてなくて……」

確か鏡と完全に同一ではなかったはず。

「何か見えたりするの？」

「……怖くて恐ろしい何か」

ちゃんとした説明が無いので、はつきりとはよくわからないけれど、不気味な何か——としか言いようのないもの——だった。結局あれは何だったんだろう？ 綺麗に落ちがつかない話なので、余計よくわからない。

鏡音君は黙ってしまった。わかりにくい話をしてしまったかもしれない。

「あ……わかりにくかった？」

自分のテンポで喋らない方がいいかもしれない。……気をつけな
いと。

「いや、そうじゃなくて……巡音さんって、そういうおとき話みたいなのが好きなんだ」

「……本当はね。オペラだって、プッチーニやヴェルディよりも、ロッシーニの方がずっと好き」

ロッシーニは、プッチーニやヴェルディと比べると、やや落ちる扱いを受けている。でも、わたしはロッシーニの作った曲が好きだ。ただ、それを口にすることが怖かった。鏡音君の家に行って、鏡音君やお姉さんと話すまで、ずっと。

「……ありがとう」

「急にどうしたの？」

「色々、してもらっちゃったから」

わたしの方がしてもらってばかりだから、どうしても申し訳ない気持ちになってしまう。

「そんな気にしなくていいよ。友達だろ？」

鏡音君がそう言った時だった。突然、室内の明かりが消えて、真っ暗になってしまった。

「え……？ な、何！？」

わたしは驚いて回りを見回した。でも何も見えない。暗闇が広がっているだけだ。

「何なの！？ 何が起きたの！？」

「巡音さん落ち着いて。多分停電か何かだと思う。しばらく待って

ればまた明るくなるって」

鏡音君が何か言っているけれど、わたしはほとんど聞いていなかった。だって……。

「なんで真っ暗なの!？」

何も見えない。ただ暗い闇が広がっているだけ。いやだ……いやだいやだいやだ。暗いのは嫌い。暗いのは怖い。

「だから、停電……」

「いや……暗いの怖いの!」

あの時と一緒に。目が覚めたら真っ暗で、誰もいなかった。泣いても叫んでも、誰も来てくれなかった。わたしはもう小さな子供ではないはずなのに、今こうして真っ暗な闇に取り巻かれていると、どうしてもあの時の恐怖が甦ってくる。

やだ……! ここはいや! ここから出して!

「巡音さ……」

わたしの肩に、手が触れる。わたしは子供のように、相手に抱きついた。この恐怖を振り払いたくて。

力強い腕が、わたしを抱きしめた。……温かい。少しずつ、恐怖が消えて行く。

「……大丈夫だから」

そう言われると、本当に大丈夫という気がしてくる。わたしは黙って、相手の腕に身をゆだねていた。こうしていれば、安心なのだと思えたから。

そうしていたのは、どれくらいの時間だったのだろう。ほんの短い時間だったのかもしれないし、もっとずっと長かったのかもしれない。ただわたしには、その時間は長く感じられた。その間、お互い一言も話さず、ただずっとそうして……そして、また明かりがついた。さっきのような色とりどりの小さな明かりじゃなくて、もっと白いはっきりした明かりが。

「え……?」

ミラーハウスの中で、わたしと鏡音君は互いに抱きしめあうよう

な格好になっていた。どうしてこんなことに……。

思い出した。わたしは暗闇の中で恐慌状態になって、それが、何かなんだかわからないうちに、鏡音君に抱きついてしまったんだ。わたしは慌てて鏡音君から離れた。

「ご、ごめんなさい……わたしつたらなんてことを」

頬が熱い。向かいに見えた鏡の中のわたしは、真っ赤になっていた。

「いや……その……」

鏡音君も赤くなっている。わたしは恥ずかしさで、下を向いてしまった。どんな表情で、鏡音君と顔をあわせたらいいんだろう。

「……出ようか、ここ」

その方がいいかもしれない。わたしは何も言えず、頷くのがやっとだった。わたしは鏡音君の後に続いて、ミラーハウスを出た。

外の光の下に出ても、恥ずかしい気持ちは消えてくれなかった。

……どうしよう。鏡音君の顔が、まともに見れない。

「巡音さんて……暗いところ駄目なの？」

鏡音君に訊かれたので、わたしは顔を上げずに頷いた。暗いというか……真っ暗なのは苦手だ。寝る時も、小さめの常夜灯を一つ点けているぐらいだし。

「苦手なものなんて誰にだってあるしさ……あんまり気にしないでいいよ」

そう言ってくれたけれど、わたしはやっぱり顔をあげる気になれなかった。

「もしかして……俺に怒ってる？」

え？ 怒ってたりなんか、してない。わたしは慌てて首を横に振った。

「じゃ……行こうか」

どう言葉をかわしていいのかわからない。わたしは何も言わずに、鏡音君の後に続いた。やっぱり顔を上げられないので、下ばかり見てしまう。そうしていると、不意に鏡音君がわたしの手をつかんだ。

「え……？」

「そつちじゃないって」

道をそれていたらしい。一瞬視線があつたけれど、わたしは恥ずかしくてまたすぐ下を向いてしまった。だって……どんな顔をしたらしいの？ 鏡音君はわたしと手を繋いだまま、また歩き出した。

その後はずっと気恥ずかしくて、わたしは鏡音君とともに話せなかった。何をどう話していいのかわからなかったし……。どうして、こうなっちゃうんだろう。

車でミクちゃんの家まで戻ると、わたしは、自分のお迎えが来るまで、ミクちゃんの部屋で待つことにした。鏡音君とミク才君は、家に入らず、外で何か話している。

「ミクちゃん、今日はごめんね。折角誘ってくれたのに、一緒に回らなくて」

「わたしの方も絶叫マシンに夢中になりすぎちゃったから、お互い様よ」

屈託の無い声でミクちゃんはそう言った。ミクちゃんは楽しめたのね……良かった。

「ねえ……ところでリンちゃん、今日、何かあったの？」

「……何かって？」

あ……まずいな……。

「さつきから様子が変わだから」

小さい頃から一緒にいるから、ミクちゃんにはわかつちゃうんだ。どうしよう……。ミクちゃんに話した方がいいんだろうか？ でも、何を言ったらいいんだろう？

「鏡音君に、迷惑かけちゃったから……」

なんだかばやけたというか、曖昧な表現になってしまった。だって、抱きついてしまったなんて、恥ずかしくてとてもじゃないけど口にできない。

「迷惑って、今日リンちゃんにつきあったこと？ あれは鏡音君の方から言い出したんだから、リンちゃんが気にすることないわよ」
きっぱり断言されてしまった。そうじゃなくて……。

「いえ、それじゃなくて……」

どうしよう。説明するか、やめておくか。わたしの目の前では、ミクちゃんが首を傾げている。

「ねえ、リンちゃん。まさかとは思っけど……」

「何？」

「お化け屋敷とかで、びっくりして抱きつきでもしたの？」

わたしは固まった。お化け屋敷じゃなくてミラーハウスだけど、やったことは一緒だ。どうしてわかったんだろっ。

「え……今の、正解？ うわーっ……びっくり……」

ミクちゃんは両手を頬に当てて、驚いている。わたしは赤くなつて俯くしかなかった。

「それなら全然迷惑じゃないって！」

なぜか、ミクちゃんは勢いこんでそう言い出した。

「え……だって……いきなり抱きつかれたら……その……」

反応に困るよね？ 実際、鏡音君、困ってたもの。

「リンちゃん、わかつてないなあ」

ミクちゃんは、妙なことを言い出した。それも、何だか不思議と嬉しそうな表情で。

「それは絶対、向こうは迷惑だとは思ってないって。驚きはただろっけど、迷惑じゃないことだけは確かだから」

強い調子でそう言われてしまう。迷惑じゃ……無いの？ で、でも……迷惑じゃないにしても、その後のわたしの態度にも問題あったと思うし……。

わたしは混乱したまま、迎えの車に乗って帰宅した。お母さんが出迎えてくれる。

「リン、お帰りなさい」

「ただいま、お母さん。これ、お土産」

わたしは鞆からお土産の包みを取り出して、お母さんに渡した。お母さんが包みの中を見て、笑顔になる。

「ありがとう、リン。大事に使うわね。……今日は楽しかった？」

……楽しかったけど、同時にひどく混乱した一日だった。特に最後……。思い出すだけで顔が火照ってきそうだ。

「……うん。はしゃぎすぎてちよつと疲れちゃったけど。部屋で少し休んでくる」

わたしは二階へと上がって行った。廊下を歩いて自分の部屋へ行くこうとして、ふつと足が止まる。ハク姉さんの部屋の前だ。

声……かけた方がいいかな。でも、今日はルカ姉さんが家にいる。わたしがハク姉さんの部屋に入ったところで、ルカ姉さんは怒った。気を悪くしたりはしない。でも……なんだか、その事実を知られることが後ろめたい。

というか……ルカ姉さんは、どうして怒らないんだろう？ わたしが物心ついた時から、ルカ姉さんは怒ったり泣いたりといったことをしない人だった。お父さんはルカ姉さんが完璧で理想的ないい子だったから、というけれど、わたしはいつも、ルカ姉さんと自分の間の壁を感じていた。わたしの家の姉妹関係は、多分まともじゃない。

わたしはドアの前で、耳を澄ましてみた。……何も聞こえてこない。これじゃ、起きているのか寝ているのかもわからない。ハク姉さん、起きている時は本を読んでいるか、携帯でネットをしているかのどつちかなのよね。

……結局、声をかけることはできなかった。わたしは自分の部屋に戻ると、着替えることもせず、ベッドに座ってしばらくぼんやりとしていた。

明日……どうしよう。そもそもなんで、わたしは鏡音君に抱きついたりしてしまったんだろう。パニックを起こしたとはいえ……幼

稚園児みたいじゃない。

思い出すとまた恥ずかしくなってきた。わたしはベッドに突っ伏して、頭を抱えた。

二重になった物語（後書き）

こういう仕組みのミラーハウスがあるのかどうかは知りませんが、あつたら面白いだろうなあと思つてこういうことに。

ちなみに、電気が消えた状態は大したことじゃありません。多分誰かがうっかりブレーカーを落としたとか、そんなことです。そういう凡ミスもそうそう起きないでしょうが……まあ、これ、小説なので。

遊園地でのクオ

とまあ、そういうわけで、俺たちは四人で遊園地に行くことになった。巡音さんは四人で行くという話を全然聞いていなかったらしく——ミクの奴、絶対わざと伏せてたな——呆然としていた。更に俺の方はレンに妙なことを言われたが、真面目に相手をする俺が精神的に疲れそうだったので、適当な返事だけしておく。

遊園地につくと、ミクはさっそく絶叫マシンに乗りたいたいと言い始めた。巡音さんの方は引きつっている。……さすがに、少し可哀そうな気もする。ミク、お前は本当に友達のことを思ってたやっつてんのか？ 単に面白がっているだけだったりしないよな？ とはいえ、ミクに協力を約束させられている身なので、ミクの言葉を後押しする。これでまだ話がまとまらないようなら、俺が何があんでも絶叫マシンに乗るぞと強行することになっている。……ミク、お前は鬼か。

驚いたことに、レンはさっさと巡音さんの相手を引き受けてしまった。予定どおり……というか、ミクの作戦どおりなんだが……。あいつに一体どんな心境の変化があったんだ。

何がどうなってるのかよくわからなかったが、俺はそのままミクと一緒にジェットコースター乗り場へと向かった。作戦は成功と言えるが……ミクの思惑どおりというのが、どうにも面白くねえ。

「予想以上に上手くいったわ」

ミクはにこにこ笑顔で、そんなことを言ってきた。ミクの笑顔が可愛いのは認めよう。だがその笑顔が、こういう時は悪魔の笑みに見えてくる。

「……良かったじゃねえか」

その情熱を、もちっと他の何かに向けてもらえないもんかね。ついでに言っなら、どうもレンは何か誤解をしているような気がするんだが……。

「本当は一緒にコースターでも乗ってくれともつといいんだけど、リンちゃん、絶叫系ダメなのよね。せめてお化け屋敷でも入ってくれないかしら」

ミクはそんなことを言っている。お化け屋敷って……巡音さんがレンにきやーって抱きつくのを期待してんのか。……どうせなら、ミクと入りたいもんだが、入ってくれないだらうなあ。というか、自分が嫌なことを人にやらせるなよ、お前は。

とかなんとか考えているうちに、順番がやってきた。コースターに乗り込み、安全バーを下ろす。

「うーん、わくわくするわね」

それに関しては俺も同意する。ちなみに今乗り込んでいるコースターは、ループタイプの奴だ。ここは絶叫系の揃っている遊園地で、コースターだけでも複数ある。

「とりあえず、コースターは全部乗るぞ」

「賛成！」

ミクが元氣よく答える。コースターの全制覇は欠かせないもんな。それが終わったらバイキングかフリーフォールか……何にせよ、お楽しみはたくさんってことだ。

……というかこの「作戦」なんだけど、この後はもう俺ら二人は遊園地でひたすら遊ぶだけなんだよな。よく考えてみたら悪くない……どころかむしろいいじゃないか。嫌がることもなかったかな。

ミクの思惑どおりってのが、やっぱりちよつと癪だけだ。

昼だけは合流して一緒に取ったが、午後俺はミクと二人で絶叫系に乗ることになった。もちろん、この辺りは事前にミクと打ち合わせ済みである。レンは特に何も異論は挟まず、午後俺も自発的に巡音さんの相手を引き受けてくれた。うーん……。まさかとは思うが……あいつ、巡音さんに気があるのか？ あの子のどこがいいんだろつ。よくわかんない奴だ。

ちなみにレンによると、デート中のグミヤとグミにはったり会ったらしい。グミヤの奴、とうとう観念してグミとつきあうことにしたのか。学祭の舞台の練習の時、あれだけ「君は綺麗だよ」ってグミに言うの渋ってたのに。「こんな恥ずかしい台詞言えるか」ってあ、もちろん、本番ではちゃんと台詞言ってたけど。

押しの一手も時には有効なんだな。グミのことは今度から「狙った獲物は逃さないスナイパー娘」と呼んでやろう……嘘です。そんなことしたら、演劇部女子部員全員に、俺が袋叩きにされる。というか、なんで女子全員、あいつに好意的なんだ？俺にはさっぱりわからん。

グミとグミヤのことはさておき、午後も別行動となったので、俺たちは引き続き絶叫系に乗りまくることにした。さすがに終盤になるとちよつと疲れたので、最後の乗り物は観覧車にしたけどな。

「今日は楽しかったわね」

観覧車の中で、ミクが俺に言ってきた。

「……だな」

楽しかったのは事実なので、俺も素直に認めた。ミクが嬉しそうな表情になる。

「クオは、絶叫系だったらどれが好き？」

「やっぱ、ジェットコースターだな」

他にも色々と捨てがたいが、ベストはあれだ。

「ミクは？」

「わたしもジェットコースター」

少しオレンジに染まりかけた空を背景に、くすつと笑うミクは、何かのCMカットみたいで、憎らしいほど決まっている。

「あ、そろそろ一番高い位置に来るわよ」

ミクはそう言つと、窓から外を眺めている。俺も隣に並んだ。

「おー、みんな点にしか見えないな」

絶景絶景。観覧車もいいもんだ。それから下に下りるまで、ミクと俺はずつと外を眺めていた。

観覧車から降りると、俺とミクは待ち合わせ場所であるゲート前へと向かった。レンと巡音さんは先に来てこつちを待っていたが……何だか、空気が重い。……何があったんだ、こいつら。ミクの作戦が失敗して、更に気まづくなっただけか？　おいおい、やめてくれ。折角作戦が上手くいったって、ミクが喜んでいたところなのに。

いや俺は、ミクを応援してるわけじゃないぞ。こんなアホな計画は、とつとやめにすべきだと思ってるぐらいだ。けど、ミクはどう考えても諦めてくれそうにない。つまり、この作戦から俺が離れるには、俺が必要なくなる——つまり、レンが巡音さんをつきあつか振るかどつちかにしてくれる——しかないわけだ。だから、くつつくんならさっさとくつついてくれよ、お前ら。

内心微妙な気分で、車に乗る。帰りの道の間、レンと巡音さんはずつと黙りこくって話もしなかった。俺はミクとたわいもないお喋りをずつとしていた。いやだって、誰も喋らないと空気が暗すぎる。たたくもつ。

家に着くと、ミクは巡音さんを連れて家の中に入ってしまった。

多分、巡音さんの迎えが来るまでに、話を聞きだすつもりなのだろう。レンの方はというと、ぼんやりとミクの家を見ている。大丈夫かこいつ。

「なあ……お前、どうかしたのか？」

さすがに気になったので、俺はレンに訊いてみることにした。

「……何が」

ぶつきらばうな調子で、レンはそう訊き返してきた。

「だって……なんか変だぜ、お前ら」

少なくとも、午前中はもう少し話をしていただろ。

「何でもない」

とまあ、こんな返事が返って来た。あのなあ、俺は心配してやってんだぞ。

「嘘をつけ。……なあ、もしかして、巡音さんと何かあったのか？」
そう訊くと、一瞬だけレンの表情に動揺が走った。……あれ、図

星なのか？　だが、俺が追求する前に、レンはこっちに背を向けた。
「俺はもう帰るよ。じゃあな、クオ」

あ、こらっ！　逃げるなっ！　ある程度は状況とやらを聞き出しておかないと、俺がミクに怒られるじゃないか。ったく、友達甲斐のない奴め。

レンが帰ってしまったので、俺も家に入る。しばらくするとお迎えが来たらしく、巡音さんも帰って行った。さてと……ミクの様子を伺いに行きますかね。作戦失敗のせいで、八つ当たりされなきゃいいけど。でも、放っておくのはそれはそれで、後が怖いもんな……。

ところがある。俺がミクの部屋に行ってみると、ミクはこの上ない上機嫌で、ジュースなんぞを空けていた。ヤケ酒ならぬヤケジュース……ってわけでもないよな。むしろ祝杯だ。

「……どうしたんだお前。ついに壊れたのか？」

「あ、クオ！　作戦大成功を祝つてるところなの。クオも飲む？」
飲むって……それ、ジュースだろ。まあいいや、俺ももらおう。

コップを持ってきて、ジュースを注いでもらう。

「かんぱ〜いっ！」

ミクがそう言っただけでコップを掲げたので、俺もコップを掲げてカチンとあわせる。……だから、何のお祝いだよ。と思いながらも、まずはジュースを一口。うん、美味い。

って、追求はどうした、俺。

「なあ、おい。何が大成功なんだ」

「今日の作戦」

これ以上はないという笑顔でそんなことを言われる。

「おい、あれのどこが大成功だ。二人とも帰りの車の中で、一言も喋らなかつたぞ」

「それがねえ……クオ、聞いたら驚くわよ」

ふふん、わかる？　とでも言いたげな笑みを浮かべるミク。ああもう。

「もったいつけてないでさっさと喋れよ」

「もう……いい話なのに。まあいいわ。あのねえ……リンちゃん、お化け屋敷で鏡音君に抱きついちゃったんですって」

俺は、もう少しで口に含んだジューズを吹き出すところだった。レンの奴、巡音さんをお化け屋敷に連れてったのか？　どうやって連れ込んだのか今度教えてもらおう。

「あ、この話、鏡音君にしちゃダメよ」

と思つた矢先に、ミクが釘を刺してくる。

「なんでだよ」

「クオは鏡音君から何も聞いてないんでしょう？　自分が喋ってないことが知られている、っていうのは、気持ちのいいものじゃないの。最悪信頼関係が壊れるし、今後の作戦に支障が出るわ」

「まだ続ける気か！？」

もう充分仲良くなったんだからいいじゃないか。他人のことなんて放っておこうぜ。

「当然でしょ。二人がちゃんど名実と共にカップルになるまでやりますからね」

胸を張ってそう言うミク。あああ……どうしてこいつは。

「なあ、ミク。余計なお節介って言葉、知ってるか？」

「何言ってるの。これは余計なお節介なんかじゃないわ。わたしの使命よ」

……駄目だこりゃ。俺がどれだけ道理を説いても、ミクの前には通じない。自分の無力さなんてものを、ひしひしと感じてしまった俺であった。

遊園地でのクオ（後書き）

クオがミクをお化け屋敷に連れ込んだ場合、百パーセントの確立でクオが死ぬほど後悔することになると思います。

アングルド・ロード

わたしが幾ら悩んでいても、朝はいつもどおりやってくる。憂鬱な気分で起きたわたしは、洗面所で顔を洗うと、部屋に戻って制服に着替えた。鏡を見ながら髪を梳いて、リボンを結ぶ。学校……行ったら、鏡音君に会うわよね。同じクラスだもの。

どうしてわたしは、鏡音君に迷惑ばかりかけ倒しているんだろう？ 事の起こりにしたって、わたしが劇場で足をくじいたところを助けてもらったことだ。その後も貧血で倒れて保健室まで連れて行ってもらったり、昨日に至っては抱きついてしまったわけだし……。昨日のことを思い出すと、また顔が赤くなるのがわかった。どうかしなくちゃ……。これ以上呆れられたくはないし。でも、どうすればいいんだろう。さっぱりわからない。……困った。

朝食の時間になったので、わたしは階下へと下りて行っった。食堂に行くと、お母さんとルカ姉さんがいた。ルカ姉さんの方は朝食を食べている。お母さんはまだみたい。

「おはよう、お母さん。おはよう、ルカ姉さん」

「おはよう、リン。昨日はよく眠れた？」

「あ……うん」

お母さんの問いに曖昧に頷く。ルカ姉さんの方は「おはよう」とだけ言うと、すぐにまた食事に戻ってしまった。

「すぐに朝ごはんを持ってきてもらうから、座ってなさい」

わたしは自分の椅子に座った。お母さんがお手伝いさんに、わたしの分の朝食を持ってきてもらうように言っている。わたしは少し憂鬱な気分で、窓の外を見た。今日もいい天気みたい……。なんだか余計憂鬱になってきた。

お手伝いさんが朝ごはんを持って来てくれたので、わたしも食事を始めた。トーストとスクランブルエッグと野菜サラダ。何か話したい気もするけど、何を喋っていいのかわからない。昨日のこと

を詳細に話すわけにはいかないし。だって、わたしが遊園地に遊びに行ったことはお母さんにしか話してないし、そのお母さんにしたって、わたしがミクちゃんと二人で遊びに行ったと思っているんだもの。もし何かの弾みで本当のことがお父さんの耳に入ったら、一体どんな恐ろしいことが起きるのかなんて想像もつかない。

食事を始めてしばらくすると、お父さんが食堂に入ってきた。：

…珍しいな。お父さん、いつもはもう少し遅くまで寝ているのに。

…寝ていてくれた方が、ありがたいんだけど。

「……おはよう、今朝は早いのね」

お母さんが、お父さんにそう言っている。わたしもおはようとだけ声をかけた。

「目が覚めた。飯にしてくれ」

お父さんはそれだけ言うと、自分の椅子に腰を下ろして朝刊を読み始めた。お母さんはお手伝いさんに声をかけて、お父さんの分の朝食を持ってきてくれるように告げている。そのうちにお手伝いさんが朝食を持ってくると、お父さんは新聞を脇に置いて、食べながらルカ姉さんと話——多分、仕事に関することだろう——を始めた。わたしは顔をあげないようにして、食事を続けることにする。お父さんの注意は引きたくない。

「……で、どうなんだ」

「……………」

あれ、ルカ姉さんが返事してない？ 珍しいな。

「リン、聞いているのか」

いきなりそう言われて、わたしは飛び上がりかけた。顔を上げると、お父さんがこつちを睨んでいる。

「……え？」

「聞いていなかったのか」

お父さんの声が一気に低くなった。仕事の話をしてたんじゃなかったの？

「ご、ごめんなさい。考え事をしていて……何だったの？」

……嘘だ。これは嘘。考え事をしていたんじゃない。何も考えていなかっただけ。

「全くお前は……人が話をしている時はちゃんと聞くもんだ。中間テストの結果はどうだったのかと訊いたんだ」

「……テストが返って来るのは今日から」

わたしは、下を向いてぼそぼそとそれだけを言った。多分、結果は普段とそんなに変わりない……と思う。下がったら嫌だな。外出禁止にされてしまう。上がった場合は……特に何も無い。トップにでもなったらちよつとは違うのかな……。ううん、きっと一緒よね。ルカ姉さんと比べられるだけ。

「そうか。ちゃんと結果を報告するんだぞ」

わかってます。それに……いつも結果はちゃんと報告しているんだけどな。わたしが結果をごまかしたことなくって無いのに。

「お前はルカと比べると、小さい頃から不注意が多いしな」

確かにわたしはルカ姉さんのような、完璧な娘じゃない。でも……

……完璧じゃないと、いけないの？ 完璧な子供じゃないの？

……ハク姉さんもよく、同じことを言っていたっけ。

だからわかつてる。言っても無駄ってことが。

「あなた、朝からそんな話しなくても……」

「……お前は黙ってる」

口を挟みかけたお母さんを、お父さんはぴしゃっとさえぎってしまった。……いつもと同じ。

「……全く、母親のデキが影響しているのかもしれないな」

そんなに優秀な子供だけがほしかったのなら、ルカ姉さんのお母さんと離婚しなければ良かったじゃないの。わたしとハク姉さんの実のお母さん——どんな人だったのか知らないけど——と再婚してわたしとハク姉さんを作っておいて、どうして今更そんなことを言い出すの？ わたしたちなんて、作らなければ良かったじゃない。そうしたら……そうしたら……。

……どうして、わたしは朝からこんなことを考えているんだろう。

胸の奥が苦しい。

食欲は失せてしまっていたけれど、残すわけにもいかない。また倒れたら困るし、お母さんを心配させてしまうし、それ以前にお父さんの前で残したらその場でお説教だ。朝食の残りを無理矢理食べると、わたしは席を立った。

「学校に行つてきます」

少し早いけど、このままお父さんと同じ席にいるのよりはましだ。学校に行くつて言えば、お父さんだって引きとめはしないし。

普段より早く自宅を出たので、当然、学校に着いた時間も早かった。とはいえ、もう開いているので、教室に入って自分の席に着く……まだ誰も来ていない。

わたしはがらんとした教室を見回した。……鏡音君の席が目に入る。途端、また、昨日のことを思い出してしまった。ああもう、いい加減にしないと。鏡音君と顔をあわせる度に、赤面するわけにはいかないんだから。

鞆を開けて本を取り出して、ページを開く。チャールズ・ディケンズの『荒涼館』だ。ディケンズの書く話は理想を求めすぎだと言う人もいるけれど、わたしは彼の作品が好きだ。

「おはよう、巡音さん」

本に集中していたので、わたしは鏡音君が教室に入ってきて、わたしの席のすぐ近くに来ていたことに気がつかなかった。驚きのあまり、本を手から落としてしまう。

「……何もそんなに驚かなくても」

どうしよう、呆れられたかも。えーとえーと、こういう時は……。ちゃんと向き合わないと。

わたしは向きを変えて、正面から鏡音君に向き合った。……やっぱり恥ずかしくて、視線を上げることができない。

「ごめんなさい……それと、おはよう」

なんとか、それだけは言った。というより、それだけ言うのがやつとだったのだけれど。

「あの……巡音さん」

鏡音君は言いかけて、止めた。……どうしたんだろう。視線が上げられないので、鏡音君の表情はわからない。

「……昨日のことだけど」

そう言われて、身体が緊張で強張ってしまう。……何言われるんだろう。

「例の『好き』と『嫌いじゃない』はイコールで結べるのかって話」
え？ そっち？ ……わたし、一人で緊張して……何だかバカみたい。自分で自分が嫌になってくる。

「今朝姉貴にその話題振ってみたら、姉貴、それをイコールで結べはしないってさ」

鏡音君が話を始めている。……ちゃんと聞かなくちゃ。

「姉貴が言うには、『嫌いじゃない』ってのは、逃げるための言葉なんだって。好きということをごまかしたいか、好きではないけど明確に嫌いとは言いづらい時か、無関心に近い感情の時に出てくる言葉なんだって。……俺もまあ、それでなんとなく、納得はしたんだけど」

鏡音君がしてくれたその話は、不思議とわたしの胸の中ですとんと落ち着いた。確かにそういう時、わたしも「嫌いじゃない」という言葉を使ってしまう。特に、本当の気持ちを押しつぶして、好きでもないものを好きな振りをしようとする時とか。そうか……そういうことなんだ。

「鏡音君のお姉さんってすごいよね」

なんだか羨ましい。わたしには、そういう話ができる人がいないから。

じゃあ……ルカ姉さんがいつも「嫌いじゃない」という理由って何？ 本音をごまかしているとは思えないから、明確に嫌いと言いつらいのか、無関心に近いのよね。……どっちだろう？ なんだか、

無関心に近いもののように思えてくるのだけれど……。

……もしかしたら、ルカ姉さんには「好き」って感情、それ自体が無いんだろうか。それは怖い考えだったけれど……納得できるような気もする。だってルカ姉さんが、何かに対して明確な好意を示したところを、わたしは見たことがない。趣味らしい趣味も無いし、友達の話も聞いたことはないし……。

でも、どうして「好き」って感情が無いの？ それに……もしかしたら「嫌い」って感情も無いの？

「……ねえ、鏡音君」

「何？」

「『好き』って感情が無い人って、イメージできる？」

鏡音君は、腕を組んで考え込んだ。

「……巡音さん、学祭の舞台見たって言ってたよね。あれの最初の方に出てくるロボットみたいな感じになるんじゃない？」

最初のタイプ……確か言われたことにただ従う、感情の無い労働機械だ。粉碎機に飛び込めと言われたら、はいそうしますと言って飛び込んでしまう。ルカ姉さんは、粉碎機に飛び込んだりはしないと思いたいけれど……。

なんだか、気分が悪くなってきた。……血の繋がった姉に対して、こんなことを考えるわたしの方が、おかしいのかもしれない。

「巡音さん、大丈夫？」

「うん……平気。考えすぎて、ちょっと怖くなっただけ」

わたしは大きく息を吸って、気分を落ち着かせようとした。

「『好き』って感情が無い人は、『嫌い』って感情も無いのかな？」

「無いんじゃない？ ロボット状態なのだとすればね——生きることに執着せず、楽しむことを知らず、雑草以下の存在——」

鏡音君は、舞台の台詞を口にした。雑草以下というのは、さすがにルカ姉さんに使ってはいけない言葉だけど……生きることへの執着が無いということや、楽しむことを知らないということは、当てはまるような気がしてしまう……。ハク姉さんもルカ姉さんのこと

を「いい子のロボット」って言ってたし。

ルカ姉さんのことをこう思うなんて、いけないことだ。でも、一度根付いた考えは頭を離れてくれそうにない。ルカ姉さんは……ロボットと一緒になんだろうか。そして、粉碎機に飛び込めと言われたら飛び込んでしまっただろうか。

わたしが悩んでいると、ミクちゃんがやってきた。それを見た鏡音君は「あんまり悩まない方がいいと思う」と言っ、自分の席へと戻って行った。……また心配をかけてしまった。自分で自分が嫌になる。

「おはよう、ミクちゃん」

「おはよう、リンちゃん。ねえ、さっきは何を話してたの？」

え、えーと……どう説明したものか……。

「もしかして昨日の話？」

ミクちゃんは興味津々といった表情で、そう訊いてきた。えーつと、昨日の話ではあるんだけど……。説明を始めたら、ルカ姉さんのことも説明しなくちゃなくなるだろうし……。

「鏡音君から話しかけてきたんでしょ？」

わたしが迷っていたせいか、ミクちゃんは自分からこう訊いてきた。

「そうだけど」

それはそうなので、わたしは頷いた。ミクちゃんが笑顔になる。

「ほらね。迷惑だなんて向こうは思っ、てないって証拠よ。そう思うのなら、リンちゃんに話しかけたりなんてしないって。リンちゃんももっと自信を持たなくちゃ」

ミクちゃんはそう言っ、わたしを叩いた。確かに迷惑がられてはいないのだろうけれど……迷惑かけたり心配かけたりしているのは事実なわけ。それにしても……自信っ、て、何の？

「わたしは、どうしたらいいんだろう……」

「どうしたらっ、て……そんなの決まっ、てるわ」

考え事をしていたつもりが、ついつい口に出してしまっ、ていたら

しい。ミクちゃんは、笑顔でそう言ってきた。

「えーと？」

「リンちゃんの心の望むとおりにしたらいいのよ。リンちゃんがしたいって思うことを、したらいいの」

……ミクちゃんの言いたいことがよくわからない。わたしのしたいこと……。

鏡音君にこれ以上、迷惑をかけないようにになりたい。でも、これ、したいことというのは、ちょっと違うわよね？ えーと、じゃあ、役に立ちたい。……でも、鏡音君、別に何かに困っているわけじゃないし。

それ以外だと……できたら、ルカ姉さんがハク姉さんと、鏡音君とお姉さんがしているような話がしたい。でも……こんなの、どうしたらいいの？

その日の授業は、特に何事もなく終わった。そして、戻ってきたテスト——まだ全部ではないけれど——は、大体予想どおりの点数だった。用事も無いので、例によって真っ直ぐ帰宅することになる。帰ってみると、お母さんはいなかった。居間のテーブルにメモが置いてあって「デパートまで買い物に行くことにしました。おやつはお手伝いさんに出してもらってね」と書いてある。

今がハク姉さんと話をするチャンスかも。わたしはおやつは後回しにして、二階へと上がっていった。ハク姉さんの部屋のドアを叩く。

「……誰？」

あ、良かった。今日は起きているみたい。

「リンよ」

しばらくしてから、鍵を外す音が聞こえて、ドアが開いた。

「……入んなさい」

わたしはハク姉さんの部屋に入った。相変わらず散らかっている。

椅子の一つを片付けて、わたしはそこに座った。ハク姉さんはいつもどおり、ベッドに座る。髪が普段にも増してぐしゃぐしゃに見えるけど、梳かしてないんだろうか。

「あのね、ハク姉さん……この前のこと、訊きたいんだけど」

「この前って？」

「二週間前の日曜日のこと。わたしが外から帰って来たら、ハク姉さん、ひどく酔っ払ってたの」

ハク姉さんは首をかしげて少しの間考え込み、それから、ああ、と手を打った。

「あの日ね……」

「ねえ、何があったの？ あんなになるまでお酒飲んだりして……わたし、すごく心配したのよ」

ハク姉さんは額に手を当てて、思案する表情になった。

「大したことじゃあ、無いのよね」

しばらくしてから、ハク姉さんはそれだけを言った。

「大したことじゃないって……」

「うん、だからね。リンがあたしの醜態を見て心配したのは、仕方ないかなってあたしも思う。でも別に、大した理由があって飲んでたわけじゃないの。ただ単にいらいらしてだけだから」

単にいらいらしてたって……鏡音君は、お酒についてなんて言ってたっけ？ 確か、楽しくて飲みすぎたのなら放っておいても大丈夫だけれど、憂さ晴らしだったら良くないって、言ってたわよね。

「いらいらしてたってことは、ストレス解消のために飲んでたってこと？」

「……そうとも言うわね」

そうとしか言わないんじゃないだろうか。

「ストレスの原因は？」

「リン、あんた、何だってそんな詰問口調なのよ？」

ハク姉さんはむっとしたようだった。

「だって……心配だもの。わたしが誰なのかわからないくらい酔っ

てたし、それに……あれが初めてじゃないんでしょ？」

お母さんは、一年くらい前からちよくちよくお酒が無くなると言っていた。あれだけ酔ったのも、きつと初めてじゃないはず。

「そりゃまあ、そうだけど……」

「お酒に逃げるのはやめてよ」

「わかってるわよ……それくらい。でもどうにもならないんだから、仕方ないでしょ」

わたしの言葉に、ハク姉さんは吐き捨てるような口調でそう言った。

「だからって……！」

「リン、くどい！ あんたにはどうせあたしの気持ちなんかかわかんないわよ！」

わたしは、ハク姉さんの部屋から追い出されてしまった。……こんなつもりじゃなかったのに。ハク姉さんとちゃんと話をしたかっただけなのに。何がいけなかったの？

自分の部屋に戻ったわたしは、制服から普段着に着替えると、ベッドに座った。

……そもそも、わたしが何かしようとする事自体が、間違っているのかもしれない。わたしがハク姉さんに対して、何ができるというの？ もしかしたら、わたしの存在自体が、ハク姉さんを追い詰めているのかもしれないじゃない。

わたしはため息を一つついて、ベッドに寝転がった。天井が視界に入る。なんで、わたしはちゃんと話ができないんだろう……。

アングルド・ロード（後書き）

実際の台詞は「粉碎機に飛び込め」ではないんですが……リンは一度舞台見ただけなので、正確に憶えてないんです。

お芝居には恋愛が必要

ハク姉さんとひと悶着あってから二日後。放課後に、鏡音君がわたしに声をかけてきた。

「巡音さん、ちょっといい？」

「……鏡音君、どうしたの？」

例の「好き」と「嫌いじゃない」の話のおかげか、わたしたちはまた普通に話せるようになっていた。……ミラーハウスでのことは事故だったと思って、忘れた方がいいのよね。……きっと。

でも……忘れてしまおうとすることを、ちょっと淋しく感じてしまうのは、何故なのかな……。

「実はちよつと相談に乗ってほしいことがあつて」

鏡音君に言われたことがあまりに意外で、わたしは驚いてしまった。

「え……わたしに？」

相談って一体何を？ 鏡音君の周りには、わたしよりも相談に向いた人がたくさんいそうだけど……。

「そうだよ。多分、巡音さんが一番適任だと思う」

鏡音君はあつさりと言った。……どうしよう。わたしが役に立つとは思えないけれど……でも、折角こう言ってくれてるんだし、やらないで諦めちゃ、駄目よね……？

あ、でも……連絡しておかないと、怒られてしまう。

「それ、長かかる？」

「……かもしれない」

じゃあ、やっぱり連絡を入れておかないと。

「わかったわ。……少しだけ待ってて」

わたしは携帯を取り出して、運転手さんとお母さんにメールを送った。理由は……今日は、ミクちゃんに頼むわけにはいかないわね。もう帰っちゃったもの。図書室で調べたいことができたってことに

しておこう。少し苦しいけれど。

「お迎えを遅らせてもらったから、しばらくは大丈夫。それで、相談って何？」

「あゝ、うん、それなんだけど……巡音さん、文学に詳しいだろ。だったら、戯曲とかも詳しくかつたりする？」

戯曲？ 確かに幾つか読んで……。シェイクスピアの主要な作品とかには、大体目を通して。でも正直言うと、戯曲は苦手。あれは読むより見た方が面白いんじゃないかな。

「少しは……詳しいってほどじゃないけど」

「例えば、どんなの読んだ？」

「シェイクスピア、チェーホフ、メーテルリンク、カルデロン、イブセン、ブレヒト……あ、後ギリシア悲劇とかも読んだけど、それくらいよ。それに全部の作品に目を通したわけじゃないし……代表作ぐらいしか読んでないわ」

だからあんまり専門性を求められても困ってしまう。一作しか読んでない人もいるし……。

「それだけ知ってりや充分だよ。少なくとも、俺よりずっと詳しいだろうし」

そういう観点で物事を考えていなかったの、わたしはどういう返事をすればいいのかわからず、黙りこむことになってしまった。

「実は今、演劇部の来年四月の新入生歓迎公演でやる作品探してんだよ。グミヤの奴、部長のくせに俺に全部任せたとか言いやがって」演劇部の公演の話なんだ。それで戯曲がいるのね。あれ、でも、

確か……。

「そういうのって、専門があるんじゃないかった？ 図書室で見かけた記憶があるんだけど」

学生向けの演劇の本が置いてあったはずよね。あれじゃ駄目なの？

「普通はね。だけど顧問が、『どうせやるなら文学作品を』って、無茶なこと言い渡してきてさ」

鏡音君は呆れをふくんだ口調でそう言った。

「なんだか大変そう……」

こう言っただけで、あの手のものはやっぱり、難しい作品が多い。それにものによっては時代が大幅に違うから、それだけで色々大変そうだし。

「実際、大変だよ」

あれ？ でも、演劇部の学祭での公演って、ロボットが人間を滅ぼしちゃうお話だったわよね。

「ねえ、鏡音君。学祭の時の公演は？ あれ、未来のお話でしょ？」
あれも文学作品だったのだろうか。

「ああ、あれは作者がチャペックってことで、強引に押し切ったんだよ。チャペックなんだから充分文学の力テゴリに入るだろ。噂じやノーベル文学賞の候補になったこともあるっていうし」

鏡音君はそんな説明をしてくれた。チャペックって……チェコのカレル・チャペックのこと？

「え……あれ、チャペックだったの？ チャペックって、『ダーシエンカ』や『長い長い医者さんの話』書いた人よね？」

『ダーシエンカ』は、チャペックが飼っていた犬のために書いたお話やエッセイを集めた本で、可愛らしさにあふれている。読んだ後でミクちゃんに貸してあげたら、ミクちゃんもすっかり気に入ってしまった、自分でも買い込んでしまったくらい。『長い長い医者さんの話』は、ちょっと不思議な味わいにあふれた童話で、他にもチャペックは幾つかこういう作品を書いている。

「あ……知ってたんだ。そうだよ」

「小さい頃、『郵便屋さんの話』好きだったの……同じ人が書いたとは思えないわ」

ヒドラが出てくる話も好きだった。主人公がとてもいい人で、でもそんな主人公に、「世の中」が、ヒドラを飼っているというだけで無理難題を吹っかけるのだ。

「ああ、まあ、そうかもね」

「あ、でも、『マクロプロス』を書いたのもチャペックよね……」

あれは、確か荒唐無稽のファンタジーっぽいストーリーだったはず。といっても見たことは無いのだけれど。

「よくそんなの知ってるなあ……」

鏡音君は『マクロプロス』のことも知っているようだった。オペラには詳しくないみたいだから、原作を読んだのかな。

「見たことはないの。ヤナーチェクの作品リストに入ってたから知ってるだけで」

「ヤナーチェクって誰？」

「チェコの有名な作曲家。『マクロプロス』をオペラにしたの」
有名ではあるけれど、歌詞が全部チェコの言葉ということもあって、上演される機会は少ない。わたしも見たことがあるのは『利口な女狐の物語』ぐらいだ。

「ああ……なるほど」

鏡音君は頷いて、それからはとした表情になった。

「チャペックについて語りだすと際限無くなりそうだから、話戻すよ」

あ……いけない。すっかりチャペックの話になってしまっているわ。わたしは頷いた。

「とまあ、そういうわけで戯曲を探しているんだけど……巡音さん、好きな戯曲とかある？」

好きな戯曲……。わたしが好きなものって言ったら……。

「……メーテルリンクの『青い鳥』」

子供っぽすぎるって、言われちゃうかな。でもこれが好きなの。幼い兄妹が、妖精のおばあさんに頼まれて「幸せになれる青い鳥」を探して不思議な国を旅するお話。綺麗で不思議なものがたくさんでてくるんだけど、それだけじゃなくて、もっと深いところで輝くような何かが詰まっている話。

「兄妹が幸せの青い鳥を探しに行く話だよね？」

わたしは頷いた。

「それ、絵本だか童話だかじゃなかったっけ？」

「絵本としてリライトされたものが出てるけれど、もともとは子供に見せるための戯曲として書かれたもののなの」

わたしも、最初に読んだ時は絵本だった。少し成長してから、大人向けの版が出ていることを知って、手にしてみても戯曲であることを知って驚いた。大人向けの版なので、幸い今もわたしの部屋の本棚に置いてある。

「メーテルリンクという人は、なんでもない日常から宝石を見つけ出せる人だったと思うの。『青い鳥』を読むと、細かい描写からそういうことを感じられるの。それとね、この戯曲は衣装の設定一つ一つにも夢があるのよ。光の精や水の精の衣装が『ロバの皮』っていう、別のおとぎ話の衣装だったりするの」

そんなところから、メーテルリンクのこだわりのようなものが感じられる。……そう言えば、『ロバの皮』は、フランスの童話作家、ペローの話だ。メーテルリンクはフランス語圏のベルギーの作家だから、シンパシーが強かったのかも。兄妹の妹の方が着る衣装は、確か、赤ずきんちゃんの衣装だし。あれもペローよね。

「……ちよつと話がズレるけど、探していた青い鳥って、確か自分の家にいたんだよね？」

「ええ」

一年——夢の中と説明されているけれど——不思議な国々を旅しても、青い鳥は見つからなかった。思い出の国でもらった鳥は黒くなってしまう、夜の国で捕まえた鳥は死んでしまい、未来の国で見つけた鳥は赤くなってしまう。でも、朝になって目覚めた兄妹は、元々飼っていた鳥が、青く変わっていることに気づくのだ。

「結局幸せは自分の家にいるってこと？」

「……違うと思うけど」

そういう側面のある話だけれど、それなら「幸せの国」で既に説明されている。

「というと？」

「だって、鳥を探していたのは自分たちのためじゃなくて、病気の

女の子のためだもの。目的を果たせなかったことを残念に思う二人の気持ちを受けて、元々家で飼われていた鳥が、青く変わったんじゃないかしら」

家にいた青い鳥をプレゼントすると、女の子の病気は治ってしまう。そして最後に、青い鳥は飛んで行ってしまふ。

「それに、最後、青い鳥は飛んで行ってしまつて、泣き出す女の子にお兄ちゃんの方が『また見つけてあげるよ。ここに来た人、鳥が飛んできたら、捕まえておいてください』って言うところで終わるの。劇場に来た人たちに『青い鳥が自分のところに飛んで来るかも』と思わせる為に、そうしたんじゃないかしら。このお芝居から、希望を持って帰って下さいって」

わたしは何気なく、窓の向こうに視線を向けた。青い空が広がっている。青い鳥の姿は見えないけれど……。わたしが幼い子供でこの劇を見たら、青い鳥が自分のところに飛んでこないかと思つて、窓を開けて外を眺めただらう。

そう言えば、別の人の作品だけど、『希望は羽根のある小鳥』という詩があつた。きつとこの人のイメージする希望も、同じような姿なのだらう。

「兄妹以外にどんなキャラクターがいるんだっけ？」

鏡音君はそんなことを訊いてきた。えーっと……。

「主人公の兄妹の他に、兄妹と一緒に旅をするのが、犬の精、猫の精、光の精、パンの精、砂糖の精、牛乳の精、火の精、水の精。それから二人の両親とか、妖精のおばあさん——お隣さんと一人二役だと思ふんだけど——とか、行く先々の国で出会ふ不思議な存在とかがいるけど」

二人の家にあるものが、人のような姿を得てついて来るのだ。自発的に来るのは犬と光だけで、他はいやいやだけど。でも、猫以外は、お別れの挨拶を聞く限り、最終的には兄妹のことを好きになつてくれたのだと思う。猫だけはよくわからない。

「旅するのは？」

「思い出の国、夜の国、森——木々と動物たちが出てくるの——、
幸せの国、未来の国よ」

墓地とかにも行くけど、兄妹と光ぐらいしか出てこないから、勘定に入れなくてもいいかな。

わたしが話すと、鏡音君は残念そうに両手をあげた。

「……ごめん、そいつをやるのは無理。一幕しか出て来ないのは使いまわすにしても、必要なキャストが多すぎる。セットとか衣装とか、そっちのこともあるし」

言われてみればそうよね。全員がいつも一緒にいるわけじゃないし、兄妹以外で主要なのは犬、猫、光ぐらいだけど。キャストが少なすぎても淋しい感じになってしまっただろう。それに、背景とか衣装とかきちんとしないと、雰囲気全然伝わらないだろうし……。でもちよつと残念だな。『青い鳥』見てみたかったのに。

「演劇部って、部員は何人なの？」

「二年が八人、一年が七人、合計十五人。ただ、照明や音楽を担当する奴も必要だから、全員が舞台上に上がるのは無理。あ、半分以上は女子だけど、男役をやるのに抵抗のない奴が多いから、男女比率は気にしないでいいよ」

それだと、キャストが十人ぐらいの作品の方がいいのかな？ それで、セットとかを比較的揃えやすそうとなると……。

「じゃあ、チエーホフの『桜の園』は？」

物悲しい幕切れで、あまり好きな作品ではないけれど、手間とかを考えるとこれがいいかもしれない。人数もそんなに多くなかったと思うし。セットにしても、テーブルとか椅子ぐらいで何とかかなる……と思う。わたしはオペラとバレエ以外の舞台はあまり見たことがないから、そう断言することまではできないけれど。チエーホフの作品はオペラになってないし。

「何一つ自分で決めることのできない主人公が、決断を先延ばしにしたあげく自滅する話だよね？」

え……。

わたしは何を言えばいいのかわからなくなってしまった。鏡音君は『桜の園』の内容のことを言っているだけ。けれど、なんだか自分のことを言われたような気になってしまう。……わたしは、物事を決めるのが苦手だ。それだけじゃない。ラネーフスカヤ夫人と同じように、わたしも無力で、泣くことしかできない。思わず下を向いてしまう。

「あ……あの……巡音さん……」

わたしの前で、鏡音君があせった声を出している。……駄目だ、こんなのじゃ。しゃんとしなくちゃ。せめて気持ちだけでも。

「……平気」

わたしは一度唇を軽く噛んで、それから顔をあげた。

「確かにあの話にはそういう側面もあるのよね。ただ……わたし、最後に桜の園が無くなってしまふというのが、とても悲しくて。だって、そこにずっとずっとあつたのよね。広い土地に生えたたくさん桜の木。春になると一面が真っ白な花で埋まるの。無くなったら、もう戻って来ないのよ」

捨てられてしまった大切なものと同じで、もう帰って来ないんだ。時代の流れには誰も逆らえないのかもしれないけれど、綺麗なものが消えていくという事実が、とにかく悲しい。

「……ラネーフスカヤのようにはなりたくないの」

どうしたらいいのかはわからないけれど、この気持ちだけは忘れないようにしないと。

「巡音さんなら大丈夫でしょ？」

鏡音君がそう言ってくれた。励ましの言葉だろうけれど、やっぱり嬉しい。

「……ありがとう」

「あの……で、話戻すけどさ。『桜の園』は、確かに上演するのには問題無さそうなんだけど——新入生歓迎公演でやるには、ちょっと話の中身が暗すぎる気が……明るい話の方が、興味を持ってもらえそうなんだよ」

鏡音君の言葉を聞いて、わたしはまた考え込んだ。確かに物悲しい話だから、歓迎公演に適しているとは言いがたいかもしれない。チーホフの他の作品も、大体そんな感じよね。セットとかの問題はないんだけど、とにかく暗い。

「……生きた人間が出てこないお芝居は演じにくい？」

ちよつとふざけて、わたしは鏡音君にそう訊いてみた。

「人生を描くには、あるがままでもいけなくて、かくあるべきでもいけなくて、自由な空想に現れる形じゃないといけないんだよ」

あ……わかるんだ。何だか嬉しい。

「お芝居には恋愛が必要なのよ」

そこまで言って、わたしは耐え切れずに声を立てて笑ってしまった。やっぱり「喜劇」なのかな。

「で、戯曲の話だけど……文学って、暗いものの方が多いのよね」
シェイクスピアなら喜劇もあるけど、時代設定を考えると難しいわよね。

「シェイクスピアとかは無理でしょうし……」

「まあね……俺だってやれるものなら『テンペスト』とか、やってみたいけど、さすがにああいうのはなあ……」

鏡音君は『テンペスト』が好きなのね。わたしは『冬物語』が好き。物語には幸せな結末を迎えてほしいの。

で、上演する戯曲……あ、そうだ。

「バーナード・ショアの『ピグマリオン』は？ 確かキャストは十人ぐらいだったはずよ。パーティーのシーンがちよつと難しいかもしれないけど」

後お風呂に入るシーンがあるけど……カーテンでも舞台に張っておけばごまかせるんじゃないかな。

「それって、ギリシャ神話の話？」

鏡音君はそう訊いてきた。ピグマリオンというのは、ギリシャ神話にでてくる、自分の作った彫刻に恋をした男性の名だ。この戯曲はその神話から題材を取ってはいるけれど、中身は違う。

「違うわ。あのね……『マイ・フェア・レイディ』って映画、知ってる？ あれの原作なの。映画はミュージカルだけど、原作は普通のお芝居だから、やれるんじゃないかと思ったんだけど」

最初から『マイ・フェア・レイディ』って言った方が、わかりやすかったかな。

「え？ 『マイ・フェア・レイディ』って……あの、オードリー・ヘップバーンが主演してる奴？」

「ええ」

わたしは頷いた。お母さんがオードリーの出演作を好きなので、これは見せてもらったことがある。ややブラックなところもあるけれど、基本的には明るい恋愛コメディだ。ただ原作では、イライザは教授の許には戻って来ないのだけれど。

「それ、文学に入れて大丈夫？」

「バーナード・ショーはノーベル文学賞受賞者だから、大丈夫じゃないかな」

文学じゃないと言われたら困ってしまう。

「……それならやれるかも。あ、でも、俺読んだことないんだよね」
鏡音君はそう言って、困った表情になった。えっと……確か、わたしの本棚にあったわよね。

「わたし、原作持つてるから、鏡音君さえ良ければ明日持つてくるわ」

「あ……じゃあ、頼んでいい？」

「ええ」

良かった。ちゃんと役に立てたみたい。些細なことだけど……本当に、良かった。

わたしが学校から帰ると、お母さんは居間で何かを見ていた。……雑誌かと思っただけど、違うみたい。

「お母さん、何見てるの？」

わたしは、テーブルの上に何冊も置いてある薄い冊子の一つを手
に取った。表紙には、タキシードとウェディングドレスの男女の写
真がプリントされている。

「結婚式場のパンフレット？」

「ええ」

ということとは……。ルカ姉さん、もうじき結婚するんだ。結婚し
ても、多分この家を出て行くんじゃないかって、神威さんの方がこっち
に来るんだろうけど。

「ルカ姉さん、とうとう式をあげるんだ」

「そのつもりらしいのだけれど……」

お母さんは、そう言っただけ息をついた。……。どうかしたのかな。
一応これ、おめでたい話のはずよね？ と一瞬思ったのだけれど、
よくよく考えてみると、わたしもどうおめでたいのかがよくわから
ない。結婚って、おめでたいの？

「ルカ姉さん、何か問題でもあったの？」

「問題というか……。ルカ、全部私に決めてくれて言い出したの」

……。え？ どういうこと？

「決めてくれて、どういふことなの？」

「だから……。式場とかお料理とか、ドレスとかブーケとか、全部私
が決めていいって言い出したの」

わたしは言われた意味が、良くわからなかった。だって、結婚す
るの、ルカ姉さんよね？ 自分の結婚式のことなのに……。それでい
いの？

「意見を訊きたいとかじゃなくて？」

お母さんは、首を横に振った。

「自分は忙しいから、決めておいてくれて」

忙しいって……。確かにルカ姉さんは仕事をしていて、お母さんは
専業主婦だ。でも、ルカ姉さんだって休みぐらいある。決めようと
思えば、決められる時間ぐらいあるはずなのに。

「神威さんの方は、『結婚式は女性の夢でしょうから、ルカの望み

を叶えてやりたいんです。どんな式でもあげてやりたい。式の形式もこだわりません。神社でも教会でも、ルカの好きな方で」と言ってくれているのだけれど、ルカの方がこんな調子だから、こっちも困ってしまって……神威さんにこんな話するわけにも行かないし「何を言えばいいのかわからず、わたしは黙ってしまった。ルカ姉さん……やっぱロボットと一緒になんだろうか。」

「式場は招待客の人数やお父さんの都合もあるだろうから、純粹にルカの希望どおりとは行かないかもしれないでしょうけど……お父さんもドレスやブーケにまではあれこれ言わないでしょうし……ルカ、本当に結婚したいのかしら」

お母さんは、ルカ姉さんのことが気がかりみたい。確かにルカ姉さんが本当に結婚したいのかどうかなんて、わたしにもわからない。多分神威さんのことが「嫌いではない」のだろうから、結婚のことも「しても構わない」のかな……？　って、わたし、何を考えているんだろう。

「……リンだったらどんな式にしたい？」

わたしがルカ姉さんのことを考えていると、お母さんはそんなことを訊いてきた。

「え？」

「まだ先のことだけど、結婚するとしたら、どんな式がいい？」

わたしの結婚式……？

「お母さんとしてはリンにはまだまだお嫁に行ってほしくないけど、でも、そんなに先でも無いんでしょうね」

高校を卒業したら大学に行くことになる。お父さんのことから、わたしもルカ姉さんと同じように、在学中にお見合いをさせようと考えるだろう。よくわからないけど、それなりの格式のある家の人と。その人がわたしを気に入ったら、多分、そのまま話は……。

……嫌だ。そんなのは嫌。どうして、お父さんの言うとおりにしなくちゃならないの？　わたしだって……。

「……お嫁になんか行きたくない」

気がつく、わたしはそう口にしていた。お母さんが、困った表情になる。

「リン、そうは言うけれど、いずれリンにもいい人が……」

「お父さんが連れてくる人？　わたしの結婚相手は、お父さんが決めるんでしょう？」

わたしの言葉を聞いて、お母さんがショックを受けた表情になった。わたしの胸も痛む。お母さんを傷つけないんじゃないの。それにお母さんにこんなことを言ったら、仕方がない。この家で物事を決めるのはお父さんで、お母さんじゃないのだから。

「……ごめんなさい。わたし、ちよつと疲れてるみたい」

わたしはそれだけ言うと、通学鞆を抱えて二階へと上がって行った。自分の部屋に入ると、鞆を床に置き、ため息をついてベッドの上に倒れこむ。

どうしてかな……ここところ、前よりもずっと、些細なことが気になるようになってきた。胸をかきむしられるような気持ちがあることも。

でも……学校へ行くのだけは、前よりもずっと楽しく感じられる。わたし、どうしてしまったんだろう。

お芝居には恋愛が必要（後書き）

そう言えば、兄妹が主役なのに、『ヘンゼルとグレーテル』と比べると、『青い鳥』ネタって無いですよねえ。知名度はかなり高いはずなのに。

やっぱりメーテルリンクの原作のレベルが高すぎていじりにくいのでしょうか……。

ちなみにミチルの衣装は正確には「グレーテルもしくは赤ずきん」と指定されています。

なお、作中でリンが「チエーホフ作品はオペラになっていない」と言っていますが、実際には『三人姉妹』のオペラがあるそうです。ただ、マイナーな作品なので「知らない」という設定でもいいかなと思い、知らないということにしています。

今回登場する三つの戯曲に関して二人が言っていることは、あくまで「こういう解釈もあるよ」ぐらいに考えておいてください。どうい話なのか疑問に思ったら、ぜひ原作をあたってください。

『青い鳥』『桜の園』はどちらも超がつくほど有名なので、本屋や図書館で簡単に探せると思います。『ピグマリオン』は少々難しいですが、映画の『マイ・フェア・レディ』なら、レンタル屋さんにあると思います。

わたしには姉さんがわからない

次の日、わたしは『ピグマリオン』を鞆に入れて登校した。鏡音君が登校してきたので、本を渡す。本を受け取った鏡音君が喜んでくれたので、わたしは少し安堵した。少なくとも、一つはいいことができた。

その日の昼休み、いつものようにミクちゃんとお弁当を食べていたわたしは、ふと思いついてミクちゃんに訊いてみた。

「ねえ、ミクちゃん。まだ先のことだけど……自分の結婚式はこんな風にしたいって、考えたことはある？」

ミクちゃんはお弁当を食べる手を休めて、夢見るような瞳になった。

「もちろん」

「どんな式がいい？」

「えっとね……まずはドレスなんだけど、一枚目は純白のウェディングドレスがいいな。お姫様みたいにふくらんだ、段々飾りのスカートのがいいの。ブーケは淡いピンクのバラ。それにごくごく薄い透けるようなヴェールと、宝石のついたティアラを着けるの。で、後ね、できたらガラスの靴を履きたいな」

ミクちゃんは楽しそうにそう語ってくれた。ミクちゃん、『シンデレラ』好きだものね。小学生の時の学芸会でシンデレラの役をやった時、とても嬉しそうだったつけ。

「でね、お色直しはお花をいっぱい付けた、明るいグリーン Dres。靴も同じ色で、ブーケはかすみ草と勿忘草にするの。頭にもその花の冠をかぶるのよ」

「妖精さんみたいね」

ミクちゃんならきつと似合うだろう。

「そついう感じにしたいの。でね、会場をシンデレラの舞踏会のイメージで統一するのよ。つまり絵本の中の宮殿みたいな雰囲気って

こと。曲はバレエの『シンデレラ』と、ディズニー映画の『シンデレラ』がいいな」

ミクちゃんが結婚する時、祭壇の前でミクちゃんを待っているのはどんな人なんだろう。ミクちゃんのことだから、自分の理想に合う人を見つけ出して来るんだろうな。

「それでね、ウェディングケーキは、リンちゃんのお母さんに頼みたいな……ダメ？」

可愛らしく首を傾げて、ミクちゃんはそう訊いてきた。

「お母さんに訊いてみないとわからないけれど……多分大丈夫だと思うわ。シュガーペーストのケーキがいい？ それともクリームを使った方？」

「クリームがいいな。ケーキらしいケーキがいいの。それでね、リンちゃんには付き添いをやってほしいんだけど……あ、でも」

ミクちゃんは、何事かを思いついたような笑顔になった。何だろう。

「ねえ、リンちゃん。結婚式、合同にしない？」

「え？」

「だから、一緒に結婚式をあげるの！ 付き添いなんかよりそっちの方が断然いいわ！」

「そ、それはさすがに無理だと思うわ……わたしのお父さん、承知しないと思うし」

いくらミクちゃんとの友達つきあいは大目に見てくれているとはいえ——以前、ミクちゃんのお父さんがわたしのお父さんに何か言ったらしい——結婚式まで一緒に無理だろう。

ミクちゃんはわたしの前で、不満そうな表情になった。

「……ごめんね、ミクちゃん。一緒に結婚式つて、とても素敵なアイデアだと思うけど、多分わたしの方が先に結婚しなくちゃならなくなるだろうから……」

わたしの言葉を聞いたミクちゃんは、勢いよく首を横に振った。
「ミクちゃん？」

「それじゃダメよ、リンちゃん。わたしのお父さんとお母さん、いつも言ってるの。結婚は一生のことだから、よく考えて相手を選びなさいって。リンちゃん、お父さんの言うとおりになんてすることないの」

きっぱりとそう言うミクちゃん。……ミクちゃんの言うことはもつともだ。でも……お父さんを説得なんて、どうやったらできるの？ 正直、話をすることを考えただけで怖くてたまらない。

お父さんの言いなりになるのは嫌だけれど……でも、どうしたらいいのかなんて、わたしには考えつかなかった。自分がどうしたいのかすら、よくわからないのに。ごめんね、ミクちゃん。

その日の夜、わたしが夕食を終えて食堂から出ると、ちょうど仕事から帰って来たルカ姉さんと出くわした。

「ただいま、リン」

「お帰りなさい、ルカ姉さん。今日も仕事？」

ルカ姉さんはうなずいた。

「ええ」

「ご飯は？」

「今日はまだだから、これから食べるわ」

ルカ姉さんは二階に上がろうとした。食事の前に、スーツから普段着に着替えるつもりなのだろう。わたしはルカ姉さん呼び止めた。

「ルカ姉さん、ちょっと待って」

「何？」

「お母さんから聞いたの。ルカ姉さんと神威さん、もうじき式をあげるって」

ルカ姉さんはまた頷いた。……表情は全然変わっていない。要するに……無表情ってこと。これがミクちゃんだったら、頬を赤く染めるとか、にっこり笑うとか、とにかく絶対変化があるのに。

「それが？」

「ねえ……どうして結婚式のこと、全部お母さんに決めてくれなんて言っただの？」

「忙しいから」

淡々と答えるルカ姉さん。やっぱり表情に変化は無い。わたしは背筋が寒くなってきた。ここから逃げ去ってしまいたい気持ちに駆られる。でも……。

「ルカ姉さん、おかしいわよ。ルカ姉さんの結婚式でしょう？ 自分で決めないの？」

「リン……何が言いたいなの？」

「だから、ルカ姉さんの希望はどこにあるの？ ルカ姉さんは自分の結婚式をどうしたいの？ 式場や日取りはともかく、こんなドレス着てヴァージンロードを歩きたいとか、無いの？」

答えて……ルカ姉さん。そう思った時だった。

その場に乾いた音が響いた。それと共に、わたしの頬に痛みが走る。

……ルカ姉さんに叩かれたのだと気づくのに、しばらくかかった。

「ルカ姉さん……」

わたしは呆然として、ルカ姉さんを眺めていた。ルカ姉さんはやっぱり無表情だけど、視線だけはいつもより険しいような気がする。

「リンにだけは言われたくない」

ルカ姉さんは冷たい声でそう言くと、くるりと背を向けて、階段を上がって行った。わたしは何も言えず、ルカ姉さんを見送るしかなかった。

しばらくの間そこに立ち尽くしていたわたしだけど、そのうちに我に返った。打たれた頬は、ひりひりした痛みを訴えて来ている。

ルカ姉さんにぶたれたのは初めてだ。暴力を振るうような人ではないもの。ルカ姉さんはいつもいい子で、間違っただけなんじゃない人。じゃあ……この場合、悪いのはわたし？ ルカ姉さんにぶたれるようなことを言っただけ、わたしが悪いの？ でも、今言っただけ

ぶたれて当然なほど、悪いことだったの？

ルカ姉さん……完全にロボットってわけじゃないんだ。安心するべきところなんだろうけれど、何故か心がずきずきする。それに……何かが、引っかかっている。

いつまでも廊下に立っていると、着替えを済ませたルカ姉さんと鉢合わせしそうだったので、部屋に戻る。ベッドに座ると、わたしはさっきあったことを思い返してみた。ルカ姉さんは、どうしてわたしを叩いたんだろう？

くだいようだけど、ルカ姉さんはいい子だ。成人して働いているルカ姉さんに「いい子」というのも変な話だけど。でも、ルカ姉さんのことを考えるとき、出てくるフレーズはいつも「いい子」だったりする。今だって、お父さんの言うことには絶対に逆らわないし……。

ちょっと待って。「いい子」って、「逆らわない子」って意味なの？ 鏡音君のお姉さんは、「好き」と「嫌いじゃない」はイコールで結べないって言ったわ。じゃあ、「いい子」と「逆らわない子」もイコールで結べないんじゃないの？

そう言えば……わたしが貧血で倒れる前、鏡音君はわたしになんて言った？ 確か「巡音さんには自分の意見つてものがないの？」って言ったんだわ。その言葉を聞いて、わたしは頭の中が真っ白になって、鏡音君の前で叫んでしまった。……もしかして、それと同じことが、ルカ姉さんにも起きたんじゃないの？

わたしの頭の中が真っ白になったのは、鏡音君の言ったことがそのとおりだったからだ。お父さんは、わたしが自分の考えを口にすることを嫌がる。怒られたりお説教されたりするのが嫌で、わたしはお父さんの前で何かを言うことを止めた。でも、本心を口にできないのは辛かった。だから、意見とか考えとかを持つこと自体を止めようとして、実際、そういうものはわたしの中からほとんど無くなりかけていた。

じゃあ……ルカ姉さんには、「こうしたいという希望」が無いの

かもしれない。でも、なんで？ 希望が無いって、どうしてそうなの？

そもそも、ルカ姉さんは、どういう人？ わたしの記憶にあるルカ姉さんは、いつも「いい子」だ。ルカ姉さんはいつだって「完璧ないい子」で、お父さんから褒められる人。そうじゃなかった時期のルカ姉さんなんて、わたしは知らない。

どうしたらいいんだろう？ ルカ姉さんの前で、同じことをもう一度訊いてみるとか？ でも、同じ手が二度もルカ姉さんに通用するだろうか。それに……修羅場になったら、責められるのは確実にわたしだ。だってルカ姉さんは「間違ったことをしない」「いい子」なんだから。

ああ、嫌だな、こういう考え。なんで、わたしはこうなんだろう。ルカ姉さんには何をやっても適わないから、卑屈になっているだけ……お父さんなら、そう言うんだろうな。……何をやっても適わないのは本当だし。

でも……やっぱり、ルカ姉さんはおかしいと思う。「ちゃんとした姉」というのは、鏡音君のお姉さんのような人のことを、言うんじゃないのかな……。

……何故か、鏡音君とミラーハウスで話した時のことが頭に浮かんだ。え？ あれ？ なんで、こんなことが頭に浮かぶの？ わたし、本格的にどうかしちゃった？ 自分で自分がわからなくなってしまう、わたしはベッドの上に突っ伏した。

（おまけ その日、自宅でのクオとミクの会話）

「ねえ、クオ」

「なんだよ」

「リンちゃんのお父さん、射殺してくれない？」

「できるわけねえだろそんなこと！ お前、俺を何だと思ってるんだ！？」

「やっぱりダメか……でもあのお父さん、射殺しておいた方がいい

と思うのよね」

「お前ちよつと……いや、かなりおかしいぞ。今すぐ医者に行け」

「だってあのお父さんが全ての元凶なんだから。あのお父さんさえいなくなってくれたら、リンちゃんだってもつと自分に素直になれるのに」

「ミク……頼むから、犯罪者にだけはならないでくれよ。お前がそんなことになったら、俺、伯父さんと伯母さんに申し訳が立たないじゃないか」

「じゃあ合法的にあの人排除する方法考えて」

「無茶を言つなあつ！」

わたしには姉さんがわからない（後書き）

とりあえず、この状態で結婚なんてするもんじゃないってことだ
けは、明白なんです……。どうしようもないなあ……。

愛される権利

ルカ姉さんに叩かれた次の日。朝食の席で顔をあわせたルカ姉さんは、昨日のことなんて無かったかのように、平然としていた。わたしは話しかけようかと思ったけれど、止めた。これからルカ姉さんは会社、わたしは学校だ。朝の忙しい時間に、蜂の巣を突付くような真似はしたくない。お母さんもいるし。

いつものようにほとんど何も話さずに朝食を終えると、わたしは学校へ向かった。教室に入って自分の席に着いて、やっぱりいつもと同じように本を広げる。読んでいるのは引き続き、『荒涼館』だ。『おはよう、巡音さん』
声をかけられた。鏡音君だ。わたしは本を置いて、そちらを向いた。

「おはよう、鏡音君」
「早速貸してくれた『ピグマリオン』を読んでみたんだけど、かなりいい感じだと思うんだ」

鏡音君はそんな話を始めた。上演する際の不都合は無いみたいなね。良かった。

「じゃあ、『ピグマリオン』にするの？」
「俺としてはこれを推すつもり。まあ、他のみんなが嫌がったら無理だけど、でも、多分大丈夫だと思う」

最終決定は演劇部の会議で決めるのね。駄目だった時の為に、他の候補作も探しておいた方がいいかな。

「あの……ところで巡音さん、『ピグマリオン』って、映画と結末が違っただね」

「ええ」

鏡音君に言われたので、わたしは頷いた。映画『マイ・フェア・レディ』では、イライザはヒギンス教授の許に戻ってくる。でも、原作の『ピグマリオン』では、イライザは帰ってこない。確かイラ

イザは最終的には、フレディと結婚することになるのよね。

「それ……どう思った？」

「どちらの結末がいいかということ？」

鏡音君が頷いたので、わたしは考えてみた。でも、よくわからない。確か、作者であるショーマ、この作品の結末では悩んだとか、何かに書いてなかったかしら……。

「あの……鏡音君。鏡音君は、今日は時間、空いてるの？」

もしかしたら複雑な話になるかもしれないし、朝のせわしない時間で話が収まるとは思えない。この前みたいに、放課後に話をした方がいいと思う。

「大丈夫だよ」

「じゃあ……放課後に話してもいいかしら？　少し時間をかけて考えをまとめたいの」

休み時間とか、少しずつ考えていけば、放課後には多少は考えがまとまっているんじゃないかな……。

「いいよ」

鏡音君がそう言ってくれたので、わたしはほっとした。帰宅が遅れる理由……また、ミクちゃんにお願いするしかないかな。ごめんね、ミクちゃん。

放課後になった。わたしは自宅と運転手さんに帰宅が遅れる旨をメールしておいた。ミクちゃんはこの前と同じように、わたしの頼みを快諾してくれた。もっとも今回は、何をするのかは説明しておいた。

「リンちゃん、楽しんでね」

そう言つて、ミクちゃんは帰っていった。わたしたち、劇の内容の話をするんだけど……。

「巡音さん、考えはまとまった？」

ミクちゃんが帰って行ったのと入れ違いに、鏡音君がわたしのと

ころに来て、そう訊いてきた。えーと、今日一日考えては見たのだけれど……。

「ごめんなさい。考えてみたけれど、よくわからないの……」

どちらの結末がこの話にふさわしいのかわからない。わたしみたいな女子高生が、ノーベル賞作家の発想を理解しようとするのが間違いないのかも。

「イライザは貧しい花売り娘で、お母さんはもう死んじゃっていて、お父さんは機嫌が悪いとイライザを叩くような人で、夢や希望とは縁のない人生を送っていたのよね。……だから、イライザは幸せになりたいんだと思うんだけど」

わたしは目を閉じて、イライザの気持ちを考えてみた。ロンドンの下町生まれで貧乏暮らし。小さい頃から頼れる人はいなくて、何もかも自分でやろうとしてきた。必死で花を売っても稼げるお金は少しだけで、一生、このまま……。

なんだか……シンデレラみたい。この前ミクちゃんがシンデレラの話をしたせいかな。灰にまみれたシンデレラ。泥にまみれたイライザ。シンデレラは綺麗なドレスを着て、舞踏会で踊った。イライザも綺麗なドレスを着て、大使館のパーティーで踊ったのよね。その前に、ヒギンズ教授から話し方を仕込まれるわけだけど……。

イライザの人生には、綺麗なものなんて何もなかった。売っているお花ぐらいだけど、あれは簡単に泥にまみれてしまう。綺麗なものが欲しかったんだ。綺麗に……なりたかったんだ。

「イライザは綺麗になって、幸せになりたかったのよ。そういうものが何一つ無い人生だったから。泥にまみれたりしない幸せがほしかったの」

「どんな格好していても、綺麗な人はもともと綺麗なものじゃない？」

鏡音君はそう訊いてきた。男の人にはわからないのかな。綺麗なものを身に着けると、気分はずっと華やぐものなの。

「女の子にとっては違うのよ。ドレスを着るのとぼろを着るのでは、

全然。それに、その場所にふさわしい服装って、あるじゃない？

華やかなパーティー会場に、ぼろを着て入るわけにはいかないわ。一度くらい綺麗なドレスを着て、飾り立てられたパーティー会場で、多くの人たちの視線を集めてみたい……イライザがそう夢見てしまったとしても、それは無理のないことだと思うの」

イライザだけじゃないわよね……。だって華やかな舞踏会のシーンがある物語って、たくさんあるもの。やっぱり一度は夢見るものなんだと思う。

「巡音さんもドレス着てみたいと思うわけ？ あ、でも、巡音さんだったら、ドレス着てパーティーに出たことぐらいあるよね？」

鏡音君はそう訊いてきた。わたしは高校生だから、会場を借り切つてやるような大掛かりなパーティーにはまだ出たことがない。でも、家でやるホームパーティー——といつても、会社に関係する人がたくさん来るのだけど——になら、出たことがある。

「自宅で催されるものになら……わたし、まだ高校生だから、外の会場には出たことがなくて」

でも本当のことを言うと、わたしは、パーティーに出るのは苦手だ。お父さんとお母さんの後ろで、ずっと笑顔を作つて挨拶をしながらではならないのだから。何か粗相でもしようものなら、後で長いお説教が待ってるし。

「パーティー、嫌いななの？」

「……あんまり好きじゃないの。おとぎ話に出てくるような、楽しいパーティーじゃないから。お客さんもお父さんの会社関係の人ばかりだし」

パーティーの間じゅうずっと、ミスをしないように、お父さんを怒らせないように、そればかり考えているから、終わった後はいつもぐったり疲れてしまう。

「イライザの気持ちに関してはわかったけど……結末に関しては？」

あ、そうだった。もともとはどちらの結末がふさわしいのかという話よね。

「この作品を『シンデレラストーリー』として考えると、イライザが結ばれるべき相手はヒギンズ教授じゃないんじゃないかしら」

ヒギンズ教授はイライザをお姫様にしてくれる人だ。男性だから……『チエネレントラ』のアリドーロが一番近いのかな？ 設定ではあの人、おじいさんよね。わたしが見た舞台では、ずいぶん若い人が役をやっていたけど。

「つまり……フレディと結ばれるべきだと？」

「ええ」

フレディはパーティーで出会ったわけではないけれど、綺麗になったイライザを見て一目惚れするのだから、多分、王子様に近いのだろう。

「なんで？」

「え？」

鏡音君が強い調子でそう訊いてきたので、わたしは驚いてしまった。……どうしたんだろう？ こんな声滅多に出さないのに。わたし、何か怒らせるようなこと言った？

少し混乱してしまったけれど、わたしは必死で考えをまとめようとした。

「だって、ヒギンズ教授はドレスを着せてくれる人でしょう？ シンデレラにドレスをくれたのは、お母さん代わりの妖精か、死んだお母さんの魂だわ。……だから、教授は彼女の保護者だと思うの。

年齢だって離れてるし……」

お父さんの代わり……なのかも。イライザのお父さんは、イライザのことをどうとも思っていないし。

「だってフレディって、何の役にも立ちそうにないじゃないか。確か定職ついてなかっただろ、あいつ。そんな甲斐性なしと一緒になっても、幸せにはなれないんじゃないの？」

鏡音君はきつい口調でそう言った。役に立ちそうにないって……。確かにタクシー捕まえられなくて、母親と妹に呆れられたりしているけど……。どうしてそんなにフレディが嫌いなんだろう？

あ、でも、フレディが嫌いってことは、わたしに怒ってるんじゃないのかな？

「でも……好きって言うてくれたわ」

イライザにそんな言葉を言うてくれた人なんて、きつと今までいなかっただろう。

「それがそんなに大事？」

「大事なよ……少なくとも、イライザにとっては」

だって、ちゃんと言葉にしてくれないと、わからないもの。教授がイライザに投げかける言葉って、ひどいのばかり。ドブに戻れとか、腐ったキャベツの葉でできているとか、そんなことばかり言い続ける。

「ずっと腐ったキャベツと同じ扱いなんて、わたしだったら耐えられないわ。どんなに頑張っても、ちゃんとした褒め言葉すらもらえないんだもの」

わたしのお父さんもそう。いくら頑張っても、まだ努力が足りないって言い続ける。ルカ姉さんみたいにトップの成績を維持できれば違うんだろうけれど、わたしにはそこまでの力は無い。

そんなにわたしの努力は足りてないの？ わたしは精一杯、やっているのに……。

「でもさ、ずっとイライザを見てくれたのは教授の方だぜ。イライザが汚い言葉づかいだった頃からさ。フレディなんて、綺麗になったイライザが広場で出会った花売り娘と同一人物だって、気づいてすらいなさそうだし。そんな上辺しか見てないような奴はやめておいた方がいいと思うんだ」

それはそうだけど……でも……。ずっと、このままなの？ ずっと、同じことを言われ続けるの？ パーティーにいた色んな人たちは、イライザのことを外国の王女様かもって噂するぐらいになったのに。教授にとってはずっと泥まみれの花売り娘と一緒に。

「でも、腐ったキャベツって言われるのは嫌なの！」

「だからそんなこと言わないって」

「教授はずっとやめてくれないじゃない！」

最後までずっとあんな調子だ。せめて一言でも「良く頑張ったね。君はもう立派な貴婦人だよ」って言うてくれたら、イライザの気持ちだっけ報われたのに。気にしてるのはスリッパのことばかり。そもそもどうしてスリッパなんだろう。もしかしてやつぱり童話の『千匹皮』と引っ掛けてあるんだろうか。

「しょうがないよ、あの人ある意味じゃお子様なんだから」

不意に、鏡音君がそう言った。……え？

「お子様って……」

「だからさ、ヒギンズ教授って人は大人になりきれてないの。多分どこかで成長が止まってるんだよ」

どこかで成長が止まっていると言われても……。

「ついでにさ、あの人は変なところでプライドが高いから、目の前にいるイライザのことをちゃんと認めてあげられないんだよ。イライザのことをいつまでも花売り娘ってバカにしてるけど、家のあれこれを任せてたってことは、本当は信頼してたってことだろうし」

鏡音君の言いたいことは、何となくわかった。でも……それじゃあイライザはいつまで立つても報われないんじゃないの？ だって欲しいものはもらえないんだから。

「言いたいことはわかるけれど……じゃあ、この後はどうしたらいいの？」

わたしがそう訊くと、鏡音君は考え込んだ。

「イライザの方が大人になるしかないんじゃない？ ああ、この人はお子様なんだ、わたしが世話を焼いてあげなくちゃ、って感じで教授の首に手綱でもつけてしっかり握るしか」

それが、鏡音君の答えだった。イライザの方が大人になるって……

……。結局、我慢し続けるということ？

「イライザはずっと我慢しなくちゃならないの？」

「我慢とはちょっと違うと思う。要するに、イライザの方が主導権握って上に行くってことだから。案外あの人が、甘やかされると弱い

んじゃない？」

わたしはその状況を考えてみた。……それはやっぱり淋しいと思う。イライザは誰かの上に立ちたいんじゃないわ。

「……わたしだったら、やっぱり耐えられない」

「なんで？ フレディなんてやめようよ。あんなおつむの軽い男と一緒にになったら、一生、中身のある話はできないぜ。将来性も無いし」

イライザが欲しいのは、愛に包まれた幸せだ。主導権がどうか、そういう話じゃないの。

「イライザは愛されたいのよ。話がどうのとかの問題じゃないわ」

「そんなもつたいない」

「愛をほしがったらそんなにいけない？」

愛してほしいっていうのは、そんなに大それた願いなんだろうか。わたしの目の前で、鏡音君が困った表情になる。

その時、鏡音君の携帯が鳴り出した。

「ごめん、ちょっと待ってて」

鏡音君はそう言って、携帯を取り出して確認している。わたしはぼんやりとそれを眺めていた。やがて用事が終わったらしく、鏡音君は携帯を閉じた。

「急用？」

ちよつと心配になったので、わたしは訊いてみた。

「いや、大した用事じゃないよ。それで、話戻すけどさ、教授が駄目だからフレディってのは、やっぱりちよつと違うと思うんだよ。それって逃避だろ」

逃避……。

「そんなのわからないわ。だってフレディはイライザに長いラブレターを送っているもの。イライザはそれでフレディを好きになったのかもしれないじゃない」

手紙というのは手元に残って何度でも読み返せる。ある意味、ただの言葉よりずっと嬉しいんじゃないかなしら。

「それに、演出一つで、フレディをもっと感じ良くすることもできるんじゃないかしら？ オペラとかでも、時々そういうことがあるのよ」

舞台というのは、演出によって全然違う雰囲気になってしまう。相手をなじる台詞でも、その相手にぴったり寄り添って口にしたら、全然雰囲気が変わってきってしまうもの……よく考えてみたら、大体どんなオペラでもそうよね。演出が失敗していて、何なのかよくわからないこともあったりするけど。

「それなら逆も可能だろ？ ヒギンズ教授をもっと感じ良くすることだって」

「それは……そうだけど……」

どうして鏡音君はこの二人にこだわるんだろう？ わたしにはわからない。わたしは無言で、しばらく机の表面を眺めていた。鏡音君も黙ってしまう。

そうやって二人して黙り込んでいると、不意に、教室のドアが派手な音を立てて開いた。

「あーっ、いたいた！ って、鏡音先輩、どうして巡音先輩と一緒になんです！？ もしや部活サボってデートですか！？」

あれ……グミちゃんだ。え？ 鏡音君、今日部活だったの？ 驚いているわたしの前で、グミちゃんは教室の中に入ってきた。その後ろから、数人の生徒が入ってくる。あ、ミクオ君と躍音君もいるわ。ということとは、みんな演劇部の子たちなんだ。

「鏡音君、部活サボったって……」

もしかしてわたしが、放課後時間あるかなんて訊いたせい？ どうしよう……。

「いや、グミヤに遅れるって連絡はしておいたんだよ。演劇部の為の話し合いなんだから、こっちを優先しただけ」

「でも……」

わたしがこんなこと言い出さなければ、鏡音君は部活に行ってたのよね。なんでわたしはいつもこうなのかしら……。

「おい、グミヤ。これは一体何の真似だ。俺は、演劇部の次回公演の決定の為に話し合うから、部活に行くのは遅れるってメールしたよな。なのになんで押しかけて来たんだ」

わたしの前で、鏡音君は躍音君を問い詰めている。それに答えて演劇部の子たちが色々と言い出していたけれど、わたしはほとんど聞いていなかった。

……帰ろう。わたし、部外者だもの。わたしは通学鞆を手につけて立ち上がった。あ、でも、無言で帰っちゃまずいかな……。

わたしは鏡音君の方を見た。演劇部のみんなの方を向いた状態で、何か話している。

「あの……わたし、帰るね」

一応、口に出してそう言う。……でも聞こえてないみたい。仕方ないか。わたしはそっと教室を出た。

……淋しいな。

愛される権利（後書き）

個人的にはリンに着せるのでしたら（この作品内の年齢ぐらいに成長していることが条件ですが）、『マイ・フェア・レディ』のドレスより、『泥棒成金』でグレース・ケリーが着ているドレスの方がいいです。

ドレスもいいけど、ドライブのシーンで着ているピンクのツーピースも可愛いんだよね……。どなたかイラスト描いてみませんか（こんなんばっか）

ガラテアはピグマリオンに恋はしない

下駄箱まで来て、靴を取り出そうとした時、わたしは運転手さんにメールを送っていないことに気がついた。あ……しまったな。しばらく、お迎えを待たないといけない。

わたしはため息をつくとき、鞆を開けて携帯を探し、メールを送信した。その時だった。

「良かった……まだいたんだ」

「え……？」

わたしは驚いて、声が聞こえた方を見た。鏡音君が立っている。走ってきたらしく、息があがっていた。え……追いかけてきたの？
なんで？

「……鏡音君、どうして？」

「勝手に帰らないでくれよ」

あ、きちんと話さずに教室を出たのはいけないかったわよね。……わたし、また、逃げちゃったんだ。逃げるのはいけないことなのに。「……ごめんなさい。でも、わたし、部外者だし……あの場に残っていたらおかしいかと思って」

鏡音君は、わたしの前で首を横に振った。

「そんな気回さなくていいから。押しかけてきた向こうが問題なんだし」

どうしよう。また気を使わせてしまったみたい。もう心配かけないようにしなくちゃって、考えていたのに。

でも……どうしてかな。鏡音君が追いかけてくれたことを、少し嬉しいと思うてしまう自分がいる。駄目だつてば、そんなことを考えちゃ。わたしの個人的な感情で、鏡音君を振り回したらいけないの。

「でも……部活があるんでしょ？」

鏡音君と話していると、気づかされることが多くて、とても楽し

いけれど……でも、邪魔はしたくない。

「いやだからさ、部活動を円滑に進める為には、次の作品を早く決定することが大事なんだよ。でもって、内容をちゃんと理解していない状態で、上演の準備なんてできないだろ。だからこの話し合いは大事なことなんだ。なんか、グミヤに上手く伝わってなかったみたいで、妙なことになっちゃったけど」

それはそうかもしれないけど……。

「そういう話なら、演劇部の人たちとした方がいいと思うの。何もわたしじゃなくても……」

他の人たちの都合だってあるわよね。わたしじゃなくてもできるはず。

「巡音さんじゃないと駄目なんだよ」

鏡音君は妙なことを言い出した。

「どうして？」

「……どうしても」

それが答えだった。わたしじゃないと駄目って……。けど、『ピグマリオン』を推薦したのはわたしよね。乗れる限り相談に乗るのが、わたしの義務かも……。

あ、でも……お迎え、頼んじやったのよね。

「あの、わたしさっき、お迎えを頼んじやったの。だからそんなに時間無いけど……それでもいい？」

「……いいよ」

鏡音君の答えに、ちよつとほつとした。

「じゃ、中庭でも行こうか」

そう言われたので、わたしは頷いた。ここにずっと立っているわけにも行かないし。中庭なら、校門からは見えないからちょうどいい。わたしたちは中庭に向かうと、置いてあるベンチに並んで座った。

「じゃ、話を整理しようか。イライザは愛がほしい。だから愛をくれない教授ではなくフレディを選んだ。けど、フレディはヘタレで、

イライザを幸せにできるような甲斐性があるとは思えない。そういうことだったよね」

「……ええ」

鏡音君、どうして甲斐性にこだわるんだろう……？　わたしがお嬢様で、生活の苦労とかを良くわかってないせいなのかな……。

「一方、教授はガキだから、面倒を見てくれる人が本当は必要。けど、優秀すぎる上にプライドが高いから、並のレベルの相手だとたたき出されてしまう。イライザは頭がいいから、教授が相手でもやりこめることも可能で、教授の相手としては理想的。でも、教授は変人だから気持ちを素直に口に出せない」

わたしは、戯曲の最後の方を頭に思い浮かべた。教授は自分なりのやり方で、イライザを賞賛する。でも、そういうのはイライザの求めているものじゃない。

「わたしは、イライザが選ぶのはフレディだと思う。魂を手に入れたガラテアは、もうピグマリオンのものじゃないのよ」

わたしは上を見上げた。青い空が広がっている。

「だってもう自由なもの。どこへだって飛んでいけるわ」

イライザが羨ましいな……。わたしには無理だ。

「けどさあ、やっぱりフレディじゃなくていいんじゃない？」

鏡音君はまたそう言い出した。疑問に思ったので、訊いてみることにする。

「どうしてそんなにフレディが嫌なの？」

「ヘタレの役立たずは嫌いなんだよ」

それが答えだった。どうしよう……。このままじゃ堂々巡りだ。わたしが困っていると、鏡音君が何かに気がついたような表情になった。

「巡音さん……フレディと一緒にになったら幸せにはなれないよ」

「え……どうして？」

「巡音さん、フレディのことを『シンデレラ』における王子のようなものだって言ったよね。でも、作者の意図がそうなら……もっと

無条件でいい男にするんじゃない？ ヘタレの役立たずじゃなくてさ」

そういう風に考えたことはなかったの、わたしは驚いてしまった。確かに、作品の中でフレディはずっとぼやっとしている。愛情だけは、たくさんあるみたいだけど。

「で、でも……じゃあどうして、フレディを選ぶエンディングなの？」

「一見ハッピーエンドに見えて、実のところそうではない……そういうラストを演出したかったんじゃない？」

鏡音君はそう答えた。一見ハッピーエンドに見えて、実際は違う？ そう言えば、そんな内容のオペラがあった。幸せそうなラストなのに、その先の幸せがどうしても見えてこない、そんなオペラ。何故だか、寒気がしてきた。

「けど、大掛かりな舞台になると、そういう毒気って受けないんだよね。だからミュージカルにする時に、結末を書き換えたんじゃないかな」

じゃあ、何をやってもイライザは幸せにはなれないの？ そんなのってないわ。イライザがかわいそう。あんなに頑張ったのに。

「あの……巡音さん？ 大丈夫？」

鏡音君にその声をかけられて、わたしは現実を引き戻された。

「ごめんなさい。イライザのこと考えていたら、のめりこみすぎちゃったみたい。結局、イライザに幸せは来ないのかなと思っていたら、悲しくなってきた」

駄目だな……ここにいるのはわたしだけじゃないんだから、あんまり考えすぎないようにしないと。

「幸せ不幸せなんて気の持ちよう一つなんだからさ。フレディを選ぶにせよ教授を選ぶにせよ、イライザの頑張り一つで案外何とかなるかもしれないよ。どうせそこから先は書かれてないんだし」

鏡音君はそう言ってくれた。やっぱり、わたし、落ち込みすぎたのね。どうしてこうなのかな……。わたしの方こそ頑張らなくて

や。

「……ありがとう」

わたしがそう言うと、鏡音君は安堵したようだった。これ以上は気を使わせないようにしないと。

「それで、結末のことだけど……」

鏡音君がそう言いかけた時、わたしの鞆の中の携帯が鳴り出した。「ごめんなさい、携帯が鳴ってるの」

わたしは鞆から携帯を取り出した。あ……運転手さんから。お迎えに来たのね。

「……お迎え？」

鏡音君が訊いてきたので、わたしは頷いた。

「ええ。……ごめんなさい、話の途中なのに。でも、わたし、もう帰らないと」

「いや、いいよ。『ピグマリオン』のこととか、今日のこととか、色々助かった」

でも……まだ、完全に話がついたわけじゃないのよね。

「あの……鏡音君、明日は時間ある？」

やっぱり結論が出るまで話した方がいいような気がしてきた。今日はもう駄目だけど、明日なら……。

「巡音さん、明日は第二土曜だから、学校は休みだよ」

……忘れてた。うちの学校は私立だから週休二日制は採用していないのだけれど、第二土曜だけは休みということになっている。

「俺としては、外で会って話してもいいけど……巡音さんは大丈夫？」

わたしは頷いた。何とかしよう。

「……どこで会うの？ また鏡音君の家とか？」

「ごめん、俺の家は無理。姉貴は土曜は仕事なんだよ。あれでも一応俺の保護者だから、姉貴の留守中に勝手にお客さん呼ぶわけにはいなくって」

あ……そうなんだ。それじゃあ仕方ないか。でも、わたしの家に

鏡音君を呼ぶのは無理だし……。どこか適当な場所……。

「鏡音君、柳影公園って知ってる？ 大きめの都立公園なんだけど」
柳影公園は、わたしの行きつけの図書館の近くにある公園だ。あそこなら、また図書館に行くことにして、抜け出せばいい。

「知らないけど、調べられると思う。そんな大きい公園なら、簡単にわかるだろ」

そう言ってくれるんなら、大丈夫かな……？

「そこが いい の？」

「……ええ」

わたしは頷いて、それから、あの公園はかなり広いので、待ち合わせ場所を決めておく必要があることに気がついた。どこならいいかな……。あそこがいいかも。

「その公園、ボート乗り場があるの。その前に朝の十時でいい？」
ボート乗り場なら目立つから、初めて来ても多分、すぐにわかるわよね。

「わかった。じゃ、朝の十時にそこで待ってるよ」

「ありがとう。それじゃあ、わたしはもう行かなくちゃ」

わたしは鏡音君に手を振って、校門へと向かった。

ガラテアはピグマリオンに恋はしない（後書き）

気がつけば三十話……。

……しかもカップルにすらなっていない。

書いていながら言うのもあれなのですが、この二人、くつついて
上手く行くんでしょうか……。

クオの不満

ミクが「レンと巡音さんをくつつけよう」と言い出したのは、十月の頭のことだった。それから一ヶ月ちよつとが経過した現在、事態は妙なことになるてきている。

もともと俺は、この作戦に乗り気じゃなかった。レンとは確かに仲がいいが、他人の色恋沙汰になんか興味は無い。それに、どう見てもレンは巡音さんに興味は無さそうだった。

それがどういいうわけか、一ヶ月ほどのうちに、二人はすっかり仲良くなっていた。つまり……ミクの作戦だか読みだかが当たったということだ。……ああ面白くない。なんで成功するんだよ。

まあ、単に仲良くなっただけならいい。俺だって、別に友人の幸せを祝福できないほど狭量なつもりもないし。ただどレンの奴は何を思ったのか、演劇部の次回公演の作品を決める為の相談相手に、巡音さんを選んだ。その結果が『マイ・フェア・レディ』だ。なんであんなオールドなラブコメやらなくちゃいけないんだよ。あの子に相談なんかするからだ。

俺が文句を言っていると、グミヤに「そんなに不満なら、一週間以内に代わりの作品探してこい」みたいなことを言われてしまった。グミヤの言っていることはもつともなんだが、俺は文学作品を読もうとすると五分で寝てしまう。……どちくしょう。

イライラしながら俺が帰ろうとしていると——ちなみに、グミヤとレンはもう帰ってしまった——一年のクオが俺に声をかけてきた。「初音先輩、ちよつといいですか?」

「なんだよ」

思わずクオを睨む。今の俺は気が立ってんだ。クオが怯えて後ずさる。

「そ、そんな怖い顔しなくてもいいじゃないですか」

「とつとと用件を言え」

コウはしばらく迷っていたが、やがて口を開いた。

「鏡音先輩と話をしていた先輩のことなんですけど……」

「巡音さんがどうかしたのか？」

「あの……初音先輩、あの先輩がどういう人なのか知ってますか？
鏡音先輩にも訊いてみたんですけど、同じクラスの友達という
い加減な返事しか返って来なくて……」

だからって何で俺に訊くんだよ。レンと親しいから、交友関係に
も詳しいとも思われてんのか？

「あいつの言うとおり、同じクラスの友達。でもって、いいこの
お嬢様」

ミクの幼馴染でもあるけどね。

「そうなんですか……綺麗な人ですよ」

ぼへーっとした顔でそんなことを言うコウ。あれ？

「お前、気があるの？」

「え……そ、そんな……」

コウはうつむいてもじもじし始めた。女の子がこれを見ると可愛
かったりするが、男のこいつにやられても、なんだかいらっとくる
だけだ。

それにしても惚れっばいな、こいつ。演劇部に入った当初は蜜音
を追い掛け回して張り倒され、その後は三年の涼音先輩に迫って拒
絶され、更にその後は何をとち狂ったのかミクを紹介してくれと俺
に言ってきた——もちろん、きっぱりと俺が断った——んだよな。
で、今度は巡音さんねえ。見境つつーものが無いんだろうか。

その時。俺の頭に、ふっと意地の悪い考えが湧いた。

「いーんじゃないの？」

「え？」

「だからさ、気になるんならアタックしてみればいいじゃん」

「ア、アタックって……」

「お前さあ、押しが弱いんだよ。だから蜜音にも涼音先輩にも相手
にされなかったの」

ふ、我ながら適当なことを言ってるぜ。まあでも、こいつが巡音さんに迫ったら面白いかも。

「グミを見るよ……いつの間にか、押しの一手でグミヤをものにしたろ。お前も見習え。あの子優柔不断っぽいから、強く迫れば落ちるかもしれないぞ」

「で、でも、どうやって……巡音先輩は演劇部じゃないですし」

「それくらい自分で考えろよ」

頭悪いのか、こいつは。

「頑張れ」

……骨ぐらいは拾ってやるからさ。

俺はイライラしたままで帰宅した。居間に行くと、ちょうどミクがテレビを見ていた。今日は動物番組か。ミクはこの手の番組も好きなんだよな。……実は俺も好きだったりするけど。なんだよ……俺が動物もの好きじゃ悪いか？　だが今日は機嫌が悪いので、ミクと一緒にのんびりテレビを見る気にはなれない。

「あ、お帰りクオ。……どうしたの？」

ミクはテレビの音量を下げると、そう訊いてきた。……なんだよ。……別に」

そう答えると、ミクはむっとした表情になった。

「部活で何かあったの？」

とはいえ、ぎゃーぎゃー怒鳴りはせずにそう訊いてきた。ミクでも気を遣えるんだな。

俺はため息混じりに、ソファにどさっと座った。

「演劇部じゃさ、四月に新入生歓迎公演をやるんだよ。うちの部、今年から顧問が変わって、新しい顧問ってのが変な趣味で、『どうせやるなら格調高い文学作品をやれ』とか言い出しやがって」

あ、顧問が文学作品をやって言い出した話は前にもしたかも。まあいいや。先を続けよう。

「で、うちの部でまともに文学作品を読んだことがあるのってレンぐらいで、それでグミヤが作品探してくれてレンに頼んで、そうしたらレンの奴、作品を決めるのを巡音さんに相談しちまって」

ミクは首を傾げている。……はいはい、どうせお前は喜んでるんだろつよ。これで二人の親密度がアップしたわくつて。

「それでレンの奴、新入生歓迎公演の作品を『マイ・フェア・レイディ』に決めやがったんだよ」

「『マイ・フェア・レイディ』になったんだ……ちよつと残念かも」
それが、ミクの返事だった。……へ？ ミク、お前、ラブコメ大好きだろ。てつきり「もう、クオ！ 素敵じゃないの！ それがわからないなんて、クオってば朴念仁！」とでも言い出すかと思ったのに。

「お前、残念つて……」

何がどうなつてるんだ？

「だって『マイ・フェア・レイディ』つて、男性キャラクターがあんまりかつこよくないでしょ？ 主人公の教授とその友人の大佐はいい年したおじさんだし、若いお坊ちゃんも頼りなさ過ぎてかつこよさとは無縁なんだもの」

ミクはそんなことを言い出した。かつこよさとは無縁ねえ……あれ？ あれつて、そもそもどういふ話だったわけ？ ラブコメで、オードリー・ヘップバーンが花売り娘から貴婦人になるってコンセプトしか憶えてない。

「どうせならかつこいい男の人がでてくる舞台を見たいのよねえ……」

……

そんなことをしみじみと言うミク。ため息がでてくる。

「お前は演劇部の舞台に何を期待しているんだよ」

「クオがかつこいい役をやってくれること」

えっ……。いきなり何を言い出すんだお前は。不覚にも……ちよつとどきつとしたぞ。

「クオだって、かつこいい役やりたいでしょ？」

「学祭の時はかつこよかっただろ」

優秀に作られたが故に、造物主である人間に反旗を翻すロボットのリーダー役、というのは、充分かつこいいと思うんだがなあ。

もっとも、ミクの表情を見る限り、ミクはそう思っていないようだった。……ちつ。

……まあでも、ミクがこんなことを言ってくれたおかげで、イライラは収まった……かな？

クオの不満（後書き）

途中で出てくる一年生の男子はオリジナルキャラです。

ちなみに、作中にあんまりまともに出て来ない設定ですが、クオは理系です。リン、レン、ミクの三人は文系。

もっとも、これを書いている私はバリバリの文系頭なので、理系キャラの思考は上手に書けません。だから設定が作品に反映できてないんだよなあ……。

これと結婚するの？

その日の夕食は、ルカ姉さんも一緒だった。朝と同じで、やっぱり平然としている。わたしを叩いたことは、ルカ姉さんの中でどうなっているんだろう？

どうしよう。ルカ姉さんと話をしてみよう？ それともやめておく？ どちらを選んだらいいのか、しばらく考えてみる。

……やっぱり、このままにはできないわよね。話をしよう。でも、どんな風に？

わたしは食事をしながら、ルカ姉さんとどうやって話をしたらいいかを考えていた。わたしが話してもどうにもならないかもしれないけれど、やるだけのことはやってみよう。

わたしはなるべく急いで食事をした。いつもより早いペースなので、お母さんが怪訝そうな表情をしている。ごめんなさい、お母さん。普段どおりのペースだと、ルカ姉さんはわたしより先に食べ終わって、さっさと食堂を出て行ってしまうの。ルカ姉さんと一緒に食べ終わって、食堂の外に出たところを捕まえなければいけないから。お母さんの前で、ルカ姉さんとは話をしたくない。またルカ姉さんがわたしを叩いたりしたら、お母さんを心配させてしまうもの。わたしは意図どおり、ルカ姉さんとほぼ同じ頃に食事を終えた。

ルカ姉さんが「ごちそうさま」と言って、席を立つ。わたしも「ごちそうさま」と言って席を立ち、ルカ姉さんの後を追いかけた。

ルカ姉さんは階段を上って行く。わたしは階段を駆け上がって、ルカ姉さん呼び止めた。

「待って、ルカ姉さん！」

ルカ姉さんが立ち止まって、振り向いた。

「何？」

こっちを見るルカ姉さんの瞳が、なんだか怖い。いつもと同じなんだけど……。わたしは深く息を吸い込んだ。

「あのね……やっぱり、おかしいと思うの」
「何が？」

「ルカ姉さんの結婚のこと……。ルカ姉さん、本当に神威さんと結婚したいの？」

「リンには関係ないわ」

それが、ルカ姉さんの答えだった。

「関係あるわ……だって、ルカ姉さんと結婚したら、神威さんはわたしの義兄さんになるんだから」

あまり考えてこなかったけれど、そういうことだ。多分、この家で一緒に暮らすことになるのよね……。どうにも実感が無いのだけだ。

「だから？」

落ち着いた口調で、ルカ姉さんが尋ね返す。……わたしの方が悪いことをしているような、そんな気分になってくる。駄目よ、ここでくじけたら。

「……ルカ姉さん、本当に神威さんでいいの？ 神威さんのこと、どう思っているの？」

「神威さんはいい人よ。私も嫌いではないし」

やっぱり……「嫌いじゃない」なんだ。ルカ姉さんが神威さんへの気持ちを隠す必要は無いから、好きってほどじゃないか、無関心に近いのね。

「好きじゃない人と結婚するの？」

「嫌いではないのよ」

一瞬、髪をかきむしりたい衝動に襲われる。わたしはそれを必死で我慢した。きちんと話さないと、ルカ姉さんには通じない。

「『嫌いじゃない』から『結婚しても構わない』の？ おかしいわ、それって。結婚するのはルカ姉さんなのよ」

「リンには関係ないんだから、口を出さないで」

わたしは、もう一度大きく息を吸い込んだ。

「結婚は一生のことだわ。ルカ姉さん、そんな気持ちで結婚してい

いの？ だって神威さんのことが好きってわけじゃないし、結婚したいわけでもないんでしょう？ 結婚に対する希望がないって、そういうことよね？」

ルカ姉さんはやっぱり平然としている。……もう通じないのかな。でも、やっぱり、訊くだけは訊いてみよう。

「ルカ姉さん、何から逃げているの？ わたし、ルカ姉さんの本当の気持ちを知りたい。ルカ姉さんはどうして『お父さんに逆らわないいい子』を続けてきたの？ それが、ルカ姉さんの本当にやりたかったことなの？ わたしだって、話を聞くぐらいのことならできると思うし……」

「リン！ 何をやっている！」

階下から聞こえてきた怒鳴り声に、わたしはびっくりしてそつちを見た。……どうしよう、お父さんだ。ルカ姉さんともめているうちに、帰宅していたみたい。嫌だ、なんで今日に限って帰りが早いのか？

「お、お父さん……」

お父さんは階段を上がってきて、わたしを睨んだ。

「お前は、ルカに意見する気か」

「そういうわけじゃ……」

「みたいね」

わたしを遮り、ルカ姉さんはお父さんの言葉に肯定の意を示した。ルカ姉さん……。

「いつからそんなに偉くなったんだ」

お父さんの声がいつもより低い。

「そういうつもりじゃないの。ただ、わたしは……」

「リンは私が心配だと言うの。私が本当は結婚したくないんじゃないのかなって」

ルカ姉さんはまたわたしを遮って、淡々とした口調でそう言った。怒っている気配が無いのが、逆に怖い。

一方、お父さんの目は更に陰しくなった。まずい。本気で怒って

いる。わたしは、その場から消えてしまいたかった。もちろん、そんなことはできないのだけれど。

「リン、お前は一体、何を考えている？」

「……ルカ姉さんのことが心配だったの。結婚式を控えているのに……全然幸せそうじゃないし」

わたしは下を見ながら、何とかそう口にした。次の瞬間、お父さんの怒鳴り声が響き渡る。

「お前に何がわかるというんだ!？」

「だ、だって……ルカ姉さん、どう見ても……」

「黙れ!」

怒鳴られて、わたしは反射的に口をつぐんだ。

「リン、ちょっと書斎に來い。ああ、ルカ。お前は部屋に戻ってていいぞ」

暗い気分で、わたしはお父さんの後について書斎へと向かった。死刑を求刑されている被告人は、こんな気持ちで法廷に出向くのだろうか。

「全く……お前という子は。あんまりこっちの手を煩わせるんじゃない!」

書斎に入るやいなや、お父さんのお説教が始まった。わたしはうつむいて、自分の足元を見る。お父さんと視線はあわせたくない。

「大体お前は何がしたいんだ」

「……ルカ姉さんの本心が知りたかったんです。本当に神威さんと結婚したいのかどうか。

「ルカが幸せになるのがそんなに気に入るのか」

あんな状態で結婚しても、ルカ姉さんは幸せになれないと思います。だって自分の結婚式なのに、他人事みたいなんだもの。そもそも、ルカ姉さんは結婚するのに全然嬉しそうじゃないわ。お父さんはどうして、ルカ姉さんが幸せになるって思えるの？

「ガクトさんは名家の息子だし優秀な人だ。ルカと結婚したいと言ってくれているし、婿養子の話も承知してくれた。我が家にとって
は申し分の無い婿なんだぞ」

それはお父さんの都合でしょう？ この家って、そんなに存続が
必要な家なの？ それに、ルカ姉さんが社長を継いだっていいんじ
やない？ 神威さんじゃなくて。

「お前はその話を潰す気か」

あの状態のルカ姉さんと結婚したら、結婚する方も不幸になっ
ちゃうんじゃないのかな……。だったら、潰れた方がむしろいいん
じや……。

「リン、聞いているのか！？」

「……はい」

頷く。一応聞いてはいる。聞いているだけ。

「なんだその生返事は！ お前は、親をバカにしているのか！？」

お父さんの怒号が書斎に響き渡る。わたしは思わず肩をすくめた。

……気分が、悪くなってきた。

「こっちはお前の為を思って言っ
てやってるんだぞ！ わかってい
るのか！？」

何をどうわかったらいいんだろ
う。わたしの為っていつも言っ
けど……どう為になっているの？

「親の話はちゃんと聞くものだ！」

だから聞いてます。聞いている
だけだけど。だって全然理解で
きないし。

「全くお前といいハクといい、
面倒ばかり起こして……苦勞して
育てやった結果がこれか」

わたし、そんなに面倒ばかり起
こしているの？ ちゃんと学校に
も行っているし、ルカ姉さんほ
どじゃないけど、一定の成績を
取っているのに。門限だって守
ってるし……。

「力エがお前のことを甘やかす
からこうなるんだ」

お母さんのことを悪く言うのは
やめてよ。

「本当にあいつときたら……ろくなことを言いやしない。ハクのことだって、あいつがうるさく言うからあの高校に行かせたんだぞ。その結果があれだ」

お父さんはそのまま、お母さんに対する不満を延々喋り始めた。耳を塞ぎたい衝動にかられたけれど、そんなことをしたらもつと怒ってしまうだろう。

お父さんの説教は、長々と続いた。ほとんどはわたしが至らないとか、お母さんがわたしを甘やかしたからだとか、そういったこと大声でずつと怒鳴り続けるので、説教が終わる頃には、わたしは頭がくらくらしていた。

「……で、リン、言うことは!？」

えっと……何を言えいいんだっけ……? とりあえず、謝ればいいのよね……。お父さん、いつもそうだから。

「……ごめんなさい」

「それだけか!？」

あ……あれ、これだけじゃ駄目……? 他に何を言ったらいいんだろう?

「リン!？ お前、ふざけてるのか!？」

ふざけてはいないんだけど……お父さんのお説教、長すぎて……何を言われているのかわからなくなってしまった。

「ふざけてないわ……ただ、何を言えいいのかわからなくなっただけで……」

「……お前はバカか!？」

今まで以上の勢いで怒鳴られた。……耳が痛い。

「状況をちゃんと理解していないのか!？ これだからデキの悪い子供は困る」

「……ごめんなさい」

よくわからなかったけれど、わたしはもう一度謝った。

「とにかく、もうル力を困らせるようなことを言うんじゃない!」

え……ちょっと待って。わたし、諦めるわけには……。

「リン、返事はどうした返事は！？ お前は、耳まで悪くなったのか！？ とにかく返事をしろ！」

「それは……ちょっと……」

いきなり、派手な音が響いた。お父さんが、机の上の文鎮を投げつけたのだ。わたしにはなくて、壁にだけれど。文鎮が当たったところに、傷ができています。

あれ……壁じゃなくて、わたしに当たっていたら……。わたしは床の上にへたり込んでしまった。……吐きそう。

「いつまでも聞き分けの悪いことを言うんじゃない！ わかったな！？」

「……はい」

「それから、明日と明後日は外出禁止だ」

「……はい」

「わかったらとっとと出て行け」

「……はい」

わたしはぼんやりとした状態でお父さんの書斎を出て、自分の部屋に戻った。気分がひどく悪い。少し横になろう。ベッドに横になって、目を閉じる。

……まだ、耳の奥で、お父さんの怒鳴り声が響いているような気がする。……忘れよう。忘れなくちゃ……。

これと結婚するの？（後書き）

【わたしには姉さんがわからない】の、ミクの台詞に賛成の方は拳
手をお願いします。

どうしても影がほしいの

その次の日。わたしは鬱々とした気分で目を覚ました。時計を見る。結構早いな……いつもより早いぐらい。学校の支度……あ、今日は第二土曜だから、学校は無いんだっけ。

あれ……？ 意識に何か引つかかっているな……？

首を軽く横に振りながら、わたしは身体を起こした。いやだ、わたししたら服のままで寝ちゃったみたい。昨夜あったことを思い返す。確かお父さんに長時間に亘るお説教をされて、それでひどく気疲れて、部屋に戻ったらそのまま眠ってしまったんだ。当然、お風呂にも入っていない。

わたしはそつと廊下に出てみた。早い時間だから、まだ誰も起きていないみたい。もう一度部屋に戻ると、着替えの服と下着を取り出して、お風呂場に向かう。お湯は冷めているだろうけれど、せめてシャワーぐらいは浴びておきたい。

熱いシャワーを浴びると、気持ちが少しだけすっきりした。わたしは昨日の服とバスタオルを洗濯籠に入れると、自分の部屋に戻った。朝食まではまだ時間がある。……音楽でも聞こう。CDの棚からクープランのCDを取り出して、プレーヤーにセットする。

クープランの作る曲は色々あるけれど、わたしは可愛い感じの曲が好きだ。ずっと昔のバロック時代の作曲家の曲に「可愛い」というのも、ちょっと変かもしれないけれど。うーん……それにしても、やっぱりさっきから、何かが頭の中で引つかかっている。何だろう……？

どうにもすっきりしない気持ちのままに時間が過ぎて、朝食の間になった。小さなため息をついて、プレーヤーを止め、部屋の外に出る。食欲はそんなに無いけれど、食べないと……。

食堂に行ってみると、お母さんしかいなかった。お父さんはまだ寝ているのかな。

「おはよう、お母さん」

「おはよう」

お母さんの表情は心配そうだ。昨日の音が、聞こえていたんだろう。

「リン、大丈夫なの？」

「やっぱり。」

「……多分」

「怪我とかは？」

「……してない。壁が傷ついただけ」

お母さんはため息をついた。……わかってます。お父さんを怒らせるようなことをした、わたしが悪いんだ。

「お母さん、お父さんは？」

「仕事関係で遠出するとかで、今日はもう出かけて行ったわ。ルカも一緒よ」

お父さんは家にいないんだ……。わたしは幾分落ち着いた気分で、椅子に座った。お手伝いさんが、朝ごはんを運んでくる。

「いただきます」

少なくとも、今日は安心して朝ごはんだけは食べられそうだ。

「リン、お父さんが、今日と明日は外出禁止だって」

そう言えば、昨日そんなことを言われたような気が……。今週末だけで済んで、幸運だったのかな。お父さんの怒りっぷりからすると、一ヶ月ぐらい外出禁止にされてもおかしくなかったし。

……変だな。妙に落ち着かない。わたし、何か大事なことを忘れてるんじゃない？

「ねえお母さん、わたし、今日か明日、どこかに出かける予定、入っていたっけ？ 劇場とか、ミクちゃんの家とか」

「お母さんは聞いてないけど……リン、どうかしたの？」

「う、ううん、何でもない。昨日のことで、ちよつと精神的に疲れてるみたい」

劇場ってことは無いわよね。だって、劇場なら大分前に予定が埋

まるから、お母さんにあらかじめ「この日は劇場に行く」って言うているはず。じゃあ、ミクちゃんの家……？ でも、なんだか違うような気がする……。

わたしは結局悩みながら朝食を食べ終えて、自分の部屋へと戻った。どうもすっきりしない。頭の中に何かが引つかかっている。何だろう……。わたしはベッドに腰を下ろして、考え込んだ。

「絶対、何か忘れているような……」

考えたけれど、答えが見つからない。疲れたわたしは、部屋をぐるっと見回した。勉強机と椅子、カーテン、CDとDVDを入れてある棚、本棚……並んだ本が一冊抜けている。あれ、なんでだっけ……。あ、そうか。鏡音君に貸したままだった。

「……あっ！」

ここですよやく、わたしは今日の予定を思い出した。柳影公園で鏡音君と会う約束をしていたんだ。なんでこんな大事なことを忘れていたの！？ わたしから約束したのに。しかもわたしは外出禁止にされてしまった。

どうしよう？ どうしたらいいの？ わたしは時計を見た。そろそろ九時十五分だ。鏡音君の家からだとな柳影公園は結構距離があるから、もう移動している頃よね。電車の中かも……。

わたしは困り果てて、部屋の中をうろつくと歩き回った。どうにかしなくちゃ……。このままじゃ、鏡音君との約束を反故にすることになってしまう。そんなことはしたくない。

でもじゃあ、どうしたらいいの？ わたしは外出禁止なのよ。鏡音君の携帯にかけて、「外に出られなくなった」って言う？ こんな時間が迫った頃に言われても鏡音君が困るだろうし……。

わたしは部屋のドアを開けて、廊下に出た。廊下は静まり返っている。お父さんは家にいない。ルカ姉さんもだ。いるのはお母さんとハク姉さんとお手伝いさんたち。ハク姉さんは自分の部屋から滅多に出て来ないから、みつかる心配はない。

階段を下りて、一階に行く。玄関ホールには誰もいない。お母さ

んは……多分キッチンだろう。お手伝いさんたちは掃除洗濯か……とにかく、目の届くところにはいない。

わたしは靴を履くと、玄関のドアに手をかけて押した。普段から手入れが行き届いているから、そんなに音も立てずに開いてくれる。もう一度振り向く。やっぱり誰もいない。

……ごめんなさい。

声に出さずに呟いて、わたしは、家の外に出た。

柳影公園は、家からかなり距離がある。だから、普段公園や図書館に行く時は、運転手さんに車で送ってもらう。とはいえ、道はなんとなく憶えている。急げば、まだ間に合うかもしれない。

わたしは走って公園に向かった。走るのなんて慣れてないけど、そんなことは言っていられない。走って走って、途中で息があがってしまった。……これ以上は無理。息が整うまでは歩くしかない。歩いたり走ったりしながら、わたしは何とか公園にまで辿りついた。今は何時だろう……嫌だ、時計を忘れて来ちゃった。公園の時計って、どの辺にあったかしら？ ううん、そんなことより、待ち合わせ場所に行かないと。

また走る。ボート乗り場が見えた。近くに時計がある。えっ……十時二十分！？ 二十分も遅刻しちゃった……。

わたしは辺りを見回した。あ……良かった。公園の池を囲む柵の前に、鏡音君が立っている。池の方を見ているので、まだわたしには気づいていない。わたしは鏡音君のいる方に駆け寄った。

「ご……ごめんなさいっ！ 遅刻、しちゃって……」

息があがってしまっているの、そこから先は言葉が出てこなかった。鏡音君が振り向いて、わたしを見て、驚いた表情になる。

「あ……巡音さん」

きちんと説明しないと。そう思うのに、言葉が出て来ない。わたしは必死で、呼吸を整えようとした。

「髪がすごいことになってるけど……」

ああ、走ったから乱れてしまったんだ。髪が顔にかぶさっているので、視界が少し暗い。鏡音君は苦笑すると、わたしの顔にかぶさっている髪をかきあげようとした。弾みで、鏡音君の指がわたしの頬をさつとかすめる。……え。

瞬間、わたしの胸がどきつとした。……今の何？　なんで胸が苦しいの？

「え……」

わたしは何も言えずに、鏡音君を見ていた。向こうもわたしをみつめている。な、何か言わないと……でも、言葉が出て来ない。胸がますます苦しくて、息をするのが辛い。……わたし、走ったせいでどこかおかしくなってしまったの？

「ああああの……本当に、ごめんなさい……」

やつとの思いで、わたしは何とかそれだけを言った。

「……寝坊でもしたの？」

鏡音君はそう訊いてきた。……寝坊つてことにしておいた方が、いいわよね。お父さんに外出禁止にされたのに、こっそり抜け出して来たなんて言ったら、鏡音君にまた気を遣わせてしまう。わたしは頷いた。

「夕べ夜更かしでもした？」

今度はそう訊かれてしまった。えーとえーと、どうしよう。ここも頷いておいた方がいいのかな。

「え……ええ。そんな感じ……」

「なんかあったの？」

どう答えよう……？　あったといえばあったんだけど……。

「あったっていうか、その……」

顔があげられない。わたしは口ごもりながら、足元を見つめていた。

「巡音さん、あっちにベンチがあるから座って話そうか」

そう言われたので、わたしは頷いた。鏡音君、ずっとここで待つ

ていてくれたのよね……。

わたしたちは並んで、池の向かいに置かれているベンチに座った。当然、公園の池が視界に入る。あ、鳥が泳いでいる。……留鳥みたいね。冬鳥が来るにはまだちょっと早いのかな。

座ったものの、何を話せばいいのかわからず、わたしはぼんやりと鳥たちを眺めていた。……なんだか羨ましいな。

「巡音さんって、この公園にはよく来るの？」

「……小さい頃にはね。最近はあるまり……わたしも忙しくて」

お母さんが連れて来てくれたんだっけ。この近くには図書館がある。公園を散歩してから、図書館で本を借りるのが、あの頃のわたしとお母さんのお約束のコースだった。

そう言えば……いつも、わたしとお母さんの二人だったのよね。ルカ姉さんもハク姉さんも一緒になかった。

不意に、涙がこみ上げてきた。……駄目よ、こんなところで泣いたりしちゃ。また、鏡音君を心配させてしまう。わたしは下唇をぎゅっと噛んで、涙をこらえようとした。

「巡音さん……」

鏡音君の声が、氣遣うような色を帯びている。……遅かったみたい。ああ、なんでわたしはこうなんだろう。

「……平気だから」

「あ、あのさ……なんか悩みがあるんだったら、俺でよければ話を聞くよ？」

そう言われてしまった。わたしは「大丈夫だから」と答えようと、戸惑った。……これと同じことを、わたしは昨日、ルカ姉さんに言った。あの後、お父さんにわたしを任せてさっさと行ってしまったことから考えると、ルカ姉さんにはわたしに話してくれる気は無いのだろう。それはつまり、ルカ姉さんはわたしを全く信頼していないということ……改めて認識しなおしたその事実、わたしにはショックだった。

ここで鏡音君に話さなかったら、鏡音君はわたしに信頼されてな

いって、そう、思ってしまったかも。全部は無理だけど……話せるだけ、話してみよう。

「あの……」

「うん？」

「あのね、これから話すこと、誰にも話さないでもらえる？ ミクちゃんにも話してないことなの——だから、鏡音君のお姉さんにも、ミクオ君にも、話さないでいてほしいの」

鏡音君が誰かに話すとは思えなかったけれど、わたしは一応そう念を押した。

「わかった。誰にも言わないよ」

「わたしね……前にも話したと思うけど、姉が二人いるの。上の姉がルカ姉さん。わたしより七つ上で、何でもできる完璧な人なんだけど……何ていうか……完璧すぎるのよ」

鏡音君は首を傾げている。完璧すぎるって言われても、やっぱりちよっとピンと来ないかな。

「どういうこと？」

「えーとね……わたしたちが今通っている高校に、ルカ姉さんはやつぱり中学の頃から通っていて、中高六年の間、ずっと学年トップの成績を取り続けていたの」

さすがに鏡音君は驚いたようだった。でも、その後でまた首を傾げている。

「それはただ単に勉強が得意なだけなんじゃ……」

うーん……どう説明したら、わかってもらえるかな……。きちんと説明しないと伝わらないだろうけれど、適切な言葉を探すのが難しい。

「ルカ姉さんはね、絶対に間違ったことはしない人なの。お作法も立ち居振る舞いも完璧で、どこに出しても褒められる人なのよ。言いつけはいつもきちんと守って、寄り道なんてしないし、門限もしつかり守るし、服装だって一筋の乱れも無いし……」

わたしがそう説明してみると、鏡音君は段々啞然とした表情にな

ってきた。これで伝わっただろうか……。

「寝転がってテレビ見ながらおせんべい齧ってたりとかは……」

「そんなお行儀の悪いこと、絶対にしないわ」

間違ってもしないわよね。ルカ姉さんがだらけているところなんて、わたしは見た記憶がない。

「わたしの記憶の中のルカ姉さんって、いつも机に向かっているの。お勉強をしているか、本を読んでいるかのどっちかで。その本も、小説とかじゃなくて、何かの専門書みたいな難しい本ばかりだし……」

ルカ姉さんが遊んでるところなんて見たことがない。たまにテレビを見てると思ったら、決まってニュース番組かドキュメンタリーだ。ルカ姉さんは、一体何が楽しいんだろう。

「そのお姉さん、趣味は？」

「……多分、無いわ。趣味だけじゃない。わたし、ルカ姉さんが友達と一緒に出かけるところも、友達が遊びに来たところも、見たことがないの。出された食事はなんでも残さず食べるけど、ご飯の好き嫌いを言ったこともないわ。着る物はファッション雑誌のコーディネートそのままって感じだし」

鏡音君はますます啞然とした表情になって、それからこう言った。「人間というよりロボットなんじゃ……」

「確かにちよつとそんな感じがするの。……完全にロボットってわけでもないみたいだけど」

完全にロボットなら、わたしを叩いたりはしないわよね……。でも、昨日はもう駄目みたいだった。わたし、どうしたらいいんだろう……。

「それで、お姉さんが異常なのはわかったけど……巡音さんは何を悩んでるの？」

わたしの悩み……わたしが悩んでいるのは……。

「……わたし、ルカ姉さんが何を考えているのかが知りたいの。だから、それを訊いてみようとしたんだけど……何だか全然ちゃんと

した話にならなくて」

「どういう感じ？」

ちゃんとした話にならない、じゃあ、わかりにくいみたい。じゃあどうしたら……あ、そうだね。

「わたし、ルカ姉さんになったつもりで返事するから、鏡音君、何か話しかけてみて」

「うーん……じゃあ、木の葉が赤くなってるね」

ルカ姉さんなら、こういう時は……。

「……ええ、そうね」

「紅葉は好き？」

「……嫌いじゃないわ」

「そこに鳥がいるよ」

「……いるわね」

「多分キジバトだと思うけど……」

「……キジバトなんだ」

「キジバトって首のところに縞模様があるんだよ。あれで見分けがつくんだ」

「……そう」

「あの……俺と話すのそんなに嫌？」

「……いいえ」

「じゃ、なんでさっきから返事全部一言なの」

「……さあ」

「じゃ、俺と話していて楽しい？」

「…………」

あれ？ ルカ姉さん、こういう時はどう返事するのかしら？ 楽しくない、って言うことはないわよね。じゃあ、楽しいって答える？ それもないわよね。じゃあ、楽しくなくはない、かな？ ……なんだか、よくわからなくなってきた。

「ストップ。シミュレーションはもういいよ。なんとなくわかったから」

鏡音君がそう言ったので、わたしはルカ姉さんの真似をやめた。

「本人を見ないでこういうことを言うのは、本当は良くないんだけど……そのお姉さん、多分、何も考えてないと思う」

何も考えてない……。以前のわたしと同じだ。

「やっぱり……そうなのかな……」

じゃあ……どうして、ルカ姉さんは「考えること」をやめてしまったんだろう。わたしが「考えること」をやめたのは、お父さんに怒られるのが怖かったからだ。……もしかして、ルカ姉さんもお父さんに怒られるのが怖かったの？ 考えることをやめて「いい子」になったの？

でも、今それを訊いても……どうなるの？ それに、ルカ姉さん、返事してくれるの？ 「考えること」から逃げているんだったら、わたしが何を言っても伝わらないかもしれない。

「あの……巡音さん、ちよつといい？」

自分の考えに沈んでいたわたしは、鏡音君の遠慮がちなそんな声で、現実を引き戻された。

「あ、うん。何？」

「多分これ、ひどく失礼な質問だと思うんだけど……巡音さんも、時々、さっきみたいな状態になってたことがあったんだよ。自覚があるのかどうかはわからないし、最近はそんな対応しないから、言わない方がいいような気はするんだけど……やっぱり気になって……」

鏡音君が気づかないわけ、ないわよね。だって、わたしが自覚できたのは、鏡音君とのやりとりがきっかけだったんだもの。

「……わかってる。わたし、考えるってことから逃げてた。自分の考えを持って、それを否定されるのが怖かったの。私自身が否定されているみたいだし……」

「でも、結局、自分の考えとか意見を持つようになったんだよね？ きっかけは？」

あれ……自分ではその辺りには気づいてないのかな。鏡音君のお

かげなのに。

「多分、鏡音君がわたしの問題点を指摘したからだと思う」

「え？」

「鏡音君、わたしに言ったわよね。『自分の意見ってものがないの？』って。あれ、そのとおりで、わたし何も言えなくて、シヨックでわたし、頭の中が真っ白になって……でもその後で気がついたの。わたし、考えることから逃げていたんだって」

はつきり認識できたのはもっと後になってからだけど。でも、結局、わたしはあれをきっかけに、少しずつ、自分で考えるようになっていった。それを強めてくれたのは、鏡音君の家に遊びに行ったことだった。

「同じことをお姉さんにやってみたら？」

「もうやってみたわ。でも……駄目だったの」

何がいけなかったんだろう。わたしじゃ、力が足りないのかな……。

「……巡音さん、もう一人のお姉さんのこと、訊いてもいい？」

鏡音君に訊かれたので、わたしは頷いた。ルカ姉さんのことを話したのだから、ハク姉さんのことも話してしまおう。

「もう一人のお姉さん……ハクさんだっけ。その人はロボットじゃないんだよね？ ロボットだったら、俺の姉貴と話なんかできないだろうし……」

「ハク姉さんはロボットじゃないけど……三年前から部屋に引きこもって出て来ないの。わたしが部屋に行けば入れてくれるけど、他の家族は無理。絶対に入れようとしないし、話もしていないわ」

鏡音君は啞然とした表情になった。……驚くわよね、やっぱり。「何だってまたそのお姉さんは引きこもりを？」

「……それがわからないの。ハク姉さん、何も話してくれないし」理由は話してもらっていない。訊いてみたこともあるけれど「あんたは知らなくていい」の一点張りだった。訊くと機嫌が悪くなるので、わたしはもう、その手のことは訊かないようにしている。

「でも……もしかしたら、わたしのせいかも」

ハク姉さんが引きこもったのは、わたしが原因なんじゃないか。わたしは、それが気になっていた。

「巡音さんのせいってどういうこと？」

「うちの学校、お父さんの母校でもあるの。お父さんはわたしたちを全員、あそこに行かせたかったんだけど……ハク姉さんだけ、受験に失敗してしまったの。わたしとハク姉さんは四つ離れているから、ハク姉さんが高校受験に失敗した次の年、わたしは中学受験することになって……わたしの方は受かったのよ。ハク姉さん……もしかしたら、それがストレスになったのかも……」

あの頃のわたしは、お父さんが怖くて、言われるままに勉強し続けて合格した。わたしが合格することで、ハク姉さんがどう思うのかなんて、全く考えていなかった。

わたしがハク姉さんのことを考えていると、不意に鏡音君が、はつとした表情になって、こう訊いてきた。

「巡音さん、お姉さんが引きこもったのは三年前からって言ったよね？」

「ええ。三年前の冬だったわ」

「じゃ、巡音さんは中学二年だね？」

「ええ」

「じゃあ、原因は巡音さんじゃないよ。時間が開きすぎてる。巡音さんが合格したことが原因なら、もっと早く引きこもってると思う」

え……？ あれ……？ 言われてみれば……。じゃあ、わたしが原因じゃないの？ 「同じ遺伝子からできてるのに不公平」って言われたりしたから、わたしがいけないのかと思っていた。

「姉貴の話だと、高校生活自体は結構楽しんでいたみたいだし、受験の失敗が引きこもりの原因とは考えにくいよ」

「え……そうなの？」

「姉貴はこの手の話で嘘つかないよ。巡音さんのお姉さんより二年上だから、引きこもった原因までは知らないだろうけど」

わたしは、少しだけ安心した。確かに高校の頃のハク姉さんは、部活に真面目に取り組んでいたっけ。お母さんに連れられて、何度か試合の応援にも行った。ハク姉さんは自分はレギュラーじゃないのにつて、嫌がっていたけれど。

でも……じゃあ、ハク姉さんが引きこもった原因、結局、何なんだろう？ 訊いても、多分教えてくれないわよね……。

「あのさ……巡音さん、お姉さんのことは、あんまり悩んでもしょうがないと思うよ。兄や姉って立場の人は、弟や妹に弱みを見せたくないって思うみたいなんだよね。俺の姉貴だって、あんまりそういうこと言わないしさ」

それはそうかもしれないけれど……。でも……。

「でも、鏡音君のお姉さんはわたしの姉とは全然違うわ。仕事もしてるし、鏡音君と毎日話もしてるんでしょう？ わたし一週間前にハク姉さんと揉めちゃったんだけど、それからずっとハク姉さんとは話してないの。ルカ姉さんとは、昨日話したんだけど全然埒が明かないし」

……さすがにお父さんに叱られた話はできなかった。外出禁止にされたなんて言ったら、また気を遣わせてしまう。

鏡音君は思案する表情になって、今度はこんなことを切り出してきた。

「あの……巡音さん、さっき『誰にも言わない』って約束しちゃったけど、ハクさんって人のことを、姉貴に話したら駄目かな？ 実は姉貴、ずっと心配してるんだよ。何かあったんじゃないかって」

え……？ そうなの？ 意外なことを言われたので、わたしは驚いてしまった。

「この前に巡音さんが家に来た時の受け答えで、『なんかおかしいな』って勘づいたみたいで……あれで結構勘がいいんだよ。姉貴はハクさんの先輩なわけだから、無関係じゃないしさ」

そうなんだ……どうしよう。でも、鏡音君のお姉さんが心配するのは、仕方のないことかもしれない。ハク姉さんのこと、懐かしが

つてたもの。

色々と考えた結果、わたしは頷いた。これで何か、ちょっとでもいい方向に向かつてくれるといいんだけど……。

一部とはいえ結論が出たせいか、わたしは急に力が抜けるのを感じた。ベンチの背もたれに身体を預ける。公園まで走ったせいか、ちよつと疲れたかも……。

十一月だけど、今日は気温が高くて暖かい。ここ、日差しがよく当たるのよね……。なんだか、ひどく瞼が重たい……。

どうしても影がほしいの（後書き）

登場する公園は架空のものです。井の頭公園みたいな感じですが、もうちょっとこじんまりしてます、多分。

ちょうど季節にそんなに差が無いので近所の公園行って来たんですが、まだ冬の鳥さんは来てませんでした。

やがて綺麗に澄んでゆるやかに

「ルカおねえちゃん、あそんで」

「今お勉強でいそがしいの」

「ルカおねえちゃん、なんでいつもおべんきょうなの？」

「大事なことから。リン、あんたもつとお勉強なさい」

「……リン、おべんきょうきらい」

「お勉強ができないと、パパにほめてもらえないわよ」

「いいもん、ほめてもらえなくなつて。ママはそんなにがんばらなくてもいいって、いつてくれたもん」

「……ああ、そうなの」

「あそんで！」

「あつち行つてなさい！ わたしの邪魔だけはしないで！ でないと、パパに言いつけるわよ！」

ルカ姉さん、わたしが小さい時は、まだ怒鳴ったりすることもあったんだっけ。いつから、怒鳴らなくなつちやつたのかな……。

でも……怒られた記憶はあつても、遊んでもらつた記憶はないのよね……。机に向かつている姿しか憶えてない。

「……ハクおねえちゃん」

「どうしたの？」

「ルカおねえちゃんにおこられたの。おべんきょうのじゃまだからくるなつて」

「リン……お姉ちゃんはね、お勉強のじやまはされたくないのよ」

「なんでルカおねえちゃん、いつもあそんでくれないの？」

「なんでって……なんでかなあ。あたしにもわかんない。なんであんなにお勉強が好きなのかは」

「ハクおねえちゃん、あそんで」

「あたしも勉強が……ああ、わかつたわかつた、遊んであげるわよ。でも一時間だけよ。何するの？」

「リン、おままごとがいい」

「……はいはい」

ああ、そうか。ハク姉さんには、遊んでもらった記憶があるんだ。だから、わたし、お父さんが自慢の娘だっというルカ姉さんより、ハク姉さんの方が好きだったんだ。

うーん……あれ……。

「え？」

不意に意識が覚醒し、わたしは身体を起こした。ルカ姉さんもハク姉さんもいない。というか、ここ、外よね？ 目の前の景色は大きな池とそれを囲む緑……柳影公園だ。なんでわたし、ここにいるの？

「あ……巡音さん、起きた？」

かけられた声に、驚いて隣を見る。鏡音君が、わたしの隣に座っている。……起きたって訊いてくるってことは、わたし、眠ってたの？ 柳影公園のベンチなんかで？ 恥ずかしさで、一瞬で頬が熱くなる。

「ああああの、わたし……」

「俺の肩を枕にして気持ち良さそうに寝てたから、起こすのもなんかかわいそうで……」

わ、わたししたらなんてことを……。これ以上気を遣わせないようにつて思っただばかりなのに。どうしよう、あわせる顔がない。

「ところで巡音さん、昼食はどうする？ 今日はお弁当用意してないみたいだけど」

え……お昼ごはん？ あれ？ そう言えば、今は何時なの？

「あ、あの……今何時？」

普段は外出する時に腕時計をするんだけど、今日は家に置いてきてしまった。公園の時計はこの位置からでは見えない。

「一時になると」

自分の時計を見て、鏡音君はそう教えてくれた。一時なんだ。確かにお昼ごはんの時間だけど……。わたし、鏡音君との約束を思い出して、後先考えずに慌てて家を飛び出してきてしまったんだっけ。そもそも外出禁止にされているわけだから、お母さんにお弁当用意してなんて言えなかったし……。

「で、俺、ここは初めて来たんだけど、売店とかある？」

鏡音君の方は何か買って食べるつもりみたい。売店……確か……。

「ボート乗り場の近くにあるわ」

「じゃ、そこで何か買おうか」

わたしはうなずきかけて、はっとなった。まずい、どうしよう……。

「どうしたの？」

「お財布……忘れて来ちゃった……」

着の身着のまま飛び出したものだから、家を出る時に持って出るようなものを全部置いて来てしまった。お財布も携帯も持っていない。

わたしの言葉を聞いた鏡音君は、笑い出しそうになるのをこらえている。……わたし、バカみたい。恥ずかしくて、顔があげられない。

「じゃ、俺がおごるよ」

「え……そんな……」

そこまでしてもらったら、幾らなんでも鏡音君に悪いもの。

「あのね巡音さん、俺、空腹の人間前にして、自分だけ食事できるほど神経太くないんだけど」

鏡音君はため息混じりにそう言い出した。……どういふことなのか、よくわからない。

「だからね、俺が代金払うから一緒に何か食べるか、それとも二人して昼飯抜くか、どっちかってこと。で、俺としては腹減ってるからちゃんと食べたいの」

あ、あれ？　つまり、わたしが遠慮してしまうと、鏡音君もお昼

食べないってこと？ それはよくないわよね。でも、だからといって好意に甘えてばかりというのも……。え？ じゃあ、どうしたらいいの？

「そういうわけだから、食べるもの買いに行こうね」

わたしがそうやって迷っていると、鏡音君はわたしの手をつかんで立ち上がった。引つ張られたので、わたしも立ってしまう。鏡音君はそのまま、わたしの手を引いて歩き出した。

結局そのまま手を引かれて、売店まで来てしまった。鏡音君はさつさと買い物籠を手にとって、品物を籠の中に入れていく。「サンドイッチでいい？」と訊かれたので、わたしは頷いた。鏡音君はそのままレジに籠を持って行って、お勘定を済ませている。

売店の近くには、食事をするためのテーブルと椅子が幾つか置かれている。ほとんど埋まっていたけれど、ちょうど一つだけ場所が空いたので、わたしたちはそこに向かった。向かい合わせで座る。

鏡音君がビニール袋の中からサンドイッチとお茶を取り出して、わたしの前に置いてくれた。わたしはちょっと困って、サンドイッチを眺める。

「あの……本当にごめんなさい」

「それも正しいから、食べなよ」

そう言う鏡音君も、食べ物に手をつけようとはしていない。わたしが手をつけるまで、食べないつもりなのかも……。わたしはサンドイッチを手にとった。ビニールに包まれている。普段この手のものを食べなれてないので——基本、買い食いは禁止の家だし、お母さんはちゃんとした食事にこだわるので、できあいのものはまず買ってくる——開けるのに少し苦労した。

わたしが食べ始めると、鏡音君も食べ始めた。あ……やっぱりそうだったんだ。なんでいつも、気ばかり遣わせちゃうのかな……。
「……そう言えば巡音さん、『ピグマリオン』のことだけど」

食べながら鏡音君が訊いてきた。あ、いけない。もともとは『ピグマリオン』のことを話す為に待ち合わせ、してたのよね。なのにわたしったら、自分の問題ばかり話しちゃって……。

「あの中で、イライザが着物を着るシーンがあっただじゃない？ あれ、どう思った？」

鏡音君にそう続けられて、沈みかけていたわたしの思考は引き戻された。意見を求められているのだから、ちゃんと返事をしないと着物……。

「作者は時代性とか、異国情緒とか、そういう雰囲気を出したかったんだろうとは思うの。もしかしたらあの時代のイギリスでは、日本のことが流行の話題だったのかもしれないし。でも、わたしからすると、ちょっとついていけなかったわ」

日本旅行のお土産に着物を買って来ちゃった、というのはまだわかる。でも……。

「着物って、着るのすごく大変なもの。わたしもお母さんに手伝わしてもらわないと着ることなんてできないし……外国の人がいきなり見ても、そもそもの着方がわからないと思うわ。それなのに『見事に着付けした』なんて、どう考えても無理だと思うの。羽織って出てくるのならわかるけれど」

体型にあわせて仕立てである洋服とは違い、直線に裁って仕立てる和服は、衣服の方を身体にあわせて紐で縛って着ることになる。帯の結び方だつて難しいし……。見る分には華やかでいいけれど、着るのはものすごく大変だ。

「巡音さんって、着物着たりするの？」

「ええ、お正月にね」

なんとなく、これが我が家のしきたりのようになってる。お座敷で、和服を着てお客様を迎えるというのが。……あんまり楽しくない行事だ。

「着物って、そんなに苦しいの？ 成人式の時に姉貴が悲鳴あげてただけ」

「基本紐で締めて着る衣服だから……しっかり着付けないと緩んできてしまうの。慣れもあると思うけど、お正月ぐらいしか着ないから、どうしても慣れなくなつて……」

鏡音君のお姉さんのような体型だと、かなり補正もいるわよね。胸をさらして潰して、ウエストにタオルも巻かないと駄目かも。ルカ姉さんはそうしている。ハク姉さんはどうだったかな……。ちなみに、わたしは今のところ補正は必要ない。

「上演する時、ここのシーンを換えようかなと思うんだよね。うちの部員に着物を着ろつて言うのは無理があるし」

鏡音君はそんな話を始めた。確かに舞台上で着物を着るのは大変だろうけど……。

「変えちゃったりしていいの？」

「いいんだよ。高校の演劇部で全部を完璧にやるなんて無理があるし、柔軟に対応しないと。『ロボット』の時も、回りくどい台詞とかは結構削つたんだ」

演劇部の鏡音君が言うのなら、いいのかな……。バーナード・シヨーだつて、書いた時はこの戯曲が、日本で上演されることなんて考えていなかっただろうし……。

「でも、着物を着ないとしたら、どうするの？」

「何か適当に服を着せることにしようと思つているけど……何なら自然だと思ふ？ 独身男の家に若い女性用の衣類があるつての、変だと思ふんだよね」

あの状況でイライザに着せられる衣服……インドのサリーとかだと、やっぱり「誰が着せたの？」だし……。それ以前に演劇部の人に着れないわよね……。

「家政婦のピアス夫人の若い時の服とかは？ あの人って住み込みよね？」

これもちよつと無理があるような気がするけど、捨てるにしのびなくてとつてあつたのかなら。

「それなら良さそうだ」

鏡音君がそう言うてくれたので、わたしは安堵した。

「巡音さんってやっぱり頭いいね」

え……？ 褒められた……？ あれ……頬が熱い……。それに、なんで動悸が激しくなるの……？ 走ったわけじゃないのに……。

「台詞の変更とかに関しても、一緒に考えてほしいんだけど、いいかな？」

一緒に……。

「あ……ええ」

わたしは、頷くのがやっとだった。どうしてなのか、自分でもよくわかっていなかったけれど。

やがて綺麗に澄んでゆるやかに（後書き）

めーちゃんの体型だと、着物を着る時補正は必須だと思うんですよ……多分ルカさんも。ハクも必要でしょうが、そこまで胸が成長する頃には引きこもっちゃったようです。

瞳の中は星でいっぱい

結局、わたしは鏡音君と、『ピグマリオン』の話をしたり、公園を散歩したりして、三時ぐらいまで一緒に過ごしてしまった。……楽しいと思える時間は、あっという間に過ぎてしまう。

本音を言えばもっと公園にいたかったけれど、さすがにそろそろ帰らなくてはまずい。公園から自宅までは歩いて四十分ぐらいた。門限にはまだゆとりがあるけれど、状況が状況だし、ギリギリというのもよくないだろう。

わたしは鏡音君に今日のことをありがとうと言って、帰路に着いた。家が近づくにつれ、わたしの気分も沈みこんでいく。……帰りたいくない。

お父さんの言いつけを破って、勝手に家を抜け出したのはわたしだ。悪いのはわたし。

それに……わたしは、鏡音君との約束を破りたくなかった。だから、言いつけを破っても、会いに行くって決めたの。自分で決めたことなんだから、責任は自分で取らなくちゃ。例えばただけひどい目にあうとしても……ね。

覚悟は決まっているはずだけど……やっぱり怖い。

やがて家に着いた。わたしは深く息を吸うと、自宅の玄関のドアを開けた。

「……ただいま」

小さい声で言っ、中に入る。ちょうどそこへ、二階からお手伝いさんが下りて来た。

「リンお嬢様！」

お手伝いさんはびっくりして、残りの階段を駆け下りて来た。そんなに走ったら危ない……と、わたしの頭のどこかが、他人事のように考えている。

「お嬢様、どこへ行かれていたんですか!? 奥様はそれはもうご

心配でご心配で……」

「あの……」

わたしが何か言う前に、お手伝いさんはくるつと踵を返すと、奥に向かつて駆け出して行った。「奥様！ リンお嬢様がお戻りになられましたよ！」と叫びながら。

事態はわたしが考えていたのよりも、ずっとおおごとになっているようだった。困ったな……。

「リン！」

わたしが玄関ホールにぼんやりと立っていると、奥からお母さんが駆け出して来た。わたしの方に駆け寄ってきて……それから頬に痛みが走った。

「一体どこに行っていたの！？ 部屋にいないからものすごく心配したのよ！？」

お母さんはわたしの両肩をつかんで、一気にそうまくし立てた。

あ……心配、させちゃったんだ……。

「もしかしたら、最悪の事態になったかもって……」

わたしより、お母さんの方が泣きそうだった。

「……ごめんなさい」

言いつけを破ったことを後悔してはいないけれど、お母さんを心配させたのはいけないことだ。だから、わたしは謝った。

「謝るのはいいから、どこに行っていたのか言ってちょうだい」

「……柳影公園。その……家にいると、息が詰まるような気がして新鮮な空気が吸いたかったの。連絡すればよかったんだろうけど、携帯を家に置いて来ちゃって……」

本当のことは言えない。だから、わたしは嘘をついた。……最近 は嘘ばかりついている。公園にいたのと、携帯を忘れたのは本当だけど……。

「……リン、もう二度と、お母さんに何も言わずに家を出たりしないで。出かける時は、必ずどこに行くのか言ってちょうだい。いいわね？」

「う、うん……そうする。出かける時は、お母さんにちゃんと出かけるって言つから」

わたしがそう言うと、お母さんは少し安心したようだった。

「あの……お母さん、お父さんは」

言いかけたわたしを、お母さんは遮った。

「お父さんには言わなくていいわ。昨日の今日だし……。お手伝いさんたちには、お母さんから口止めしておくから。リンは心配しなくていいのよ」

「……ありがとう」

わたしは少し気が楽になった。いけないことだけど……。でも、お父さんのお説教を聞かずに済むのはありがたい。

「リン、おやつを用意してあげるから、手を洗ってらっしゃい」

お母さんはいつもの口調に戻っていた。わたしは、少し申し訳ない気持ちになる。

「あの……お母さん、いいの？ わたし、言いつけを破ったのに」「いいのよ。おやつのお母さんの担当だから」

そう言われたので、わたしは洗面所に行った。手を洗ってから居間に行く。おやつは大抵、こっちで食べる。

居間のソファで座って待っていると、お母さんが、ワゴンを押して入ってきた。ワゴンの上にはお茶道具一式と、サントノーレの乗ったお皿が乗っている。

「お母さん……これ、サントノーレ……」

わたしは驚いて、目の前を見ていた。お母さんがくすつと笑って、わたしの前に紅茶のカップと、切り分けたサントノーレを乗せたお皿を置く。

「いいから食べなさい」

わたしは済まない気持ちで、フォークを手に取った。サントノーレは、ものすごく手間のかかるお菓子だ。スポンジケーキ（一般的にはビスケット生地を使うのだけど、お母さんはスポンジを台にするのが好みなのだ）に生クリームを塗って、カスタードを詰めた

小さなシュークリームをぐるっと飾ってキャラメルをかけ、中央には生クリームを搾り出して飾りにする。お母さんはスポンジもシューもカスタードもキャラメルも全部手作りするから、手間もかかるし時間もかかる。

豪華で華やかで、美味しいお菓子だけど、あまり作ってはくれないお菓子。それがサントノーレ。……どうして今日これを作ったのかなんて、訊くまでもないこと。

「……美味しい？」

「ええ」

わたしが小さい頃から、お母さんはお菓子を焼いていた。もちろん、焼き菓子じゃなくて、冷やし菓子の時もある。でも、一番に思い出すのは、オーブンの前にいるお母さんの姿だ。時間が来るとオーブンを開けて、綺麗に焼き色のついたお菓子を取り出す。すぐに食べたいとねだるわたしに「まだ熱いから、少し冷めてからよ」と言葉をかける。

……少し大きくなると、わたしもエプロンをして、お母さんの手伝いをしたんだっけ。最初は全然役に立ってなかったどころか、むしろ邪魔になってばかりだったけど、お母さんはわたしを追い払おうとはしなかった。初めて自分だけの力で焼いたクッキーが、みっともない仕上がりになってしまった時も「上手に焼けたわね」と言ってくれた。

「お母さん、カスタードにコアントローを入れた？」

「入れたわ。よくわかるわね」

だって少しだけ、オレンジの香りがするもの。グランマルニエならもう少し強い香りになるから、これはコアントローだ。

お母さんに薦められるまま、わたしはサントノーレを二切れ食べてしまった。さすがにお腹がいっぱいになる。

あ……そうだ。

「ねえ、お母さん」

「どうしたの？」

「あの……明日、キッチンを使ってもいい？ 久しぶりに、クッキーを焼いてみたいの」

「いいわよ。基本的な材料は全部揃ってるわ。どこにしまってるかわかるわね？」

わたしは頷いた。どんなクッキーにしようかな。クッキーと言っても色んなタイプがある。甘いもの、甘くないもの、素朴なもの、見た目の可愛いもの、簡単にできるもの、手の込んだもの……。久しぶりだから、難しすぎないものの方がいいわよね。

瞳の中は星でいっぱい（後書き）

このシーンでリンのお母さんが作っていたおやつは、サントノーレとクグロフの二種類の候補があったんですが、結局見た目の華やかさでサントノーレにしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9358u/>

ロミオとシンデレラ

2011年11月30日19時48分発行